

靈界物語 第七三卷 天祥地瑞 子の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十三卷』天聲社

1983(昭和58)年05月28日 七版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 紫微天界 しびてんかい

第一章 天之峰火夫の神 あまのみねひを かみ（一八三二）

第二章 高天原 たかあまはら（一八三三）

第三章 天之高火男の神あめのたかひを（一八三四）

第四章 スの神聲しんせい（一八三五）

第五章 言幸比古の神ことさちひこ（一八三六）

第六章 言幸比女の神ことさちひめ（一八三七）

第七章 太袂おほはらひ（一八三八）

第八章 國生み神生みの段くにう かみう（一八三九）

第九章 香具の木の實かぐ こと（一八四〇）

第一〇章 婚とつぎの御歌みうた（一八四一）

第十一章 紫微しびの宮司みやつかさ（一八四二）

第十二章 水すゐ火くわの活動くわつどう（一八四三）

第十三章 神かみの述懷歌じゆつくわいか（一八四四）

第十四章 神かみの述懷歌じゆつくわいか（一八四五）

第二篇 高照神風たかてるしんぶう

第三篇

東雲神國しのめしんこく

第一五章	國生みの旅 <small>くにう たび</small> 〔一八四六〕
第一六章	八洲の河 <small>やす かは</small> 〔一八四七〕
第一七章	駒の嘶 <small>こま いなな</small> き〔一八四八〕
第一八章	佐田の辻 <small>さだ つじ</small> 〔一八四九〕
第一九章	高日の宮 <small>たかひ みや</small> 〔一八五〇〕
第二〇章	廻り逢 <small>めぐ あ</small> ひ〔一八五一〕
第二一章	楔の段 <small>みそぎ だん</small> 〔一八五二〕
第二二章	御子生みの段 <small>みこ だん</small> 〔一八五三〕
第二三章	中 <small>なか</small> の高 <small>たか</small> 瀧 <small>たき</small> 〔一八五四〕
第二四章	天國 <small>てんこく</small> の旅 <small>たび</small> 〔一八五五〕
第二五章	言靈 <small>ことたま</small> の瀧 <small>たき</small> 〔一八五六〕

第二六章	主神 <small>スしん</small> の降臨 <small>かうりん</small> 〔一八五七〕
第二七章	神祕 <small>しんぴ</small> の扉 <small>とびら</small> 〔一八五八〕
第二八章	心内 <small>しんない</small> 大蛇 <small>をろち</small> 〔一八五九〕
第二九章	無花果 <small>いちじゆく</small> 〔一八六〇〕
第三〇章	日向 <small>ひむか</small> の河波 <small>かはなみ</small> 〔一八六一〕
第三一章	夕暮 <small>ゆふぐれ</small> の館 <small>やかた</small> 〔一八六二〕
第三二章	玉泉 <small>ぎよくせん</small> の月 <small>つき</small> 〔一八六三〕
第三三章	四馬 <small>しば</small> の遠乘 <small>とほのり</small> 〔一八六四〕
第三四章	國魂 <small>くにたま</small> の發生 <small>はつせい</small> 〔一八六五〕
第三五章	四鳥 <small>してう</small> の別れ <small>わか</small> 〔一八六六〕
第三六章	荒野 <small>あらの</small> の駿馬 <small>はやこま</small> 〔一八六七〕
第三七章	玉手 <small>たまで</small> の清宮 <small>きよみや</small> 〔一八六八〕

顧みれば大正十年十月十八日（舊曆九月十八日）天津神の神示と開祖神靈の請  
 求により、大本事件の眞最中、本宮山下の松雲閣に於て「靈界物語」と命名し、  
 加藤明子、櫻井重雄、外山豊二、北村隆光その他の諸子と共に口述編纂に着手し、  
 中途エスペラント研究に關し、エス和辭典を著述し、次いで大正十三年二月入蒙  
 の壯舉に出で、ふたたび十三年の冬より口述を始め、同十五年の五月二十二日、  
 加藤明子の筆録を以て七十二卷の終りを告げたるが、その後豫定の百二十卷を口  
 述せむと思ひつつ、天恩郷の開設等にて寸暇なく、今日に及べり。神務は年を逐  
 ひますます繁忙となり、口述の寸暇を見出す能はざりしが、非常時日本の状態に  
 鑑み、一切の雑事を放棄し、いよいよ昭和八年十月四日（舊曆八月十五日）の仲  
 秋の吉日を卜し、庚の卷天祥地瑞と命名して口述する事とはなりぬ。  
 天氣晴朗にして風清く日は麗なり。天恩郷内玉泉苑の中島、千歳庵に於て、心  
 を清め身を淨め、神命の加護のもとに口述編纂の長途にのぼることとはなりぬ。

今回は東雲社長加藤明子、社長補森良仁、社員谷前清月、林閑月、白石堇月、内  
崎崎月をもつて此の大神業に従事せむとし、月宮殿、大祥殿、高天閣等の各神殿  
に祈願を凝らし本著の無事完成せむ事を祈願せり。

嗚呼惟神靈幸倍坐世。

昭和八年十月四日 舊八月十五日

於天恩郷 千歳庵 口述者識



三千大千世界の宇宙を創造し給ひし大國常立の大神は、【ウ】聲の言靈の御  
 水火より天之道立の神を生みたまひ、宇宙の世界を教へ導き給ひたるが、數百億  
 年の後に至りて、稚姫君命の靈性の御靈代として尊き神人と顯現し、三千世界の  
 修理固成を言依さし給ひ、又【ア】の言靈より生り出でし太元顯津男の神の御靈  
 も神人と現れ、共に神業を勵み給ひける。天の時茲に到りて嚴の御靈稚姫君命は  
 再び天津御國に歸り給ひ、嚴の御靈の神業一切を瑞の御靈に受け繼がせ給ひける。  
 ここに嚴の御靈瑞の御靈の活動を合して伊都能賣の御靈と現れ、萬劫末代の教を  
 固むる神業に奉仕せしめ給ひたるなり。  
 嚴の御靈は荒魂の勇と和魂の親を主とし、奇魂の智と幸魂の愛は従となりて活  
 き給ひ、瑞の御靈は奇魂の智と幸魂の愛主となり、荒魂の勇と和魂の親は従とな  
 りて世に現れ、今や破れむとする天地を修理固成すべく現れ出でたるなり。而し  
 て嚴の御靈は經の神業なれば言行共に一々萬々確固不易なるに反し、瑞の御靈の

神業は操縦與奪其權有我が力徳を以て神業に奉仕し給ふ神定めなり。神諭にも、  
經の御用はビクとも動かれず鵝の毛の露程も變らぬが、瑞の御靈は緯の御用なれ  
ば機の緯絲のごとく、右に左に干變萬化の活動あることを示されたり。しかるに  
今や伊都能賣の御靈と顯現したれば、經緯兩方面を合して神代の顯現に従事し給  
ふこととなりたれば、益々その行動の變幻出没自由自在なるは到底凡夫の窺知し  
得べきものにあらず。斯くして大宇宙の神界治まり、三千世界の更生となりて、  
全地上の更生の神業は成就すべきなり。この消息を知らずして大神業に奉仕せむ  
とするものは、恰も木に據つて魚を求むる如く、海底に野菜を探り、田園に蛤を  
漁るが如し。

神は至大無外至小無内在所如無不在所如無底のものなれば、從來の各種の宗教  
や賢哲の道德率を標準としては、伊都能賣神の御神業は知り得べき限りにあらず。  
例へば機を織るにしても經絲はビクとも處を變ぜず緊張し切りて棚にかかり、緯  
絲は管に巻かれ杼に吞まれて小さき穴より一筋の絲を吐き出し、右に左に經絲の  
間を潛り立派なる綾の機を織上ぐる如きものなり。機を織る緯絲は一度通ずれば

二度三度箴にて厳しく打たれつつ、ここに初めて機の經綸は出來上るものなり。

綾機の緯絲こそは苦しけれ

一つ通せば三度打たれつ

神界の深遠微妙なる經綸については千變萬化極まりなく、善惡相混じ美醜互に交りて完全なる天地は造られつつあるなり。伊都能賣神の神靈も亦その如く三十三相は言ふも更なり、幾百千相にも限りなく臨機應變して神業に依さし給へば、凡人小智の窺知すべき限りにあらざるを知るべし。

且つ嚴の御靈の教は神人一般に對し、仁義道德を教へ夫婦の制度を固め、假にも犯すべからざるの神律なり。故に瑞の御靈の大神は紫微天界の初めより太元顯津男の神と現れまして、國生み神生みの神業に奉仕し給ひ、萬代不動の經綸を行ひ給ひつつ若返り若返りつつ末世に至るまでも活動給ふなり。其間幾回となく肉體を以て宇宙の天界に出沒し、無始無終に其の經綸を續かせ給へば、他の神々は

決して其の行爲に習ふべからざるを主の神より嚴定されつつ今日に至れるなり。  
神諭に經の御用は少しも動かされず變へられないが、緯の御用は人間の知恵や  
學問にては悟り得べきものにあらざれば、神に仕ふる信徒達は其の心にて奉仕せ  
ざれば神界經綸の邪魔となると示されてあるのは、此間の消息を傳へられたるも  
のなり。

故に本書は有徳の信者又は上根の身魂にして神理を解し得る底の身魂にあらざ  
れば授與せざるものとす。この物語を讀みて神理を覺悟する人士は從來の心の持  
方を一掃し、三千世界更生の爲に其の力を添へられむ事を希望して止まざるなり。  
賢哲の所謂中庸、中和、大中、其中は神府の中とは大に異れり。故に現代人の  
見て善と爲す事も、神の眼より視て惡なる事あり、又現代人の目より惡と視るこ  
とも神界にては善と爲すことあり。是を善惡不二の眞諦といふ、嗚呼惟神靈幸倍  
坐世。

いよいよ本卷よりは、我古事記に現れたる天之御中主神以前の天界の有様を略  
述し、以て皇神國の尊嚴無比なるを知らしめむとするものなり。

本書は富士文庫に明記されたる天の世を初めとし、天之御中之世、地神五代の世より今日に至る萬世一系の國體と、皇室の神より出でまして尊嚴無比なる理由を闡明せむとするものにして、先づ天の世より言靈學の應用により著はせるものなれば、決して根據なき架空の説にあらざるを知るべし。富士文庫神皇記の天の世の神の御名を列記すれば、

一 天之峰火夫神

二 天之高火男神

三 天之高地火神

四 天之高木比古神

五 天之草男神

六 天之高原男神

七 天之御柱比古神

以上七柱の天神七代を天の世と稱し、天之御中主神より以下七代を天之御中之世と稱へ奉るなり。茲に皇國固有の言靈學の力をかりて、大虚空に於ける最初の

神々の御活動を謹寫せむとして著はしたる物語なり。又神生み國生みの物語も、最初の神々は幽の幽に坐しませば、現代人の如く肉體を保ち給はず全く氣體に坐しますが故に、現代人の如く男女の關係は無く、只言靈の水火と水火を結び合せて國を生み神を生み給ひしを知るべし。最初の神々は何れも幽體隱神に坐すが故に、男神は比古を附し、女神は比女の字を藉り顯しあれば、後世に於ける彦神姫神とは大に異なるを知るべきなり。

太元顯津男の神の神名は、ア聲の言靈南西に活き給ひて顯れ給ふ神名にして、國を生み神を生まし給ふと雖も、國を開拓し玉ふ神業を國生みと言ひ、國魂の神を選ませ又は生せ給ふを神生みと稱へ奉るは、皇典古事記の御本文に徴するも明白なり。又八十比女神の國生み神生みの神業も、只單に言靈の水火の組合せによりて、言靈神の生り出で給ふ根本の御神業なるを知るべし。

（昭和八・一〇・四 舊八・一五 於高天閣 森良仁謹録）

第一篇 紫微天界

第一章 天之烽火夫の神（一八三二）

天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一點の、忽然と顯れ給ふ。この、たるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々々に擴大して、一種の圓形をなし、圓形よりは湯氣よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の氣放射して、圓形の圈を描き、を包み、初めて、の言靈生れ出でたり。此の、の言靈こそ宇宙萬有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神國の大本となり給ふ。我日の本は此の、の凝結したる萬古不易に傳はりし神靈の妙機として、言靈の助くる國、言靈の天照る國、言靈の生くる國、言靈の幸はふ國と稱するも、此の、の言靈に基くものと知るべし。

キリストの聖書にヨハネ傳なるものあり。【ヨ】とはあらゆる宇宙の大千世界

の意なり、【八】は無限に發達開展、擴張の意なり、【ネ】は聲音の意にして宇宙大根本の意なり。ヨハネ傳首章に曰く、<sup>☩</sup>太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり。此の道は太初に神と偕に在き。萬物これに由て造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしは無<sup>☩</sup>と明示しあるも、宇宙の大根元を創造したる主の神の神徳を稱へたる言葉なり。

清朗無比にして、澄切り澄きらひスーと四方八方に限りなく、極みなく伸び擴がり膨れ上り、遂に極度に達してウの言靈を發生せり。ウは萬有の體を生み出す根元にして、ウの活動極まりて又上へ上へと昇りアの言靈を生めり。又ウは降つては遂に才の言靈を生む。

の活動を稱して主の大神と稱し、又天之峰火夫の神、又の御名を大國常立神言と奉稱す。大虚空中に、葦芽の如く一點の、發生し、次第々々に膨れ上り、鳴り鳴りて遂に神明の形を現じたまふ。神の神靈はの活動力によりて、上下左右に擴がり、極まりてウの活用を現じたり。ウの活用より生れませる神名を宇宙須美の神と言ふ、宇迦須美は上にのぼり下に下り、神靈の活用を兩分して物質



の大元素を發生し給ひ、上にのぼりては靈魂の完成に資し給ふ。今日の天地の發生したるも、宇迦須美の神の功なり。ウーウーウーと鳴り鳴りて鳴極まる處に神靈の元子生れ物質の原質生まる。故に天之烽火夫の神と宇迦須美の神の妙の動きによりて、天津日鉾の神大虚空中に出現し給ひ、言靈の原動力となり七十五聲の神を生まれ給ひ、至大天球を創造し給ひたるこそ、實に畏き極みなりし。再拜。

(昭和八・一〇・四 舊八・一五 於天恩郷千歳庵 加藤明子謹録)

## 第二章 高天原(一八三三)

ここに宇迦須美の神は、の神の神言もちて、大虚空中に活動し給ひ、遂に才の言靈を神格化して、天津瑞穂の神を生み給ひ、高く昇りて天津瑞穂の神を生まれ給ひぬ。大津瑞穂の神は、天津瑞穂の神に御逢ひて夕の言靈、高鉾の神、力の言靈、神鉾の神を生まれ給ひぬ。高鉾の神は太虚中に活動を始め給ひ、東に西に南に北

に、乾坤巽艮上下の區別なくターターター、タラリタラリ、トータラリ、タ  
ラリヤリリ、トータラリとかけ廻り、神銚の神は、比古神と共にカーカーカ  
と言靈の光かがやき給ひ、茲にいよいよタカの言靈の活動始まり、高銚の神は左  
旋運動を開始し、神銚の神は右旋運動を開始して圓滿清朗なる宇宙を構造し給へ  
り。茲に於て兩神の活動は無限大の圓形を造り給へり。この圓形の活動を【マ】  
の言靈と言ふ、天津眞言の大根元はこのマの言靈より始まり。  
高銚の神、神銚の神、宇宙に現れ給ひし形をタカアと言ひ、圓滿に宇宙を形成  
し給ひし活動をマと言ひ、このタカアマの言靈、際限なく虚空に擴がりて果てな  
し、この言靈を八と言ひ速言男の神と言ふ。兩神は速言男の神に言依さし給ひて、  
大宇宙完成の神業を命じ給ふ。速言男の神は右に左に廻り廻り鳴り鳴りて螺線形  
をなし、ラの言靈を生み給ふ。この状態を稱してタカアマハラと言ふなり。高天  
原の六言靈の活動によりて無限絶對の大宇宙は形成され、億兆無數の小宇宙は次  
で形成さるるに至れり。清輕なるもの、靈子の根元をなし、重濁なるものは物質  
の根元をなし、茲にいよいよ天地の基礎は成るに至れり。

未だ速言男の神以前の世は宇宙なるもの無く、日月星辰の如き靈的物質形をとめず、虚空はただ靈界のみ創造され、物質的分子は微塵だもなかりけるが、この六言靈の活用によりて、天界の物質は作られたるなり。これより天地剖判に至るまで數十代の神あり、之を天の世と稱し奉る。

天の世は靈界のみにして現界は形だにもなく、實に寂然たる時代なりき。この高天原六言靈の鳴り鳴りて鳴り止まざる活用によりて、大虚空に紫微圈なるものあらはれ、次第々々に水火を發生して虚空に光を放ち、其光一所に凝結して無數の靈線を發射し、大虚空をして紫色に輝く紫微圈層の世を創造し給ひぬ。紫微圈層について蒼明圈層現れ、次に照明圈層、次に水明圈層現れ、最後に成生圈層といふ大虚空に斷層發生したり。この高さ廣さに到底算ふべき限りにあらず、無限絶對無始無終と稱するより語るべき言葉なし。嗚呼惟神靈幸倍坐世。

(昭和八・一〇・四 舊八・一五 於天恩郷千歲庵 加藤明子謹録)

第三章 天之高火男の神（一八三四）

主の神は高鉾の神、神鉾の神に言依さし給ひて高天原を造らせ給ひ、南に廻りて中央に集る言靈を生み、北に廻りては外を統べる言靈を生み、次ぎ次ぎに東北より廻り給ひて聲音の精を發揮し萬有の極元となり、一切の生らざる處なき力を生み給ふ。此の言靈は自由自在に至大天球の内外悉くを守り涵し給ひ、宇宙の水火と現れ柱となり、八方に伸び極まり滞りなし。八紘を統べ六合を開き本末を貫き無限に澄みきり澄み徹り、吹く水火吸ふ水火の活用によりて八極を統べ給ふ。此の神力を繼承して、以後の諸神は高天原の中心に收まり紫微宮圈層に居を定め、一種の水氣を發射し給ひて雲霧を造り、又火の元子を生み給ひ、紫微圈層をして益々清く美しく澄み徹らしめ給ひ、狹依男の神を生み給ひて紫微の靈國を無限に無極に開かせ給ひ、茲に清麗無比の神居を開き給ひぬ。狹依男の神の又の御名を天之高火男の神と言ふ。何れもタカアマハラと言靈より生りませる大神にして神威赫々八紘に輝き給ふ。

あめのたかひを 天之高火男の神は 天の高地火の神と共に、力を合せ心を一にして 天の世を修理  
こせい 固成し給ひ、 蒼明圈層に折々下りて、天津神の住所を開かむと茲に諸々の星界を  
う 生み出で給ひて、晝夜間断なく立活き鳴り鳴りて鳴り止まず坐しぬ。天之高火男  
かみ 神、 天の高地火の神の二神は 夕力の言霊より天界の諸神を生り出で給ひ、 莊嚴  
む 無比なる紫微宮を造りて主神の神霊を祀り、晝夜敬拜して永遠に鎮まり給ふ。紫  
けんかい 微圈界に坐ます 萬星界の神々は、其數日に月に増し行きて數百億の神人を現し、  
けんそう 此の圈層の靈界建設に奉仕し給ふ。

これより數百億萬年を経て今日に至りたるを思へば、宇宙創造の年代の遠き實  
ぼうぜん に 果然たらざるを得ざる次第なり。紫微圈層の靈界を稱して天極紫微宮界といひ、  
すんじ 寸時も間断なくタカタカの言霊輝き、東は西に、西は東に、南は北に、北は南に、  
うへ 上は下に、下は上に鳴り鳴りて鳴り止まざる言霊の元子は、終に七十五聲の神々  
う を生み給ふに至れり。主の神は一點の、より現れ給ひて、終に大虚空に紫微圈層  
くわんせい を完成し、次第に五種の圈層を生み給ひて靈國を開き、諸神の安住地と成し給ひ  
かしこ しぞ畏けれ。嗚呼言霊の玄妙不可思議力よ。

第四章 ス の神聲(しんせい) (一八三五)

此(こ)の至(し)大(だい)天(てん)球(きゅう)の未(いま)だ成(せい)立(り)つせざる ス の神(か)時(じ)代(だい)の天(あま)の世(よ)は、唯(ただ)至(し)大(だい)浩(こう)々(々)而(而)氳(こん)氳(こん)ぎたる極(こ)微(ご)點(てん)の神(しん)靈(れい)分(ぶん)子(し)が撒(さ)霧(り)に撒(さ)散(さん)而(而)、至(し)大(だい)浩(こう)々(々)靈(れい)々(々)湛(たん)々(々)たる極(こ)微(ご)點(てん)分(ぶん)子(し)が玄(くわ)々(々)漠(もく)々(々)妙(まう)々(々)たり。漂(け)々(々)點(てん)々(々)烈(れつ)々(々)兮(や)、恆(けい)々(々)極(こ)々(々)鑄(ち)々(々)兮(や)、平(たい)々(々)運(うん)々(々)洞(どう)々(々)兮(や)、几(こ)々(々)白(はく)々(々)渺(みょう)々(々)兮(や)、剛(こう)々(々)神(しん)々(々)寂(じやく)々(々)兮(や)、照(て)々(々)電(でん)々(々)精(せい)々(々)兮(や)、滿(まん)々(々)既(き)々(々)着(ちやく)々(々)兮(や)、汎(はん)々(々)膨(ぼう)々(々)凝(ねい)々(々)兮(や)、登(とう)々(々)軟(なん)々(々)插(さ)々(々)兮(や)、進(しん)々(々)酸(さん)々(々)黑(こく)々(々)兮(や)、降(かう)々(々)責(せ)々(々)臨(りん)々(々)兮(や)、赤(せき)々(々)炭(たん)々(々)止(ぢ)々(々)兮(や)焉(や)して萬(ばん)性(せい)を含有(かんいう)し極(こ)乎(こ)として純(じゆん)々(々)たり。神(しん)代(だい)神(しん)樂(らく)翁(う)三(さん)番(ばん)叟(そう)の謠(うた)に、  
「タータータラーリ、タラリーラー、タラリ、アガリ、ララーリトー、チリーヤ、タラリ、ララリトー」  
と言(い)ふは、此(こ)の神(しん)秘(ひ)の轉(てん)化(くわ)したる語(ご)にして、天(あま)の世(よ)開(かい)設(せつ)の形(けい)容(よう)を顯(けん)示(じ)したるなり。

故に此の靈聲を總て一言にと謂ふ。此の聲の神靈を明細に説き明かす時は、世界一切の太極本元の眞體及び其の成立の秩序も、億兆萬々劫々年度劫大約恆々タル大造化の眞象も、逐一明かに資り得らるるなり。

蓋し言たるやにしてなるが故に、既に七十五聲の精靈を完備して、純乎として各自皆その眞位を保ちつつあり。然して其の眞位と謂ふは、皆兩々相向ひて遠近皆悉く返對力が純一に密合の色を保ちて實相しつつ、至大極乎として恆々々、活氣臨々として點々たり、所謂至大氳氳の氣が聲と鳴り起むと欲して、湛々の中に神機を含藏するの時なり。故に世に人たる者は先づ第一に此の謂れを明かに知るべきものとす。何故なればは皇の極元なればなり。

(昭和八・一〇・五 舊八・一六 於天恩郷千歲庵 加藤明子謹録)

## 第五章 言幸比古の神(一八三六)

速言男の神は紫微宮圈の世界の萬神を指揮し修理固成し、永遠無窮に天の世界の經綸に全力を盡し給ひ、茲に造化三神を初め四柱の神の宮殿を造りて、至忠至孝の大道を顯彰し給へり。天の世界の造化三神とは、天極紫微宮に坐す天之峰火をの神、宇迦須美の神、天津日鉞の神に坐まし、左守と仕へ給ふは大津瑞穂の神、夫の神、天津瑞穂の神の二神なり。又右守の神と仕へ給ふは高鉞の神、神鉞の神なり。速言男の神は一二三即ち靈力體の三大元を以て大宮に要する靈の御柱を造り給ひ、此の柱を四方に建て竝べて靈の屋根を以て空を覆ひ、光輝燦然たる紫微の大宮を造營し給ひぬ。抑も此の宮は天極紫微宮と稱へ奉り、造化三神を初め左守右守の四柱神を永遠に祭祀し給はむが爲めなり。

此の時靈力體の三元スの言靈の玄機妙用によりて、紫微宮の世界に大太陽を顯現し給ひ、大虚空中に最初の宇宙を生り出で給ひたるなり。紫微宮天界の諸神は幾億萬里の果よりも集り來りて、大宮造營完成の祝歌を謠ひ給ふ。速言男の神は紫微臺上に昇りて聲も嚴かに、



□ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 萬 〇

と繰返し繰返し謡ひ給へば、百雷の一時に轟く如き大音響四方に起りて、紫微宮  
天界は爲に震動し、紫の光は四邊を包み、太陽の光は次第々々に光彩を増し、現  
今の我宇宙界にある太陽の光に増すこと約七倍の強さとなれり。速言男の神は以  
上の天の數歌を唱へ終りて紫微臺の高御座に端坐し、兩眼を閉ぢて天界の完成を  
祈り給ふ。

茲に速言男の神の左守神として仕へ給ふ言幸比古の神は、言靈の發動に生れる  
紫微宮の莊嚴を祝して、

□ ア オ ウ エ イ  
カ コ ク ケ キ  
サ ソ ス セ シ  
タ ト ツ テ チ



茲こゝに右守うもりの神言かみこと幸比女さちひめの神かみは左守さもりの神かみの後あとをうけ給たまひて、

☐ アカサタナハマヤラワガザダババ  
イキシチニヒミイリキギジヂビビ  
ウクスツヌフムユルウグズツブプ  
エケセテネヘメエレエゲゼデベペ  
オコソトノホモヨロヲゴゾドボポ

と七十五しちじふご聲こゑの眞言まことを横よこに謳うたひ給たまへば、八百萬やほよろづの神々かみがみは之これに和わして謹つつしみ敬あやまひ言靈ことたまを  
奏そとじやう上じやうし、タカタカと拍手はくしゆをなして喜よろこび歡あはれ給たまひける。此この宮みやの祭まつりに仕つかへ給たまへる  
日高見ひたかみの神かみは、聲嚴こゑおごそかに祝しゆくし給たまはく、

☐ 久方ひさかたの天あめに生なる生なる主すの神靈かみたま  
澄すみきり澄すみきり澄すみ徹とほらひつ

アとウの水い火きを合あせ給たまひて

紫し微びの天てん界かいを創はじめ給たまふ

其その功い績さを喜よろこび勇いみ

主スの神かみの神み靈たまに生なりし

八や百ほ萬よろづ千ち萬よろづの神かみは

此これの齋ゆ場にはに集つどひ奉まつり

神かむ祝ほぎ言こと宣のり奉まつる

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八や九この十たり

布ふる留べ邊ゆ由ら良ふる布ふる留べ邊ゆ由ら良ゆ

生いく言こと靈たまのおほ幣ぬさを振ふるり翳かし

天あま津つ眞ま言ことの劍つるぎを御み前まへに翳かし

大あま太つ陽ひを生うみませる

主スの大おほ御み神かみ又またの御み名なは

大おほ國くに常とこ立た神ち言ことの

甚いじき功い績せきに報むいまつ奉まつるとして

紫し微びの宮みや居ゐの清すが庭にはに

生いく言こと靈たまを宣のり奉まつる

嗚あ呼か惟む神な々ながら々か

主スの大神おほの神か御む靈たま

高た天あ原まに満みち足たらひ

幾か億きは萬ときは劫はの末すまでも

鳴なり鳴なり鳴なりて鳴なりあまり

生いき生いき生いきて生いき榮さえ

神かの依よさしの神か業むに

仕つかへ奉まつらむ眞ま心この

眞ま言ことの鏡かが曇みりなく

眞ま言ことの劍つるぎ研ぎ澄すまし

彌い榮やえさます八や尺さ瓊かの

生言靈の璽の水いくことたま たま いき火き

盡くる事なく絶ゆるなくつこと た た

永久の世の果までもとこしへよ はて

主の大神の神力をス おほかみ しんりき

開かせ照させ給へかしひら てら たま

宮司日高見の神がみやつかさひたかみ かみ

誠をこめて祝ぎ奉る祝ぎ奉るまこと ほ まつ ほ まつ

(昭和八・一〇・六 舊八・一七 於天恩郷千歳庵 森良仁謹録)

## 第六章 言幸比女の神ことさちひめ かみ (一八三七)

言靈の天照り幸はひ生くるてふ、  
貴の御名をおはせたる言幸比女の神は、  
音吐ことたま あまて さち い うつ み な ことさちひめ かみ おんどら

朗々として言靈の幸を歌ひたまひぬ。

☞ 大虚空一點の、あらはれて

スの言靈は生れ出でたり

澄みきりしスの言靈は生ひ立ちて

天之峰火夫の神とならせり

峰火夫の神の功のなかりせば

紫微天界は生れざるべし

久方の天之峰火夫の神は天界の

萬有諸神が主神に坐します

主の神の力によりて宇迦須美の

神の御靈は生れましけり

ウの神の功は下りて大津瑞穂

神と生れます言靈なりけり

ウの神は上に開きて天津瑞穂

アの言靈と生れたまひぬ

主の神は七十五聲を生みまして

天の世界を開きましけり

天に満ち天に輝き透き徹り

鳴り鳴りやまぬ主の神の功

惟神嚴の言靈鳴り鳴りて

世の輝きは生れましけり

榮えゆく生言靈の幸ひて

サの言靈は現れにけり

夕夕の力鳴り響きつつ輝きて

夕の言靈はなり出でにけり

鳴り鳴りて鳴りやまざるの力もて

ナの言靈は生れ出でにけり



四方よもやも八方もに極きはまりもなく神業かむわざの

永遠とほに開ひらくる八はの言靈ことたまよ

まるまるかたまと固かたまりをさまる功績いさをしは

マの言靈ことたまの御稜威みいづなりけり

ヤアヤアと勢強いきほひよき言靈ことたまの

言葉ことばはヤ聲ごゑに生うまれ出いでけり

めぐりめぐり果はてしも知しらぬ神力みちからは

ラわかの言靈ことたまゆ生うまれ出いでけり

若返わかり若返わかりつつ澄すみきらふ言靈ことたまは

ワいさをしの功いさをしゆなり出いづるなり

火ひと水みづをあやなしこれてんかいの天界てんかいに

命いのちを與あたふるイことたまの言靈ことたまよ

スいさをしの水い火きの澄すみきらひたる功いさをしに

キことたまの言靈ことたまは生うまれ出いでたり

一切にしめりを與ふる活動は

シの言靈の功なりけり

一さいの命を救ふ原動力は

チの言靈の恵みなりけり

左右上と下との結び合ひは

二の言靈の功なりけり

生き生きて生きの果てなき神力を

照して果てなきヒの言靈よ

萬有の元素となれる言靈は

ミの神聲の功なりけり

右左上と下との定まりは

ヤ行イ聲の言靈なりけり

一さいの呼吸の作用は盡く

リの言靈の功なりける

靈れいの呼い吸き體たい的てきの呼い吸きを組くみ合あし

世よを固かたむるは卍ことの言たま靈よ

主スの神かみの初つひ聲こゑにあれし言こと靈たまは

宇う迦が須す美みの神かみのウ聲こゑなりけり

水みづと火ひを組くみ合あせつつ萬ばん有いうに

幸さちはひたたまふはクの言こと靈たまよ

一いつさいの眞ま中なかにまして萬ばん物ぶつの

根こん本ぼんにますスの言こと靈たまよ

つみ重かさね重かさねつつ雲くもとなり

狹さ霧ぎりとなりしツの言こと靈たまよ

次つぎ次つぎに果はてしも知しらず列つらなるは

ツの言こと靈たまの功い績さなりけり

大だい宇い宙ちゅう間かん隙げきあればぬひてゆくは

又またの言こと靈たまの功い績さなりけり

火と水を自由自在に活動かすは

フの言靈の活用なりけり

むしわかし結び連ぬる活動は

ムの言靈の活用なりけり

穩かに強き弱きを引きならす

功は二聲の言靈なるも

一切萬事取り定むるは惟神

ルの言靈の功績なるも

ワ行ウの生言靈は生み生みて

生みの果しを守らす神なり

内に集り空に開くる活動は

ア行工聲の言靈なりけり

消えて又世に現るる活動を

ケの言靈と稱へ奉るも

内に迫り外面に起る活動を

セの言霊と言ふぞ畏き

起り立ち強く勇みて外に出で

活動く力をテの言霊と言ふ

をさまりきり外に現れ廻るてふ

生言霊はネ聲なりけり

退きて又もや動き進むなる

活用力をへの言霊と言ふ

内分に精力を含み女子を含む

活用力はメ聲なりけり

彌果に榮えしきりに集ひくる

活動は工聲の言霊なりけり

より極まり億兆一切の焦点と

活用く神霊はレ聲なりけり

樂たのしみ榮さかえ幸さいはひ進すすむ活はたら用きは

工ことの言たま靈いさをの功いさをなりけり

起おこし助たすけ大たい成せい大たい氣いきの活はたら用きは

テの言こと靈たまの功いさをなりけり

一いつ切さいの真しん言げんとなりて天あま津つ誠まことの

活くわ動どう力りきはコ聲こゑなりけり

退のき下くだり外そとに添そひつく活はたら用きは

ソの言こと靈たまの功いさをなりけり

結むすび定さだめ八や咫あたにはしる活はたら用きは

トの言こと靈たまの功いさを績しなりけり

延のび延のびて天てん賦ぷの儘ままなる活はたら用きは

ノの言こと靈たまの功いさをなりけり

照てりこみて上うへに現あらはは目めに見みゆる

活くわ動どう力りきを亦また聲こゑと言いふなり

散<sup>ち</sup>り亂<sup>みだ</sup>れ下<sup>した</sup>に活<sup>は</sup>用<sup>たら</sup>く言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>は

モ聲<sup>こゑ</sup>の活<sup>くわつ</sup>動<sup>どう</sup>力<sup>りき</sup>を生<sup>う</sup>むなり

寄<sup>よ</sup>り結<sup>むす</sup>び又<sup>また</sup>離<sup>はな</sup>れ散<sup>ち</sup>る活<sup>は</sup>用<sup>たら</sup>は

ヨの言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の功<sup>いさを</sup>なりけり

狭<sup>せま</sup>く入<sup>い</sup>り近<sup>ちか</sup>くあつまり廣<sup>ひろ</sup>く指<sup>さ</sup>す

活<sup>くわつ</sup>用<sup>よう</sup>力<sup>りき</sup>は口<sup>くち</sup>聲<sup>こゑ</sup>なりけり

結<sup>むす</sup>び結<sup>むす</sup>び一<sup>ひと</sup>つに集<sup>あつ</sup>まる活<sup>は</sup>用<sup>たら</sup>は

ヲの言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の功<sup>いさを</sup>なりけり

アカサタナハマヤラワより一<sup>いち</sup>々に

とき示<sup>しめ</sup>したる言<sup>こと</sup>幸<sup>さち</sup>比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>の神<sup>かみ</sup>

紫<sup>し</sup>微<sup>び</sup>宮<sup>きう</sup>に天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>まこと神<sup>かみ</sup>々<sup>がみ</sup>を

まつりて嬉<sup>うれ</sup>し永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>の神<sup>かみ</sup>國<sup>くに</sup>に

果<sup>は</sup>しなき此<sup>この</sup>神<sup>かみ</sup>國<sup>くに</sup>に生<sup>う</sup>ま合<sup>あ</sup>ひて

今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の祭<sup>まつり</sup>に逢<sup>あ</sup>ふぞ嬉<sup>うれ</sup>しき

宮柱みやばしら太たしくたちて此この神國しんこくを

知し召めすかも三柱みはしらの神かみ

三柱みはしらの神かみの功いさをに百神ももがみは

生いきの命いのちの果はてを知らずも

生いき生いきて生いきの果はてなき天界てんがいを

造つくりたまひし主すの神畏かみかしこし

久方ひさかたの高天原たかあまはらと定さだまりて

永と久はの命いのちを樂たのしむ百神ももがみ

左守さもり右守うもり相あひ竝ならばして天界てんがいの

礎いしづかためたまふ尊たふとさ

廣々ひろびろと果はてしも知しらぬ天界てんがいに

澄すみきりすみきる心こころ樂たのしも

（昭和八・一〇・六 舊八・一七

於天恩郷千歲庵

加藤明子謹録）



第七章 太袂（一八三八）

天之高火男の神、天之高地火の神の二神は、紫微圈界の國土を經營せむとして、  
（國土と雖も靈的國土にして、現在の地球の如きものに非ずと知るべし。以下總  
て之に準ず）先づ味鋤の神をして紫天界に遣はし給ひぬ。紫天界は紫微宮界の中  
央に位し、至嚴、至美、至粹、至純の透明國なり。先づ紫天界成り終へて、次に  
蒼天界形成され、次に紅天界、次に白天界、次に黃天界、次々にかたちづくられ  
たり。本章に於ては先づ、紫微圈界に於ける其の第一位たる紫天界の修理固成に  
つき其の大略を説き明すなり。

ウの言靈の御稜威によりて天之道立の神は、其の神力を發揮し給ひ、日照男の  
神、夜守の神、玉守の神、戸隱の神の四柱をして晝と夜とを分ち守らせ給ひぬ。  
玉守の神は朝を守り、日照男の神は日中を守り、戸隱の神は夕を守り、夜守の神  
は夜を守り給ひて、天界の經綸を行ひ給ふ。併しながら紫微圈界にては、夜半と  
雖も我が地球の眞晝よりも明るく、唯意志想念の上に於て夜の至るを感ずる程度

のものなり。朝は朝の想念起り、晝は晝、夕は夕の意志想念に感ずる程度なり。

我が地球の如く明暗さだかならざるも、靈的天界なるが故なり。

天之道立の神は諸神を従へて、紫微圈界に於ける數千億萬里の靈界を非常の速力をもつて經繞り、神業に活躍し給へり。至美、至明、至尊、至嚴の靈國も、燃ゆる火の焰の末より出づる黒煙の如く、鈍濁の氣凝り固まりて、美醜善惡の次第に區別を生じ、最初の神の意志の如く永久に至善、至美、至尊、至嚴なる事、全體に於て能はざるに至れるも、靈的自然の結果にして、如何に造化の神徳と雖も、此の醜惡を絶滅する餘地なかりしなり。

總て宇宙一切のものには靈的にも、體的にも表裏あり、善惡美醜混じ交はりて、而して後に確乎不動の靈物は創造さるるものなり。神は至善至美至愛にましますども、年處を經るに従つて醜惡分子の湧出するは、恰も清水の長く一所に留まれば、次第に混濁して腐敗し、昆蟲を發生するが如し。

天之道立の神は、主の神の至善、至美、至愛の靈性を攝受し給ひて、紫天界を圓滿清朗に且つ幸福に諸神を安住せしめむと、晝夜守りの四神をして神事を取り

行ひ給へど、惟神自然の眞理は如何ともするに由なく、さしもの紫天界にも、彼方、此方の隅々に妖邪の氣發生し、やうやく紫天界は擾亂の國土と化せむとせり。茲に天之道立の神は、此の形勢を深く憂慮し給ひて、天極紫微宮に朝夕を詣で、天の數歌を奏上し、かつ三十一文字をもつて、妖邪の氣を剿滅せむと圖り給ふぞ畏けれ。

天之道立の神は黄金の肌麗しく、裸體にて神前に神嘉言を奏上し給ふ。(紫微圈界は最奧天界にして、此所に住する神々は總て裸體にまします。然りと雖も身心共に清淨無垢にまします。現在地球人の如く醜態を感ずることなく、裸體そのものが、却つて美しく、かつ莊嚴に輝き給ふなり。依つて最奧天界、第一天界の神人はいづれも裸體に在す事は、今日迄の靈界物語に於て説明したる如し) 掛卷も綾に畏きむらむらさきの、極微點輝き、美しき宮居にます主の大神の御前に齋司、天之道立の神、謹み敬ひ畏み畏み願ぎまつる。抑この紫微圈界は、主の大神とます天之峰火夫の神、宇迦須美の神、天津日鉾の神三柱の廣き深き雄々しき御稜威により、一二三の力もてうま怜に委曲に造り固め給ひけるを、日を重

ね、月を閲し、年を経るままに御世はやややに濁り曇らひ、いとも美しく、嚴かなるべき紫天界の至るところに心汚き神々の現れ來りて、主の大神の大御心に背きまつり、神國を亂しまつる事のいとも畏く、いみじくあれば、夜の守り、日の守りと四柱の神を四方にくまりて教へ諭し守りまつれど、あまりに廣き國にすれば、如何で全きを望み得む。さはあれ吾等は神の大宮に仕へまつる身にすれば、天津誠の大道をうま怜に委曲に説き明し、もろもろの荒ぶる神達を言向け合はし、大御神の御稜威をかかぶりて紫天界は神の造らしし昔にかへり、曇りなく濁りなく、曲の氣だに止めじと、祈る誠を聞き召し、吾に力を與へ給へ。惟神神の大前に一二三四五六七八九十百千萬布留邊由良、布留邊由良と幣打ち振り、比禮打ち靡け、大御神樂を奏でつつ、左手に御鈴を打ちふり、右手に幣ふりかざし、七十五聲の言靈をうま怜に委曲に宣りまつる。此有様を平けく安らけく聞き召し相諾ひ給へと、畏み畏みも願ぎまつる』

斯く太祝詞を宣り給へば、紫微宮の紫金の扉はキーキー、ギーギーと御音清しく左右にあけ放たれ、茲にキの言靈は鳴り出で、次にギの言靈鳴り出でましぬ。

是より四方の曲津を斬り拂ひ、清め澄まし、天清く、神清く、道亦清く、百神の濁れる心は清まりて紫微天界は次第々々に妖邪の氣消え失せにける。さりながら大前に神嘉言一日だも怠る時は再び妖邪の氣湧き出でて世を曇らせ、諸神は荒び亂るるに至るこそ是非なけれ。

茲に天之道立の神は、朝夕のわかちなく、神を祭り、言靈を宣り、妖邪の氣を拂はむとして拂ひ、言葉の功の【いやちこ】なることを悟り、初めて太褌ひの道を開き給ひしこそ畏けれ。再拜。

(昭和八・一〇・九 舊八・二〇 於天恩郷高天閣 加藤明子・森良仁謹録)

## 第八章 國生み神生みの段(一八三九)

天の道立の神は、紫微の大宮の清庭に立ちて布留邊由良、布留邊由良と大幣を振り給へば、紫微天界の西南の空を焦して入り来る神あり。其の御姿は百有餘旬

の大鰻の姿にして、肌滑らけく青水晶の如く、長大身ながらも拜しまつりて權威の心を起さず、寧ろ敬慕の念に満たされつつ、天之道立の神は紫微の大宮に齧伏して、

「來ります神は何神なりや」

と神慮を伺ひまつりけるに、

「天之峰火夫の神言もちて、今より來る神は太元顯津男の神」

と宣らせ給ひぬ。太元顯津男の神は紫微圈界の成出でし最初にあたり、大虚空の

西南に位置を定め、百の神業を司り給ひしが、やうやく大神業を仕へ終へ給ひし

折もあれ、天之道立の神の生言靈の被ひの神業に感じ給ひて、此處に寄り來ませ

るなりき。太元顯津男の神は横目立鼻の神人と化し給ひ、大宮の御前に額づきて

宣り給はく、

「我は主の神の神言もちて、西南の空を修理固成し終れり。我この後は如何にし

て神業に仕へまつらむや、うま怜に委曲に事依さし給へ」

と、天津誠の言靈をもて祈らせ給へば、紫微の宮居の扉は再び靜に開かれて、茲

に高鉾の神、神鉾の神、四邊を紫金色に照させながら、儼然として宣りたまはく、  
宜なり宜なり太元顯津男の神よ。我主の神の神言もちて汝に宣り聞かす事あり、  
慎み畏み神業に仕へまつれよ。是より東北萬里の國土に於て天界經綸の聖場あり、  
稱して高地秀の峰といふ。この高地秀の峰こそ我主の神の出でませし清所なれば、  
汝は一時も早く高地秀の峰に下りて紫天界の經綸に仕へまつれ。八百萬の神を汝  
に從へて其の神業を助けしめむ』  
と、右手に大幣を打ちふり、左手に百成の鈴を打ちふり給ひつつ、殿内深く隠れ  
給ひぬ。茲に太元顯津男の神は天之道立の神に深く感謝の意をのべながら、時遅  
れじと再び長大身に還元しつつ、光線の速さよりも速く、見る見る姿を隠させ給  
へり。

太元顯津男の神は、天の高地秀の山に下り給ひつつ、茲に造化の三神を齋ひ祭  
り、朝な夕に誠心の極みを盡し、言靈の限りを竭して、天界の平和幸福を祈らせ  
給ふ。紫微圈界に坐す主の大神の御稜威によりて、平らけく安らけく清く明けく  
治まりたれども、百萬里東方の國土は未だ神徳に潤はず、漸く妖薛の氣群がり起

り、神々は水火の呼吸の凝結より漸く愛情の心を起し、神生みの業は日々に盛になりたれども、善惡相混じ美醜互に交はる惟神の攝理によりて、遂に混濁の氣國內に満ち、萬の禍群れおきむとせしを甚く歎かせ給ひ、高地秀の大宮に百日百夜間斷なく祈り給へば、主の神はここにも再び現れまして神言嚴かにのたまはく、  
「汝是より國生み、神生みの神業に仕へまつれ。其の御樋代として八十の比女神を汝に從はしめむ」

と宣り給へば、太元顯津男の神は主の神の神宣のあまりの畏さに、應へまつる言葉もなく、宮の清庭に鱗伏して直ひたすらに驚き打ち慄ひ給ひける。

主の神より太元顯津男の神に對し八十比女神を授け給ひしは、神界經綸につきて深き廣き大御心のおはしますことなりけり。天界に於ても漸く茲に横目立鼻の神人現れ、愛欲に心亂されて至善至美至愛の天界も濁り曇らひければ、其汚れを拂はむとして至善、至美、至粹、至純、至仁、至愛、至嚴、至重の神靈を宿し給ふ太元顯津男の神に對して、國魂の神を生ましめむとの御心なりける。譬へば醜草の種は生え安く茂り安くして世に寸效もなく、道を塞ぎ惡蟲を生じ足を容るる



處なきままでに至るを憂ひ給ひて、至粹至純なる白梅の種を植ゑ廣めしめむと、八  
十比女神を御樋代に、國の守りと國魂神を生ませ給はむ御心なりける。曇り亂れ  
の種を天界に蒔き廣むる時は益々曇り亂れ、遂には神明の光も知らざるに至るも  
のなり。

(昭和八・一〇・一〇 舊八・二一 於水明閣 加藤明子謹録)

## 第九章 香具の木の實(一八四〇)

紫微天界、最奥靈國紫微の宮居に鎮まり居ます主の大神、天之峰火夫の神は、  
宮の清庭に彌茂り彌榮えつつ非時花咲き實る香具の木の實を、左守の神に命じて  
むしり取らせ給へば、其の數八十に及べり。

茲に主の神は虚空にスの言靈を鳴り出で給ひて、香具の木の實を右手に握らせ  
呼吸を吹きかけ給へば、艶麗なる女神の靈御口より生り出でまして香具の木の實

に移らせ給ひ、茲に艶麗なる女神の姿生り出でましぬ。この女神の名は高野比女  
の神と申す。次に一つの木の實を手握り玉の清水に滌ぎ給ひて御息を吹きかけ給  
へば又もや女神成り出で給ふ。之を壽々子比女の神と申す。かくして八十の香具  
の木の実は、いづれも天下經綸の御柱として貴の女神と現れ出でませり。

御鈴ふる嚴の言靈幸はひて

八十比女神は現れましにけり

主の神は貴の木の實にみいきかけて

天界經綸の種を生ませり

國生みの神の神業のなかりせば

この天地は開けざるべし

顯津男の神の國生み御子生みは

大經綸の基なりけり

國を生み又天を生み神を生み

人の子生める顯津男の功  
非時の香具の木の實は主の神の

味の味ひをもてるなりけり

顯津男の神の神言は八十比女を

御樋代として國をひらけり

國々の國魂神を清らけく

生みおほせたる八十の比女神

比女神の生みの功は大宇宙

大千世界をやすく照せり

茲に太元顯津男の神は、主の神の神言かしこみ高野比女の神にみあひて、高地  
秀の宮に永久に鎮まり居まし、國を拓き神ををさめ、水火の呼吸をくみ合せ一も  
や一ひ合せて雲を生み、雨を降らせて、あらゆる天界に濕りを與へ給へば、國土  
に萬物發生し、天の狹田長田に瑞穂の稻は實り木の實は熟し、大嘗の神業漸く完

成を告げ給ふ事とはなれり。

顯津男の神は主の神の神言かしこみて宇都子比女の神、朝香比女の神、梅咲比女の神、花子比女の神、香具の比女の神、小夜子比女の神、壽々子比女の神、狹別の比女の神を近く侍らせ神業に奉仕せしめ給ひぬ。之を八柱の女神となも言ふ。この外七十まり二柱の比女神を紫微宮界の東西南北、遠近の國土に配りおきて、神の御樋代となし、大經綸を行ひ給ひしぞ畏けれ。

(昭和八・一〇・一〇 舊八・二一 於水明閣 加藤明子謹録)

## 第一〇章 婚ぎの御歌(一八四一)

太元顯津男の神は主の大神の大神言を畏み、非時の香具の木の實に生りませる高野比女の神を正妃と定めて、茲に依さしの神業を大神の御前に執行はせ給ひ、八百萬の祭司神を率ゐて嚴かなる祝詞を奏し給ひ、天之御柱、國之御柱を見立て

給ひて、男神は左より、女神は右より御柱を廻り、再び神前に太祝詞白し給はく、  
掛巻も綾に尊き久方の貴の宮居に鎮まり給ふ主の大神の御前に愼み敬ひ願白さ  
く。久方の高天原は澄みきらひ、此の紫微天界の國々は清く清しく、五穀は豊か  
に實り木の實は枝もたわわに熟しつつ、神の依さしの神國は今日のあたりうま  
に委曲に生まれしぬ。嗚呼惟神々々神の尊き御恵に、今日の良き日の良き辰を婚  
ぎの綱と定めつつ、高野比女の神を妻となし世を治めよと神の宣らすこそ實にも  
尊き限りなれ。吾は之より主の神の大神言葉を身に受けて、天の壁立極み國の退  
立限り、清き正しき天津誠の心以てあらゆる神を撫で慈しみ、荒振神を言向和し  
大神言に仕へ奉らむとす。仰ぎ願はくは主の大神の御稜威を蒙ぶりて、御依さし  
の神業を生り遂げさせ給へ、いろはにほへとちりぬるを、わかよたれそつねなら  
む、うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみしゑひもせす、けふの良き日を微  
日の間も、忘るる事なく何時迄も、誠の心を經となし、愛と善との真心を緯に織  
なし、御機の絲の纏れなく、亂れもあらに神の世の大御經綸に仕へ奉らむ。上は  
主の大御神より下百神の端までも、吾真心を誓ひ奉り仕へ奉る事の由を、主の大

神を初めとし、八百萬の神平けく安けく聞召さへと宣る』  
ここに高野比女の神は、婚ぎの神祝言を聲朗らかに宇宙に響けと謠ひ給ふ。そ  
の御歌、

㊦ 久方の空に雲なくスの水火は

澄み切り澄みきらひて神國を照す

大太陽は宇宙のあらむ限りまで

稜威を伊照し給ひて日々に榮行く

神國の此の瑞祥ぞ畏けれ

一二三四五六七八九十

百千萬の神達に

わが神業を守られて

主の大神の大御心に

報い奉らむ高野比女の眞心を

諾うべなひませよ吾われはしも女神めがみの身みにしあれど  
主スの大神おほかみの稜威みいづと御光みひかりを頸うなじに受うけて  
吾夫わがつまの神かみと諸共もろともに  
心こころを合あせ力ちからを一いつに結むすび合あせ  
濱はまの眞砂まさごの數かずの如ごと  
貴うづの御子みこをば生うみ生うみて  
普あまねく世界せかいに分くまり配くばり  
大經綸おほしぐみの神業かむわざに  
仕つかへ奉まつるぞ嬉うれしけれ  
嗚呼あ惟かむながら神々かむながら  
顯津男あきつをの神比古かみひこ神がみは  
妾わらはの弱よわき魂たましひを  
貴うづの力ちからにみなぎらせ  
神かみの依よさしの神業かむわざを

うまらに委曲に仕へませ

一二三四五六七八九十百千萬と

祝ひ納むる今日の良き日ぞ畏けれ

今日の婚ぎの神祝に伊寄り集ひし神々は、遠津御幸の神、片照の神、魂之男の神、日之本の神以下十六柱におはせり。

遠津御幸の神は千萬里の遠きを厭はず、天の浮橋を打渡りつつ眞先に此の宴席に集ひ玉ひけり。遠津御幸の神は祝し給ふ。其の御歌、

天なるや主の大神の大宮に

非時實る香具の木の實と生れまして

高野比女の神は西南の天より此所に降ります

太元顯津男の神の女と定まりて

嚴かに天の御柱廻り合ひ



國くにの御柱みはしら固かためつつ

高天原たかあまはらの花はなとなり

諸神ももかみの上うへに望のぞませ給たまふぞ尊たふとけれ

吾われは主スの大御神おほみかみの神言みことかしこ畏こみ

西東南にしひがしみなみや北きたとかけ廻めぐり

近ちかき遠とほきの差別けぢめなく

神國みくにを教をしへ道布みちしきつ

神業みわざに仕つかへる神柱かむはしら

今日けふの壽ことほぎ見みるにつけ

神かみの經綸しぐみの果はてしなく

清きよく尊たふとき神業かむわざを

愈いよいよ深く覺さとりけり

西にしの宮居みやあは天あめの道立みちたつの神かみ

東ひがしの宮みやには太元おほもと顯津男あきつをの神かみ

各も各もに領有ぎ給ふ

此の神國はいろはの水火も澄みきらひ

濁らひも無く曇りなし

大太陽は中天に

輝き給ひ七色の

光彩を放たせ給ひつ

紫微天界は彌益も

光り輝き渡らひつ

百の神々勇み立ち

今日の御式に馳せ寄りて

例も知らぬ喜びに

逢ふぞ嬉しき此の神前

千代に八千代に壽ぎ奉る

嗚呼惟神神靈幸ひ坐ませよ

『いろはにほへとちりぬるを』と顯津男の神の詠みし言靈を解し奉れば、

【い】は水と火の竝びたる象徴也、右は水、左は火。

【ろ】は水と火の固まりて水火となり、宇宙に開く言靈を、【は】といふ。

言靈宇宙に開きて前後左右に活用く象は、【に】也。

此の活動によりて一つの、現はる、即ち、【ほ】の言靈也。

【ほ】は次第に高く昇り膨れ擴がる態を、【へ】といふ。

【と】の言靈は水火の完成したる言靈也。

水火完成して宇宙に滋味を生ず、之を【ち】といふ。【ち】は子を育つる母乳の

意也。又萬物發生の經綸場たる大地の意也。

【り】の言靈は女男二神水火を合せて竝び立たせる言靈也。

【ぬ】の言靈は互に和らぎ寢み温かき心を以て神業に盡す水火の象也。

【る】は夫婦の道又は天界の總ての定まりし言靈也。

- 【を】は心也。こころなり
- 【わ】は和らぎ睦み御子を生み給ふ態を言ふ也。やはむつみこをうたまさまをいなり
- 【か】は抱へ合ひ、輝き合ふ意にして、俗言に嬬といふも此の言靈の意也。かかあかがやああ意にして、ぞくげんかかといふも此のこことたまのいなり
- 【よ】は夫婦二神世帯を持てる象也。ふうふにしんしよたいもかたちなり
- 【た】は圓滿具足の意也。えんまんぐそくいなり
- 【れ】は夫唱婦隨の意也。ふしやうふずゐいなり
- 【そ】は上下四方揃ふ意也。左右の指の五本と五本と合せて拍手せし態也。じやうげしはうそろさいうゆびごほんごほんあははくしゆさまなり
- 【つ】は永久に續く意にして世人のいふ玉椿の八千代までといふも同じ。えいきうつづいせじんたまつばきやちよおなじ
- 【ね】は懇にして夫婦同衾の意也。ねもじろふうふどうきんいなり
- 【な】は二人竝ばし寝給ふ象也。ふたりならねたまかたちなり
- 【ら】は左旋右旋の意にして婚ぎの時の態をいふ。させんうせんいとつときさま
- 【む】は蒸し蒸して生し蒸生し息子娘を生むの意也。むむむわかむすこむすめういなり
- 【う】は潤ひの意、又天消地滅の場合に發す言靈也。うるほいまたてんせうちめつてきばあひはつことたまなり
- 【ゐ】は快感の極度に達したる時の意也。くわいかんきよくどたつときいなり

- 【の】は一物より迸る水氣の意也。
- 【お】は穩かに修まりし心。
- 【く】は夫婦組合ひたる象。
- 【や】は彌益々の意。
- 【ま】は誠の心を以ちて幾萬年も夫婦の道を守らむとの意也。
- 【け】は身の汚れの意也。
- 【ふ】は吹拂ふ言靈にして男女の汚れを吹き拂ふの意也。
- 【こ】は子にして、
- 【え】は胞衣也。
- 【て】は照り輝く意にして、暗夜の神業も終局の時火を照す意味也。
- 【あ】は暗室に點じたる火によりて一切のもの現れる意也。
- 【さ】は避くる意にして男神は女神の面を見る事を避け、又女神は男神の面を見る事を恥らひ避くる事の意也。
- 【き】は氣の高ぶりて心いそいそする意也。

【ゆ】は豊かの意にして仲の好くなりし言靈。

【め】は木の芽を吹き出す如く御子の種宿り始めたる意。

【み】は彌々胎兒となりし言靈也。

【し】はしつくりの意にして、茲に愈夫婦らしく初めて落ち着けるの言靈也。

【ゑ】は歡ぎ喜ぶ意にして、御子の生れたるを見て互に笑み榮えるの言靈也。

【ひ】は日子日女の意也。

【も】は催合ふ意にして、一家和合の言靈也。

【せ】は川の瀬の意にして、夫婦の仲に一點の邪曲もなく清らかなる態の言靈也。

【す】はいよいよ澄みきりて親子睦じく世に住む言靈也。

あなかしこ。

世には此のいろは歌を以て僧空海の作りたるものと信ずるものあれども誤りなり。いろは歌は天極紫微宮の昔、太元顯津男の神の言靈より鳴り出でし神歌にして、空海は只平易簡單に文字に現さむとして平假名文字を作り出したるものなり。故にいろは歌は空海の詠みしものにあらざることを知るべし。すべていろは歌は

婚とつぎの意い味みのみに非あらず、宇うち宙ちゆう萬ばん有いう一切いっさい發はつ生せいの眞しん理りを謠うたへるものなり。

高た野かの比ひ女めの神かみの祝しゆく歌かの註ちゆう。

高た野かの比ひ女めの神かみが婚とつぎの御ぎ宴えんに際さいし言こと擧あげ給たまひたる一ひと二ふた三み四よの歌うた、

一ひとは靈れい也なり、火ひ也なり、日ひ也なり。

二ふたは力ちから也なり、吹ふく呼い吸き也なり。

三みは體たい也なり、元げん素そ也なり。

四よは世せ界かいの世よ也なり。

五いつは出いづる也なり。

六むゆは燃むゆる也なり。

七ななは地ち成なる也なり。

八やは彌いよいよ々ますます益ます々ますの意い也なり。

九ここのは凝こり固かたまるの意い也なり。

十たりは完くわん成せいの意い也なり。

百ももは諸もろ々もろの意い也なり。

千は光也、血汐の血也。

萬は夜出るの意也。

之を大括して略解すれば、靈力體によつて世が發生し、水火の呼吸燃え上り、初めて地成り、彌々益々水火の氣凝り固りて完全無缺の宇宙天界は完成され、諸々の地の光は暗夜に出現して總てのもの目に入るといふ言靈にして、造化三神の神徳を稱へ奉り、其の徳にあやかりて紫微天界を修理固成し、諸神安住の清所に照さむとの意を謳ひ給ひしものと知るべし。

（昭和八・一〇・一〇 舊八・二一 於水明閣 森良仁謹録）

## 第一章 紫微の宮司（一八四二）

天の道立の神は茲に主の神の大神言をもちて、紫天界の西の宮居の神司となり、遍く神人の教化に専念し給ひ、天津誠の御教をうま怜に委曲に説き給ひ、太元顯



津男の神は東の國なる高地秀の宮に神司として日夜奉仕し給ひ、右手に御劍をも  
たし左手に鏡をかざしつつ、靈界に於ける靈魂、物質兩面の守護に任じ給ひたれ  
ば、其神業に於て大なる相違のおはす事はもとよりなり。如何に紫微天界と雖も  
清淨無垢にして至賢至明なる神人數多おはさざれば、其統制につきては、いたく  
神慮を難ませ給ひたり。

天の道立の神は個神々々についての誠を教へ給ひ、太元顯津男の神は宇宙萬有  
に對しての教化を司り給ひけるが、西の宮の教は意外に凡神の耳に入り易く、且  
つ誠を誠として認め得るに反して、東の宮の御教は範圍廣大にして小事に關はら  
ず、萬有修理固成の守護なれば、いづれも凡神の耳に入り難く、遂には配下の神々  
の中よりも反抗者現れ來りて、顯津男の神をなやまし奉る事一再ならざりける。  
顯津男の神は表に個神の悟り得べき西の宮の教を唱導し、聰明なる神人に對して  
は天下經綸の大業を説き明したまへば、其苦心又一方ならざりき。

顯津男の神は高地秀の峰に上り御代を歎きつつ、御聲さへも濕らせて三十一文  
字の言靈を宣らせたまふ。其御歌。

東ひむがしの空そらより輝かがやく天津陽あまつひも

西にしに傾かたむく神代みよなりにけり

ふき荒すさぶ醜しこの嵐あらしをなごめむと

幾年いくとせ我われはなやみたりしよ

大神おほかみの神旨みむねにそむくよしもなく

泣なきいさちつつ永久とほにつとむる

よしあしの眞言まことのもとを白浪しらなみの

漂ただよふ世よこそ淋さみしかりけり

嚴いづみ御靈みたま西にしの宮居みやゐの御教みをしへは

凡ただが神達みたちの耳みみに入いるなり

東ひむがしの宮みやの教をしへは凡神ただがみの

悟さとり難がたきぞ惟神かむながらなる

大宇宙だいうちう現あらはれ出いでし昔むかしより

今いまに苦くるしき我われなりにけり

長ながき世よを經しぐ綸みの爲ために苦くるしみて

泣なきいさちつつ今いまに及およべり

八や十そ比ひ女めを我われ持もたせれば凡ただがみ神は

經しぐ綸みを知しらず言こと擧あげなすも

八や十そ比ひ女めの御み樋ひ代しろなくば如いか何かにして

此この天てん界かいをひらき得うべきや

主スの神かみの神み言ことかしこみ凡ただがみ神の

嘲あざけり譏そしりに忍しのびつつ居ゐる

永とこ久しへに神み國くにを立たつ礎いしは

國くに魂たま神がみを生うむより外ほかなし

ももさらふ蟹かにの横よこさの道みちもある

神かみ代よに我われは正まさ道みちをゆく

大おほなる真ま言ことの道みちは凡た神がみの

目めに入いり難がたく諾うべひ難がたし

千ち萬よろづに心こころくだきて高たか地ち秀ほの

宮みやに朝あさ夕ゆふ仕つかへまつるも

萬よろづよ世よの末すゑの末すゑまでわが魂たまは

若わか返がへりつつ世よの爲ためいそしむ

凡ただ神がみには西にしの道みち説とき賢さかし神がみに

東ひがしの道みちを説とくはせわしも

わが身み近ちかく侍はべる妻つまさへ主すの神がみの

眞ま言ことの經しぐ綸み知しらぬ淋さびしさ

わが近ちかく仕つかふる八や人たりの比ひ女め神がみの

中なかにも我われを悟さとらぬ神がみあり

凡ただ神がみの心こころの暗やみに乗じやうじつつ

醜しこの曲まが靈ひはかき廻まはすなり

一ひと日ひだも被はらひの言こと葉は宣のらざれば

忽たちち亂みだれむ此この天てん界かいは

さしのぼる天津日光も時折は

黒雲くろくもつつむと思おもひて忍しのぶも

經緯たてよこの神かみの經綸しぐみも知しらずして

さわぎ廻まはるも凡神ただがみの群むれ

成なし遂とぐるまでは心こころをゆるめじと

思おもひつ辛つらき我身わがみなりけり

果はてしなき此この天界てんがいを治をさめむと

心矢竹こころやたけにはやる我われなり

まことにも大中小だいちゅうせうの差別けぢめあり

凡神ただがみ大だいなる眞言まことを知しらず

上根じやうこんの御魂みたまの神かみに非あらざれば

わが説とく眞言まことはみとめ得えられじ

中根ちゅうこんの神かみはわが身みの經綸しぐみをば

言葉ことば喧かしましくさやぎ廻まはるも

さりながら諭せば諾ふ中根の

みたまは我の力なりけり

上根の御魂少く中根の

御魂もあまり多からぬ神代

うようよと下根のみたまはびこりて

わが説く道にさやるうるささ

うるさしと言ひて捨てなば凡神の

安きを守る道は立たなく

愛善の眞言の心ふりおこし

朝夕をいそしむ我は

玉の緒の命死せむと思ふまで

幾度我は心をなやめし

曲津みたまを眞言の魂に甦し

授けむとする我は苦しも

主スの神かみの至し純じゆん至し粹すいの言こと靈たまに

生あれし世界せかいもくもるうたてさ

朝あさ夕ゆふに妖えう邪じやの空くう氣き拂はらはねば

この天てん國こくは暗やみ世よとならむ

大おほ神かみの神み言ことかしこみ大おほ宮みやを

玉たまと銚ほことの光ひかりに守まもらむ

わが身みには左さ守もり右う守もりの神かみもなく

獨ひとり淋さびしく世よを開ひらくなり

比ひ女め神がみは數あ多またあれども今いますぐに

力ちからとならむ種たねのすくなき

御み祭まつりに仕つかへまつらむ暇ひまもなく

我われは神み國くにをかけ廻めぐりつつ

神かみまつる司つかさの神かみは澤さはあれど

わが神かみ業わざを助たすくる術すべなし

直接ちよくせつのわが神業かむわざを助け守たすもる

神かみの出いでまし待まつぞ久ひさしき

鬼おに大蛇をろち醜しこめ女さぐめ探ひ女つきも日に月に

むらがり起おこりて道みちにさやれり

果はてしなき紫微しびてん天界んかいの神業かむわざに

仕つかへて朝夕あさゆふ身魂みたま碎くだきつ

久方ひさかたの天あめの道立みちたつ男をとこの神かみの

教生をしへかしてなやむ我われなり

此國このくにに眞言まことの道みちを知る神かみの

十柱とほしらあらば我われはなやまじ

主スの神かみに朝夕あしたゆふを祈いのれども

つぎつぎおこる醜しこのたけびよ

高地たかちほ秀ほの尾上をのへは如何いかに高たかくとも

わが苦くるしみに及およばざるべし



主スの神かみの造つくりたまひし天國てんごくの  
司つかさよ今日けふより我われは歎なげかじら

斯かくの如ごとく顯あきつ津男をの神かみは肝きもむかふ心こころの銚ほこをとり直なほし、大勇だいゆう猛心まうしんを發はつき揮きし、  
國くに向むけの銚ほこをとらし給たまひ、大善たいぜんの道みちに進すすませ給たまひぬ。

罪つみ汚けがれ無なしと思おもへる天國てんごくも

醜しこの仇あだ雲ぐもたつぞ怪あやしき

惟かむながらまこと  
神かみ眞言まことの道みちをふみしめて

邪神じゃしんの荒すさぶ世よに我われ勝かたむら

(昭和八・一〇・一〇 舊八・二一 於水明閣 加藤明子謹録)

第一二章 水火の活動（一八四三）

大宇宙間に鳴り鳴りて、鳴り止まず、鳴りあまれる嚴の生言靈又聲によりて、七十五聲の神現れ給ひしことは、既に前述の如し。

その言靈は鳴り鳴りて、遂に大宇宙間に火と水との物質を生み給ふ。抑々一切の靈魂物質は何れもその言靈の生むところなり。而して火の性質は横に流れ、水の性質は縦に流るるものなり。故に火は水の力によりて縦にのぼり、又水は火の横の力によりて横に流る。昔の言靈學者は火は縦にして、水は横なりと言へれども、其の根元に至りては然らず、火も水なければ燃ゆる能はず光る能はず、水も亦火の力添はざれば流動する能はず、遂に凝り固まりて氷柱となるものなり。冬の日の氷は火の氣の去りし水の本質なり、此の理によりて水は縦に活用をなし、火は横に動くものなる事を知るべし。

天界に於ける光彩炎熱も内包せる水氣の力なり。紫微天界には大太陽現れ給ひて左旋運動を起し、東より西にコースを取るのみにして、西より東に廻る太陰な

し。炎熱猛烈にして神人を絶対的に安住せしむる機關とはならざりしかば、茲に  
太元顯津男の神は高地秀の峰にのぼらせ給ひ、幾多の年月の間、生言靈を奏上し  
給へば、大神の言靈宇宙に凝りて茲に大太陰は顯現されたるなり。而して大太陰  
は水氣多く火の力をもつて輝き給へば、右旋運動を起して西より東にコースをと  
り、天界の神人を守らせ給ふ。天之道立の神は大太陽を機關として、凡百の經綸  
を行ひ給ひ、太元顯津男の神は大太陰を機關として宇宙天界を守らせ給へば、茲  
に天界はいよいよ火水の調節なりて以前に勝る萬有の榮を見るに至れり。  
太元顯津男の神は大太陰界に鎮まり給ひて至仁至愛の神と現じ給ひ、數百億年  
の末の世迄も永久に鎮まり給ふぞ畏けれ。至仁至愛の大神は數百億年を経て今日  
に至るも、若返り若返りつつ今に宇宙一切の天地を守らせ給ひ、今や地上の覆滅  
せむとするに際し、瑞の御靈の神靈を世に降して更生の神業を依さし給ふべく、  
肉の宮居に降りて神代に於ける御活動そのままに、迫害と嘲笑との中に終始一貫  
盡し給ふこそ畏けれ。

大太陽に鎮まり給ふ大神を嚴の御靈と稱へ奉り、大太陰界に鎮まりて宇宙の守

護に任じ給ふ神靈を瑞の御靈と稱へ奉る。嚴の御靈、瑞の御靈二神の接合して至仁至愛神政を樹立し給ふ神の御名を伊都能賣神と申す。即ち伊都は嚴にして火なり、能賣は水力、水の力なり、水は又瑞の活用を起して茲に瑞の御靈となり給ふ。紫微天界の開闢より數億萬年の今日に至りていよいよ伊都能賣神と顯現し、大宇宙の中心たる現代の地球（假に地球といふ）の眞秀良場に現れ、現身をもちて、宇宙更生の神業に盡し給ふ世とはなれり。

嚴御靈瑞の御靈の接合を

伊都能賣御靈と稱へまつらふ

嚴の御靈太陽界に在しまして

火の活動を行ひたまふ

瑞の御靈太陰界にましまして

水の活動を行はせたまふ

いづいづし嚴の御靈の活用に

宇宙を包む火は光るなり

みづみづし瑞の御靈は幸ひて

宇宙に水の力を與ふ

ここに説く太陽太陰兩神は

我が地より見る陰陽に非ず

火は水の力に動き水は火の

力によりて流動するなり

何事も水のみにしては成らざらむ

火の助けこそ水を生かすも

火のみにていかで燃ゆべき光るべき

水の力をかりて動くも

火と水の言靈これを火水といひ

又火水と言ふ宇宙の大道

水と火の言靈合して水火となり

宇宙萬有の水うちうばんいう火いとなるなり

火ひと水みづは即すなはち火か水みなり水みづと火ひは

即すなはち水し火ほなり陰陽いんやうの活動はたらき

水みづと火ひの活用はたらきによりてフの靈みたま

即すなはち力ちからあらはるなり

雨あめも風かぜも雪霜霰ゆきしもあられも水みづと火ひの

交まじはる度合どあひによりてなるなり

大空おほぞらに輝かがやく日月星辰じつげつせいしんも

雷電いかづちも水火すゐくわの力ちからよ

火ひの系統けいとうばかり處ところを得顔えがほなる

世よは曇くもるより外ほかに道みちなし

猛烈まうれつなる力ちからをもちて萬有ばんいうを

燒盡せうじんするは火ひの行爲すさびなり

火ひの力ちからのみ活動はたらける世よの中なかは

亂れ曇りて治まることなし

地の上の百の國々に月に

禍起るは火のみの世なり

亂れ果てし世を正さむと瑞御靈

嚴の御靈と共に出でませり

瑞御靈の力のみにて萬有は

如何で榮えむ火のあらざれば

火と水を鹽梅なして世に出づる

伊都能賣神の活動尊し

伊都能賣の神は地上に降りまし

宇宙更生に着手したまへり

嚴御靈陽氣を守り瑞御靈

陰を守りて國は治まる

瑞御靈至仁至愛の神と現れて

天あめの御柱みはしらたつる神代みよなり

伊都いづ能賣のめの神かみの功いさをのなかりせば

世よの行先ゆくさきは亡ほろび行ゆくべし

萬有ばんいうを育そだて助たすくる神業かむわざは

瑞みづの御靈みたまの力ちからなりけり

火ひと水みづの二ふたつの神業みわざありてこそ

天地てんちく活動わつどう次つぎ次つぎ起おこる

われは今いま伊都いづ能賣のめの神かみの功いさをもて

曇くもれる神代みよを光てらさむと思おもふ

(昭和八・一〇・一一 舊八・二二 於水明閣 加藤明子謹録)

第一三章 神かみの述懷歌じゆつくわいか (一) (一八四四)



太元顯津男の神は太陰を機關として、御靈を月界に止めて其肉體は高地秀の宮に朝な夕なに仕へまし、神の經綸を行はむとして、彼方此方に教司を分配りて天界の經綸に仕へ奉れども、嚴の御靈の御教を誤信せる凡神は個神的小乗教に傾く神のみ多くして、國生み神生みなる天界經綸の御神業を悟らず、種々のあらぬことのみ言ひ觸らして力限りに妨ぐるぞ是非もなき。太元顯津男の神は高地秀の峰に登らせ給ひ、天を拜し地を拜し述懐を謠ひ給ふ。

主の神の依さしはおろそかならねども

手を下すべき餘地もなきかな

國を生み神生み萬のものを生む

我神業は果し得ざるか

主の神の神宣畏し國魂の

神生まばやと思ふ朝夕

我にして怪しき心持たねども

百神もがみたち達はわが道みちなみする

ゆとりなき心こころを持もてる凡神ただがみの

醜しこのささやき由ゆ々ゆしかりけり

凡神ただがみの心こころに従したがふ我われなれば

妨さまたげらるることもあるまじ

凡神ただがみの心こころに叶かなへば主スの神かみの

神慮しんりよに合あはず我われ如何いかにせむ

主スの神かみの大經綸だいけいりんを知らずして

我われを惡あしさまに言いふぞうたてき

主スの神かみの心こころは深ふかく又また廣ひろし

小ちひさき神かみの如何いかで悟さとらむ

凡神ただがみは濱はまの眞砂まさごの數かずの如ごと

多おほく居あ坐ませば詮せん術すべもなし

主スの神かみの御心みこころ覺さとる敏さとき神かみ

すくな  
少き神世の經綸は苦し

をちこち  
遠近に御樋代神は配りあれど

あひみ  
相見むよしも無き身なりけり

い  
すくはし神を生まむと朝な夕な

ねが  
願ひしこともあだとなりぬる

ス  
主の神の造り給ひし天界の

せいめいしんご  
清明眞悟の神ぞすくなき

ス  
主の神の依さしを如何に果さむと

われ  
我は久しく艱みけるかな

すめかみ  
皇神の依さし給ひしくはし女も

また  
又さかし女もあはむすべなし

みよ  
御依さしに反くと思へど天界の

みだ  
亂れ思ひてためらふ我なり

主の神が顯津男の神に天界經綸の爲め授け給ひし八十の比女神は、徒らに神命を待ちつつ長き年月を経給ひにける。とりわけ側近く仕へ奉れる八柱の比女神も、凡神の囁き餘り強きに怖ぢ給ひて空しく神業を放棄し、只時の到るを待ち給ふのみ。終には老い去り給ひて神業を果し得ず、世は益々曇らひ荒びて、さしもの天界も日に月に邪神蔓延し、收拾すべからざるに至れるこそ是非なけれ。顯津男の神は大勇猛心を發揮し、其神業を敢行せむと、村肝の心の駒を立直し給ひしこと幾度なりしか、されど終には百神の雄猛びに妨げられて、遂行し給はざりしこそ永劫の遺憾なりける。八柱の御側近く仕へ奉る比女神は、顯津男の神に對し述懐を述べ給ふ。其の御歌、

主の神の御靈を受けし壽々子比女の

心しらずやあが主の岐美は

結ばれし心を解かむ術もなし

神業に仕ふる暇にしなければ

天界てんかいの穢けがれを水みづに壽す々ず子こ比ひ女め

深ふかき流ながれに落おち入いりにける

天界てんかいはさやけく廣ひろし曇くもりたる

心こころいだきて縮ちぢまるべきやは

玉たまの緒をの生いのち命の限かぎり仕つかへむと

思おもふ誠まことを岐き美みは汲くまずや

吾わが心こころ淋さびしくなりぬ朝あさ夕ゆふを

御み側そばに仕つかへて詮せん術すべなれば

朝あさ夕ゆふを岐き美みに仕つかふる身みながらも

夢ゆめうつつなる御み靈たまの吾われなり

夢ゆめかあらず顯うつかあらず幻まぼろしか

まぼろしならぬ岐き美みが神み姿すがた

高たか地ち秀ほの宮みやに朝あさ夕ゆふ祈いのりつつ

まだ吾わが時ときは到いたらざりけり

大神おほかみの依よさし給たまひし此この月つき日ひ

あだに過すこさむ身みこそうたてき

主スの神かみの大おほみ御こころ心を汲くみ奉まつり

岐き美みの御み旨むねを悟さとりては泣なく

泣なくさへも自由じゆうにならぬ吾わが身みなり

神かみにある身みは殊ことさら更さらつらし

顯あきつ津つ男をの神かみは、之これに答こたへて謠うたひ給たまはく、

比ひ女め神がみの心こころ汲くまぬにあらねども

時とき到いたるまで忍しのびて待まちませ

吾われとても木ほく石せきならぬ身みにしあれば

汝なれの悲かなしき心こころは知しれり

壽す々ず子こ比ひ女めの神かみは謠うたひ給たまふ。

斯かくらば束つかの閒まさへも忍しのび得えじ

岐き美みが心こころの弱よわきをかなしむ

天あめ地つちに憚はばか事ことのあるべきや

主すの大神おほかみの依よさしなりせば

顯あき津つ男おとこの神かみ 兔とも角かくも暫しばしの閒あひだ待またれたし

我われにも春はるの備そなへありせば

斯かく互たがひに歌うたを取とり交かはし時ときの到いたるを待まち給たまひぬ。

朝あ香さ比か女ひめの神かみも亦また御み歌うた詠よまし給たまは

く、

岐美思ふ心は暗にあらねども

思ひにもゆる朝香比女吾は

あさからぬ朝香の比女の胸の火を

消し止め給へ瑞の大神

朝夕を岐美に侍らふ朝香比女の

深き心を汲ませ給はれ

心弱き岐美と思ひて朝香比女

朝な夕なのいきどうるしもよ

曇りたる神の心を迎へます

岐美の心の弱きをかなしむ

燃えさかる炎を消さむ術もなし

幾度死なまく思ひたりしよ

顯津男の神にいませば明けく

此世に晴れて見合ひまします



一度のみとのまぐはひあらずして

忍ばるべしやは若き女の身に

嚴の御靈神の教は重けれど

あまりの堅きをうらみつつ生く

主の神の許し玉ひし道なれば

如何でためらふことのあるべき  
』

顯津男の神は、之に答へて御歌詠ませる。

あさからぬ眞心清き朝香比女

汝の艱みは吾も知るなり

心弱き我にあらねど今暫し

眞の神の出づるまで待て

我とても依さしの神業遂げざるを

朝あさな夕ゆふなに悲かなしみて居をり」

朝あさ香か比ひ女めの神かみは再ふたび謠うたひ給たまふ。

朝あさ夕ゆふをこめて恨うらみし吾わが心こころ

朝あさ香かの比ひ女めのあさましきかな

燃もゆる火ひの火ほ中なかに立たちし心こころ地ちして

朝あさな夕ゆふなを岐き美み思おもひ泣なく

村むら肝きもの心こころの誠まことを岐き美みの前まへに

打うち明あけしこそせめてもと慰なぐさむ」

宇う都づ子こ比ひ女めの神かみは、顯あきつ津つ男をの神かみの前まへに御み歌うた詠よまし給たまふ。

村むら肝きもの心こころは炎ほのほに包つつまれて

つれなき岐美を恨むのみなる

よしやよし百神如何にはかゆとも

神の神業をばはかるべしやは

岐美こそは比古遅にませば神の爲め

經綸のために憚り給ふな

朝夕に御側を近く仕へつつ

岐美にまみゆることの苦しき

宇都比女が貴の心を明さむと

岐美の御前に言擧げするも

岐美思ふ心の絲は百千々に

亂れ亂れて解くよしもなし

御側近く仕へ奉らふ身ながらも

言問ふさへも儘ならぬ身よ

蟹が行く横さの神の言の葉を

拾ひろひ給たまはず吹ふき捨すてませよ

言こと靈たまの伊い吹ぶきの狹さ霧ぎりに醜し草くさの

醜しの言ことの葉は吹ふき拂はひませ

御おん側そばに侍はるはつらし御おん側そばを

離はるも憂うき吾われなりにけり

神かむ業わざの何い時つ果はつるとも知しらずして

月つき日ひを送おくる吾わが身をぞ悲かなしき

此この上うへは心こころの駒こまを立て直なし

吾われにゆるせよ一いち夜やの契ちぎりを

顯あ津きつ男をの神かみ、答こたへて謠うたひ給たまはく、

手たま枕くらの夢ゆめは夜よな夜よな見みながらも

逢あひ見みることのあたはぬ苦くるしさ

主スの神かみに言い譯ひわけ立たたず側そばの女めに  
男をの甲か斐ひもなきわが身みは苦くるしき  
今いま暫しばし神かみ々がみの心こころ明あくるまで  
時ときを待またせよいとほしの汝なれ  
𠮟

宇う都づ子こ比ひ女めの神かみは再ふたび謠うたひ給たまふ。  
。

𠮟  
はしたなき女をみなの繰くり言こと繰くり返かへし  
岐き美みなやませしことかなの悲かなしき  
恥はづかしさ苦くるしさ面おもはほてれども  
得え堪たへ兼かねつつ眞ま心こころのべしよ  
此この上うへは岐き美みをなやます力ちからなし  
神かみに任まかせて時ときを待またむか  
惟かむ神ながらの依よさしのなかりせば

かほどに吾は悩まじものを

梅咲比女の神も亦述懐の歌を述べ給ふ。

如月の梅咲く春に逢ひながら

かをるすべなき現身の花

大方の春の陽氣の漂へる

此天界を淋しむ吾なり

春立ちて梅咲く比女のあだ花を

岐美はあはれと思召さずや

天地も一度に梅咲く比女のわれ

小さきことを如何で思はむ

背の君の苦しき心を諾ひて

吾はもださむ春の身なれど

開ひらくべきよしなき花はなと知しりながら

岐美きみの戀こひしくなりまさりつつ

春はる立ちて梅うめ咲く比女ひめの初花はつはなは

開ひらかむとして霜しもに打うたれつ

雪ゆきも降ふれ霜しもも霰あられも降ふりて來こよ

春はるをかかへし梅うめ咲比女さくひめよ

惟かむながらときなの到いたるを待またむかと

幾度いくどか心こころを立直たてなほしつつ

曇くもりたる此この世よの中なかを照てらします

岐美きみの神業みわざの苦くるしさに泣なく

顯津男あきつをの神謠かみうたひ給たまふ。

眞心まごころの君きみの眞言まことにあひてわれ

安やすくなりつつなほもかなしき

百もろ神がみの醜しこのたけびは恐おそれねど

亂みだれ行く世よを思おもひてためらふ

今いまの世よに嚴いづの御靈みたまの道みちなくば

わが神業かむわざはやすしと思おもへり

さりながら嚴いづの御靈みたまの光ひかりなくば

瑞みづの力ちからは備そなはらざるべし

汝なれこそは我われの心こころをよく知しれり

我われまた汝なれが心こころをあはれむ

ぬゑ草くさの女めにしあれども汝なが心こころの

雄を々をしさ赤あかさに感かん謝しやの念ねん湧わく

今いま暫しばし待またせ給たまへよ汝なが心こころに

添そはむ月つき日ひも無なきにあらねば

朝あさ夕ゆふに神業みわざを思おもふわが胸むねを



覺らす公の心嬉しも  
『

梅咲比女の神は又謠ひ給ふ。

愛戀やの岐美の言靈耳にして

梅咲く春に逢ふ心地せし

惟神岐美の心に任せつつ

忍び奉らむ幾年までも

村肝の心のたけを岐美の前に

今あかしたることの嬉しき

天界はよし破るとも愛戀やの

岐美の眞言は忘れざるべき

主の神の造り玉ひし天界にも

朝夕かかる悩みを持つも

眞清水ましみづに昆虫うじむしのわく例ためしあり

天界てんかいなりとてかはりあるべき

花子比女はなこひめの神かみの歌うた。

天界てんかいに非時ときじく匂におふ花子比女はなこひめの

花はなは香かもなく艶つやだにもなし

天界てんかいの花はなと咲さくべき吾身わがみなり

岐美きみは何故なにゆゑ手折たをりまさずや

花はなも實みも無なき岐美きみかもと朝夕あさゆふに

涙なみだの雨あめに潤うるほふ吾われなり

よしやよし百神ももがみ如何いかに譏そしるとも

踏ためらふことなく手折たをり給たまはれ

天國てんごくの春はるに逢あひたる花子比女はなこひめの

心に時じく降る時雨かな

玉の緒の命までもと思ひつつ

吾は野に咲く紫雲英の花かも

神業はただに畏したためらひて

ただ徒らに過すべきやは

朝夕につれ無き岐美に侍りつつ

神業の日を待つ身はうたてき

玉の緒の命死せむと思ふまで

胸の炎は燃え盛りつつ

炎々と御空をこがす火炎にも

似て苦しもよあつき心は

嚴の御靈の神の教は聞きながら

瑞の御靈をあはれと思へり

大局に目をつけずして百神は

小さきことに言さやぐかも

神界の大經綸を妨ぐる

醜の曲神打拂ひませよ

顯津男の神、答へて謠ひ給ふ。

愛善の神の教を説く身には

如何ではふらむ醜の曲靈を

わが力及ばむ限り説き諭し

愛と善とに照さむとぞ思ふ

愛善の心しなくば我とても

經綸の神業ためらひはせじ

瑞々し瑞の御靈の神業は

一神も捨てぬ誓ひなりけり

花も實もある言の葉にほだされて  
悲しくなりぬ汝が眞言に」

花子比女の神は又謠ひ給ふ。

花も實もある身魂ぞと宣らすこそ

命にかへて嬉しかりけり

よしやよし岐美に逢ふ日のあらぬとも

吾はうらまじ歎かじと思ふ

曲神の中に交こり雄々しくも

忍ばす岐美の心をいとしむ

女の子吾岐美の眞心知る故に

只一度の言擧げせざりき

神業を誰はばからず勤むべき

時を待ちつつ楽しみ暮さむ<sup>くら</sup>』

(昭和八・一〇・一一 舊八・二二 於水明閣 森良仁謹録)

第一四章 神の述懐歌(二) (一八四五)

香具の比女の神は、はるばる高地秀の山に鎮まります大宮に詣で、  
の御前に静に進みて御聲も清々しく謠ひ給ふ。  
顯津男の神

☐ 天なるや音橘の永久に

香具彌の比女は御歌まゐらす

岐美が女とさだまりてより幾月日  
けながくなれど今だにさみしき

岐美きみこそは男神をがみにませば雄々をしくも

醜しこの言葉ことばになやまざるべし

玉たまの緒をの命いのちを岐美きみに捧ささげつつ

死しなまく思おもふこの頃ごろの吾われ

曲神まががみの醜しこのささやきしげくとも

われはおそれじ岐美きみと逢あふ日ひを

岐美きみを慕したふ心こころは兔ともあれ角かくもあれ

神かみの神業みわざの遅おくるをおそる

吾われこそは須勢理すせりの比女ひめにあらねども

神業みわざかしこみ岐美きみに計はかるも

契ちぎりてしその生日いくひより七八年ななやとせ

経へぬれど未いまだ音おとづれもなし

吾わが思おもひ夢ゆめか現うつつか白雲しらくもの

なかに迷まよへる橘たちばなの香かをりよ

橘たちばなの香具かぐの木この實みの名なを負おひし

われは五月さつきの雨あめにしをれつ

わが心こころくませ給たまへば片時かたときの

夢ゆめの枕まくらを交かはせたまはれ

如何いかにして日頃ひごろの惱なやみはらさむと

思おもひつつなほ曇くもるわが身みよ

曇くもりたる世よを照てらさむと岐き美みは今いま

小ちひさき事ことに心こころひかすな

よしやよし百神ももがみたち達は計はかゆとも

おそれ給たまふな惟神かむながらにて

惟神かむながら眞まことの神かみの御言みことば葉はを

守まもるは司つかみの務つとめなるべし

花はな匂におふ春はるの櫻さくらも秋あきされば

梢しげのもみぢ葉は散ちる世よなりけり



この儘ままに散ちらむは惜をしき香具かぐの比女ひめ

わが若わかき身みを如何いかに思召おぼすや

若わかき身みを神かみの大道おほぢに任せまかつ

惱なやみの淵ふちに沈しづみぬるかな

何事なにごとも時ときの廻めぐりとあきらめつ

苦くるしき心こころを忍しのびつつ生いく

わが命いのち消きえぬばかりに思おもひつつ

愛戀いとこやの岐美きみを忘わすれかねつも

岐美きみこそは雄々ををしき男神をがみよ吾われはただ

かよわき心こころ抱いだきて涙なみだす

神業かむわざを務つとめむとして務つとめ得えぬ

醜しこの曲世まがよのうらめしきかも

ここに顯津男あきつをの神かみは、御歌みうたもて答こたへ給たまはく、

美しき香具彌の比女の心かも

男の身ながらも涙にくるる

汝が心汲まぬにあらねど今日の我は

神代を思ひて黙しゐるなり

村肝の心はやたけと逸れども

汝に報はむ術なきをかなしむ

時來れば花橘の香具の比女よ

我おほらかに手折らむと思ふ

男子われためらふ心あらねども

この世を思ひて時を待つなり

われこそは浦洲の鳥ぞちちと啼く

千鳥にも似て啼きさけぶなり

やがて今朝日昇らば汝が心

明し照さむしばしを待ちませ

香具かぐの比女ひめの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

☐  
青山あをやまに日ひが昇のぼる世よを待またせとは

あまりにつれなき心こころならずや

若わかき身みをただ徒いたづらに待まち侘わぶる

こころは苦くるしき濱はま千鳥ちどりかも

青山あをやまに日ひの隠かくひし世よにしあれば

岐美きみがなさけの枕まくら戀こほしも

神業かむわざの妨さまたげなさじと忍しのびつつ

また神業かむわざの後おくるをおそる

世よを守るまもる尊たふとき御子みこの生うまれずば

如何いかで神國みくにの基もとめたつべき

天界てんかいの基もとめを建たつる神業かむわざを

おろそかにせし罪つみをおそるる

よしやよし曲神達はさやぐとも

主の言の葉にそむくべきやは

さりながら岐美の心に従ひて

吾おとなしく時を待つべし

次に狭別の比女の神は、比古神の御前に立ちて御歌詠まし給ふ。

主の神の依さしによりて神業に

仕へ奉ると岐美に誓ひし

契ひてし日より幾年経たれども

岐美のおとづれ無きぞ淋しき

八柱の比女の一つに數へられ

花の盛りをあだに過ぎけり

春すめば櫻の花も散りぬべし

早手折りませうづの心を

吾にしてあやしき心持たねども

神に叛かむことの口惜しき

比古神の御樋代として仕へ居る

われに樂しき日はなかりけり

天界は愛と善との國と聞くに

たのしみ事を未だ知らなく

知らず知らず岐美に仕へて年さびぬ

ほかに心を移さぬ吾は

若草の妻と御側に侍りつつ

まだ一度の神業もなし

神業に仕へまつると主の神の

みことかしこみ年古りにけり

不老不死の天津神國と聞き乍ら

年<sup>とし</sup>さびぬか<sup>と</sup>さびしまれける

わが<sup>なみだてん</sup>涙天<sup>のほ</sup>に昇<sup>のぼ</sup>りて雲<sup>くも</sup>となり

凝<sup>こ</sup>り固<sup>かた</sup>まりて雨<sup>あめ</sup>と降<sup>ふ</sup>るなり

汝<sup>な</sup>が岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の情<sup>なさけ</sup>の雨<sup>あめ</sup>の露<sup>つゆ</sup>うけず

わが<sup>なみだ</sup>身の涙<sup>なみだ</sup>のつゆに濡<sup>ぬ</sup>れつつ  
□

顯<sup>あきつを</sup>津男<sup>かみ</sup>の神<sup>かみ</sup>は憮<sup>ぶ</sup>然<sup>ぜん</sup>として、返<sup>かへ</sup>し歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

□  
汝<sup>な</sup>が惱<sup>なや</sup>み我<sup>われ</sup>は知<sup>し</sup>らぬにあらねども

せむ<sup>かた</sup>方<sup>かた</sup>なさに忍<sup>しの</sup>び居<sup>ゐ</sup>るなり

醜<sup>しこくま</sup>草<sup>くさ</sup>の言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>しげき世<sup>よ</sup>なりせば

神<sup>かみ</sup>のみ業<sup>わざ</sup>をためらひて居<sup>を</sup>り

ためらひの心<sup>こころ</sup>は真<sup>まこと</sup>の主<sup>す</sup>の神<sup>かみ</sup>に

逆<sup>さか</sup>ふとも思<sup>おも</sup>ひつ未<sup>ま</sup>だ果<sup>はた</sup>し得<sup>え</sup>ず

天界てんかいの萬よろうの業わざを任まけられて

忙せはしき我われを曲まが神かみ議はかゆも

美みづしき優やさしき汝なれが眞まじ心こころに

われはほだされ夜よ々に涙なみだす

一ひと時ときの契ちぎさへなきつれなさを

くやみ給たまふな愛いと戀こやの比ひ女め

やがて今いま天あまの岩いは戸はとのあきらけく

開ひらかむ時ときを樂たのしみ待またせよ

狹さ別わけ比ひ女めの神かみは御み歌うたもて答こたへ給たまふ。

□  
ありがたし勿もつ體たいなしと思おもひつつ

岐き美みの言こと葉はのうらめしきかな

ただ見みれば雄を々をしき岐き美みの眞まじ心こころの

奥には降らむ涙の雨は

わが涙神國の爲になるならば

苦しき月日も喜び忍ばむ

小夜子比女の神は、比古神の御前に立ちて靜に謠ひ給ふ。その御歌、

久方の天の烽火夫の神言もちて

神業のために岐美に仕へし

岐美がりに朝な夕なを仕ふるも

主の大神の神宣なればなり

百八十の日を忍びつつ岐美がりに

仕ふる心の戀しさ苦しさ

天界は愛と善との世界なれば

愛することの罪となるべきや



天界てんがいに嚴いづの教をしへを守まもらずば

心こころの惱なやみあらざらましを

年としさびし岐美きみを守まもりて朝あさな夕ゆふな

仕つかへ奉まつるも神かみの御おんため

主スの神かみの國くに魂たま生まみの神業かむわざを

おろそかにせむ事ことの苦くるしき

朝夕あさゆふに相見あひみ仕つかふる吾われなれば

心こころの惱なやみ日ひ々びにつのるも

この惱なやみ救すくはむものは汝なが岐美きみの

雄を々をしき心こころの光ひかりとぞ思おもふ

何故なにゆゑにためらひ給たまふか主スの神かみの

嚴いづの言葉ことばの神業かむわざなるをを

比古神ひこがみはこれに答こたへて謠うたひ給たまふ。その御歌おんうた、

小夜砧打つ術もなきわが身なり

醜のみかみの言葉しげくて

主の神にははかる由はなけれども

醜の魔神の言葉うるさき

醜神のところを得たる天界に

眞の仕組なすは苦しき

われも亦ためらひにつつ神業に

おくれむ事の口惜しく思ふ

一度の小夜の枕も交へざる

わが悲しさを汲みとらせませ

やがていま百神達を言むけて

神の依さしの神業に仕へむ

汝が心深くさとりて我は今

悩みの淵に沈みてぞ居る

わが胸の焰はしきりに燃ゆれども

瑞の御靈の力に消しつつ

千萬に月日を惱めるわが心

覺りて待てよ小夜子比女の神

小夜子比女の神はまた謠ひ給ふ。その御歌、

はしたなき吾の言葉を許しませ

戀しさ迫りて宣りし繰り言

この上は岐美を惱まし奉らじと

こころの駒に鞭打ち忍ばむ

あきらけき紫微天界のなかにして

かかる歎きのありと知らざりき

何事も比古遅の神の御心に

任せて静に其の日を待たなむ<sup>まか しづか その ひを ま</sup> 〇

斯く八柱の比女神は、日頃積り積りし思ひのたけを比古神の前に打明け給ひて  
より、心清々しく改まり大前に朝夕を仕へつつ、天の時到るを待たせ給ふぞ畏け  
れ。

(昭和八・一〇・一一 舊八・二二 於水明閣 内崎照代謹録)

第二篇 高照神風<sup>たかてるしんぷう</sup>

第一五章 國生みの旅<sup>くにうみのたび</sup> (一八四六)

火は水の力によりて高く燃え立ち上り其熱と光を放ち、水は又火の力によりて横に流れ低きにつく、之を水火自然の活用と言ふ。火も水の力なき時は横に流れて立つ能はず、水は又火の力なき時は高く上りて直立不動となりて、其用をなさず。霧となり、雲となり、雨となりて、四方の國土を濕すも皆水の靈能なり。火を本性として現れ給ふ嚴の御靈を天之道立の神と申すも此の原理より出づるなり。次に太元顯津男の神と稱ふるも、水氣の徳あらゆる萬有に浸潤して其徳を顯すの意なり。故に天之道立の神は紫微の宮居に永久に鎮まりて經の教を宣り給ひ、太元顯津男の神は高地秀の宮に鎮まりました、四方の神々を初めあらゆる國土を濕ほし給ふ御職掌なりける。故に主の大神は太元顯津男の神に對し、國生み神生みの神業を依さし給ひて、八十柱の比女神を御樋代として顯津男の神に降し給ひ、殊に才色勝れたる八柱の神を選びて御側近く仕へしめ給ひしは、天界經綸の基礎とこそ知られけり。

茲に顯津男の神は天理に暗き百神達の囁きに堪へ兼ね給ひて、尊き神業に躊躇し給ひけるが、主の神の大神宣默し難く、紫微の宮居に參ひ詣で、天之道立の神

に我もてる職掌をうまらに委曲に宣り給ひしかども、素より火の本性を有たす神なれば、顯津男の神の神言を諾ひ給はず、紫微の宮居の百神達も言葉を極めて顯津男の神の行動を裁きまつりければ、茲に御神は深く心を定めつつ、高地秀の宮に歸らせ給ひ、一柱の侍神も伴はず、月光る夜半を獨りとぼとぼ立出でまし給へば、白梅の香ゆかしく咲き香ふ榮城山横はる。茲に顯津男の神はほつと御息をつかせ給ひ、榮城山の頂に登りて、日月兩神を拜し天津祝詞を奏上し、我神業の完成せむ事をうまらに委曲に祈り給ひける。

顯津男の神は尾上に茂る常磐木の松を根こじにこじ、白梅の香る小枝を手折らせ給ひて松の梢にしばらくしまし、右手に手握り左手の掌に、夜光の玉を靜に柔かに捧げ持たし、松梅の幣を左右左に打振り打振り御聲爽かに祈り給ふ。其神言靈は忽ち天地に感動し、紫微天界の諸神は時を移さず神集ひに集ひまして、顯津男の神の太祝詞言を謹み畏み聽聞し給ふ。

掛けまくも綾に畏き久方の、神國の基とあれませる天の峰火夫の神は、澄みきり澄みきり主の言靈の神水火をうけて、空高くあらはれ給ひ、心を淨め身を清め、

いよいよ茲こゝに紫微しびてん天界かいを初めとし、外ほかに四層しそうの天界てんかいをうまうまに委曲つばらに生なり出いでま  
しぬ。紫微しびてん天界かいの要かなめてん天極きよく紫微しびの宮みやを見みたて給たまひ、之これを天あめの御柱みはしらの宮みやとななづけ給たまひ  
て、天あめ之道のみち立たつの神かみに靈界れいかいのことをううままららに委曲つばらに任まけ給たまひ、神かみの御代みよをば開ひらかせ  
給たまへと、次つぎ次つぎ曇くもる天界てんかいの此この有あり様さまを覽みはし、我われを東ひがしにつかはして、高たか地ち秀ほ山やまに  
下くだらせつ、茲こゝに宮居みやゐを造つくるべく依よさし給たまへば、ひたすらに畏かしこみまつり、天あま津つ國くにの  
遠とほき近ちかきに聳そびえます、山やまの尾上をのへや谷たに々だにの、茂木しげぎの良よき木きを撰えらみ立たて、本打切もとうちきり末すゑ  
打斷うちたちて、貴うづの御柱みはしら削けつり終をへ、高天原たかあまはらに千木高知ちぎたかしりて、我われは朝夕あさゆふ仕つかへまつりぬ。  
百神ももがみ達は紫微しびの宮居みやゐに對照たいせうして東ひがしの宮みやと呼よばはりつ、伊寄いより集つどひて大前おほまへに、朝あさな  
夕ゆふなの神嘉言かむよごと宣のり上げまつる折をりもあれ、主スの大神おほかみは嚴おこかに、東ひがしの宮居みやゐに下くだりまし、  
國くにの御柱みはしらの大宮おほみやと名なを賜たまひたる尊たふとさよ。茲こゝに主スの神かみもろもろの大御經綸おほみしくみと任まけ給たま  
ひ、あらゆる國くにを治をさむべく國魂神くにたまがみを生うませよと、八十柱やそはしらの比女神ひめがみを我われに下くだして、  
御空みそら高たかく元津御座もとつみくらに歸かへりましましぬ。我われはもとより瑞御靈みづみたま、一ひと所に留とどまるべきに  
あらねば、榮城山さかきのやまの上へに今立いまたちて、四方よもの神々かみがみさし招まねき、職掌つとめを委曲つぶさに、百ももの神々かみがみ  
司神つかさがみに今いまあらためて宣のり告つぐる。百神ももがみ達は主スの神かみの、神言みことをうけし我言葉わがことば、うま

怜に委曲に聞召し、嚴の御靈は言ふも更、瑞の御靈の宣言も、濱の千鳥と聞きながさず、心の奥に納めおきて、我神業を救へかし。嗚呼惟神々々、天津眞言の言靈もて心の丈を告げまつる」

かく謠ひ終り給へば、百神達は何の答へもなく齧伏して合掌するのみ。時しもあれや主の神の主の言靈は四方に響き渡り、微妙の音樂非時間えて、其莊嚴さ愉快さ譬ふるにもものなし。迦陵頻伽は満山の白梅に枝も撓に集り來りて美音を放ち、鳳凰は幾百千ともなく彼方此方の天より集り來り、榮城山の上空を悠悠翔けまはる様、實に最奥天國の有様なりける。

ここに大御母の神は、數多の神々を従へ數百頭の麒麟を率ゐて此處に現れ給ひ、山頂の廣場に整列して、顯津男の神の門出を祝し給ふ。茲に顯津男の神は大御母の神の奉りし麒麟に跨り山路を下り給へば、大御母の神を初め百神達は各も各もと麒麟の背に跨り、其他は鳳凰の翼に駕して従ひ給ふ。大太陽の光は益々強く、大太陰は慈光を放ち、清涼の氣を送りて其炎熱を調和し給ひ、水火和合の祥徵實現して、紫微天界は忽ち淨土の光景を現じける。再拜。



(昭和八・一〇・一二 舊八・二三 於水明閣 加藤明子謹録)

第一六章 八洲の河(一八四七)

茲こゝに月つきの大神おほかみの神靈しんれい瑞みづの御靈みたま太元おほもと顯津男あきつをの神かみ、榮城山さかきのやまを下くだり、大御母おほみははの神かみ其他そのたの諸神しよしんに送おくられて、神生かみつみ國生くにうみの旅たびに就つかせ給たまふ。數百頭すうひやくとうの麒麟きりんは神々かみがみを背せに負おひ乍ながら、カコケキの言靈ことたま清すがしく鳴なり鳴なり出いでつづ諸神しよしんを送おくり、鳳凰ほうわうの群むれは各々おのおの諸神しよしんを翼つばさに乗のせ、タトツテチの言靈ことたまを鳴なり出いでながら、東北とうほくの國原くにばらを指さして夜よを日ひに次ついで進すすませ給たまふ。行ゆき行ゆけば前途ぜんとに巍峨ぎがとして高たかく聳そびゆる秀嶺しうれいあり。顯津男あきつをの神かみは高たかく御手みてを差翳さしかざし秀嶺しうれいを望のぞみ給たまふに、山頂さんちやうより紫むらさきの雲氣うんき立昇たちり目めもまばゆきばかりなり。

茲こゝに顯津男あきつをの神かみは廣ひろく長ながく横よこはれる天あめの八洲河やすかはに麒麟きりん諸共もるともに立たち入いり給たまひ、白しろ銀がねの如ごとく輝かがやく水瀨みなせの中なかに立たちて御歌詠みうたよませ給たまふ。

見渡せば紫の雲立ち昇る

遙の高根の莊嚴なるかな

大御母の神は直に謠ひ給はく、

見はるかす春の高根は天界に

その名も著き高照の山

高照の山は遙けく見ゆれども

吾には近き住所なりけり

と謠ひ給ひて、永久に住み給ふ御舎の靈山なることを示し給へば、顯津男の神は威儀を正し雙の手を拍ち合せ、「夕カ」の言靈を鳴り出で禮拜稍久しう爲し給ふ。顯津男の神は足下を流るる清泉を賞め讚へながら、

いすくはし此これの流ながれは主スの神かみの

天津あまつまこと眞言まことのみたまなるらむ

霧きりくも雲あめの雨あめとかはりて足引あしびきの

山やまにくだちし惠めぐみの露つゆかも

此この水みづは瑞みづの御靈みたまのかげ寫うつし

神代かみよを照てらす眞寸鏡ますかがみかも

山川やまかはは清きよくさやけし我われは今いま

八洲やすの河原かはらに水鏡みづかがみ見みつ

此このみづ水みづの滞とどこほりなく流ながるごと

わが經綸けいりんを進すすませ給たまへ

夕ゆふされば月つきの流ながるる八洲河やすかはの

清瀨きよせに立たちても思おもふかな

八柱やはしらの宿やどに残のこりし比女神ひめがみに

此このみづかがみ水鏡みづかがみ見みせたくぞ思おもふ

滞よどみなく千代ちよに流ながる八洲河やすかはの

清きよきは瑞みづの御靈みたまなるらむ

母神ははがみの我われに賜たまひし珍うづの獸けもの

逆さかさに寫うつる此この水鏡みづかがみよ

眞ま清水しみづの鏡かがみに寫うつし眺ながむれば

我われも逆さかさに寫うつりてあるも

百神ももがみの我わがの宣の道みちを逆さかしまに

見みるも宜うへなり瑞みづの御靈みたまよ

八洲河やすかはの堤つつみに生おふる常磐木ときはぎは

我わが神業かむわざを明あかして立たてるか

常磐木ときはぎの松まつにかかれる天津日あまつひの

影かげ清すがしもよ御空みそら晴はれつつ

照渡てりわたる天津日あまつひ懸かる常磐木ときはぎの

松まつのこずゑに露光つゆひかるなり

鳳凰は翼を揃へ世を謳ひ

麒麟は足を揃へて言祝ぐ

大御母神の恵みに我は今

八洲の河原の清瀬を渡る

主の神の恵の露に生ひ立ちし

麒麟に跨り國生みなさばや

神を生み國魂を生む神業を

助くる麒麟はわが寶なり

斯く謠ひながら大御母の神の御後に従ひて八洲の河原の東の岸に安々着き給へば、諸神もわれ遅れじと一齊に岸に上らせ給ひ、

「ウーアー、ウーアー」の嚴の言靈宣り上げ給ふ。故天界の諸山諸川を初めとし、森羅万象悉く震動して言靈歌を謠ひ踊り狂ひ舞ふ。

大御母の神は麒麟上高く御聲爽かに謠ひ給ふ。

久方ひさかたの天あめの八洲やすかは河は安々やすやすと

渡わたらふ岐き美みの雄々ををしき姿すがたよ

も此この河かはを永とこ久しへに

流ながる清しみづ水まし眞しみづ清水は

千ちは早はや振ふる遠とほき宇宙うちうの初はじめより

紫微しびてん天界かいの司つかさの河かはと

稱となへ奉まつられ永とこ久しへに

惠めぐみの露つゆを流ながしつ

世よの雲霧くもきりを拂はらふべき

百ももの罪咎つみとが洗あらふべき

も此これの眞まし清水しみづは

瑞みづの御靈みたまに主スの神かみの

與あたへ給たまひし生いのち命の水みづよ

汝なれ太元おほもと顯あきつ津男つをの神かみ

此この眞まし清しみ水づを心こころとし

清きよき流ながれを教をしへとし

四よ方もの神かみ々がみ遺おちもなく

もれなく救すくへ惟かむ神ながら

嚴いづの言こと靈たま宣のり上あげて

主スの神かみ初はじめ諸もろ々もろの

神かみの御み前まへに宣のり奉まつる

天あま津つ日ひは照てる照てる月つきは冴さゆ

天あめに昇のぼりて雲くもとなり

雨あめとかはりて地ちにくだち

高たか山やま短ひ山き霑やまほして

百も谷も千たに谷ちたにの細こな流がれを

一ひとつに集あつめし神かみの河かは

流ながるる水みづは瑞みづ御み靈たま

四方よもの神々かみがみうるほして  
永久とほの生命いのちを與あたへます  
生命いのちの清水しみづ眞清水ましみづよ  
此この天界てんがいに八洲河やすかはの  
流ながれあらずば如何いかにせむ  
濱はまの眞砂まさごの數かずなせる  
星ほしの神靈みたまは輝かがやきて  
天てんに花はな咲さき地ちの上うへは  
白梅しらうめ匂におひ迦陵からびん伽が  
清すがしく歌うたひ鳳凰ほうわうは  
翼つばさひろ擴ひろげて舞まひ遊あそび  
麒麟きりんは數多あまたの神々かみがみを  
背負せおひ奉まつりて八洲やすの河かは  
雄々ををしく清きよく渡わたらしぬ



いざ是よりは高照山の  
尾の上にかけ登り  
貴の宮居を見立て奉り  
主の大神の經綸に  
仕へ奉らむ惟神  
急がせ給へ百神よ

と謠ひ終り、眞先に立ちて麒麟の足許チヨクチヨクと御山を指して急ぎ給ふ。

（昭和八・一〇・一二 舊八・二三 於水明閣 森良仁謹録）

## 第十七章 駒の嘶き（一八四八）

太元顯津男の神は、大御母の神に導かれ、數多の諸神を従へて、眞清水流るる

天あめの八洲河やすかはを向津岸むかつぎしにうち渡りわた、麒麟きりんの足あしもチヨクチヨクと、高照山たかてるやまの聖地せいちをさして、道みちの隈手くまでも恙つつがなく、「タカ」の言靈ことたまにおくられて、とある小川邊をがはべに着つき給たまふ。この川かはの邊べに脛すねもあらはに褌みそぎせる比女神ひめがみあり、容姿端麗ようしたんれいにして玉たまの如ごとし。顯あき津男つをの神かみはこの美神びしんに對たいし、

□ 由縁ゆかりある女神めがみと思おもへどたしだしに

われ御名みな知らず宣のらせ給たまはれ□

比女神ひめがみ □ われこそは神かみの依よさしの如衣比女ゆくえひめ

岐美きみ來きますよと褌みそぎして待まちし

大神おほかみの神言みことかしこ畏かしこみただ一人ひとり

けながく待まちぬ岐美きみの出いでまし□

顯津男の神はこれに答へて、

八十神の汝は一つの細女か

思ひにまかせぬ我を許せよ

主の神のゆるし給ひし仲なれど

百神たちの目を如何にせむ

比女神 千早振神のゆるせし女男の道

はばかり給ふ心恨めし

大らかに居まさへ背の岐美天界の

國を治むるいみじき神業よ

見るからに川巾狭き須佐川も

底ひは深きわがおもひかな

須佐川はよし底ひまで乾くとも

岐美に仕ふる心わすれじ

比古神はこれに答へて、

高照のみ山にのぼる道なれば

わが心根をはかりて許せよ

比女神 村肝の心はげしくどよめきぬ

いざみともせむ高照の山に

高照の山は高しもさかしもよ

わが駒に召せ麒麟をすてて

比古神ひこがみ 曰い 大御母神おほみははがみ の賜たまひし麒麟きりんなれば  
我われいたづらに捨すてがてに思おもふす」

比女神ひめがみ 曰い この駒こまは雌めすにいませば神業かむわざの

みたまと思おもひて安やすく召めしませ

白銀しろがねのしろき若駒わかこまに跨またがりて

國くにつくりませわが眞心まごころにす」

比古神ひこがみは面おもほてりながら答こたへ給たまふ。

曰い 如衣比女神ゆくえひめがみの神言みことの眞心まごころに

報むくいむ術すべのなきが悲かなしき

高照たかてるのみ山やまにわれは進すすみゆく

汝は後より靜に來ませよ』

比女神は面をくもらせながら、

情なき岐美の心よおほらかに

雄々しくいませ世に憚らで

凡神の眼を恐れ給はずて

神の依さしの神業召しませ』

ここに大御母の神は、兩神が應答歌を聞きて痛ましく思ひ給ひしが、忽ち麒麟背を下り、如衣比女の神の御手を取り、熱き涙をたたへながら、

妹と背の道は知らぬにあらねども  
暫しを待たせ良き日來るまで

汝が神の清き心はわれも知る  
須佐の流の深きおもひを

比女神は打ちうなづきながら、

情ある神の言葉にまつるひて

良き日足る日をしのびて待たむ

如衣比女の神は須佐の川瀬に合掌し、  
歌を宣り給へば、川の流れは眞つ二つに分れて、  
中より銀の駒三頭躍り出で、  
高嘶きながら比女神の側近く寄り来る。  
比女神は駒の頭を撫で擦りながら、

この駒は顯津男の神召しませよ

高照山はさかしくあれば

この駒は大御母神召しませよ  
勝れて高きしるがねの駒  
いや果にのぼり來りし白駒に  
跨りわれは御供に仕へむ

顯津男の神は、

比女神の生言靈ゆ生れたる  
駒をし見れば心動くも  
比女神の言靈清し白銀の  
駒は三つまで生り出でしはや

と謡ひ給ひて麒麟をひらりと下り、  
と言ふ。天龍は鬣を振り尾をふり、

駒の背に乗りかへ給ふ。この駒の御名を天龍  
比古神の僕となりしを喜びて、高く清く幾度



となく嘶いななけり。如衣比女ゆくえひめの神かみは駒こまの轡くつわを右手めてに握にぎらせながら、

□ 白しろ妙たへの黄金こがねの駒こまに跨またがりし

岐美きみの姿すがたは雄々ををしかりけり

この駒こまの清きよく白しろきは岐美きみおもふ

わが眞心まごころの色いろとこそ思おもへ」

比古神ひこがみは欣然きんぜんとして謠うたひ給たまふ。

□ 一ひと度たびのみとのまぐはひ無なけれども

こころ樂たのしき白駒しろこまの背せな

汝なれもまた駒こまに召めしませ高照たかてるの

山やまはさかしとわれ聞きくからは」

如衣比女の神は、

「ありがたし岐美の言葉は命かも

駒の御供を仕へまつらむ」

ここに大御母の神は銀龍の駿馬にまたがり、顯津男の神は天龍に、如衣比女の神は須佐にまたがり、轡をならべて夏々と、高照山の聖場に進み給ふぞかしこれ。麒麟にまたがる萬神も鳳凰の背に乗れる神々も「ウオーウオー」と叫びつつ歡呼の聲は天に満ち、高照山の聖場も動くばかりに見えにけり。

(昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 白石恵子謹録)

第一八章 佐田の辻(一八四九)

高たか照山てるやまは雲表うんべうに

高たかく聳そびえて天てんをぬき

尾上をのへやますそくま山裾隈もなく

常磐ときはぎしげ木茂ももばなり百もも花はなは

艶えんを競きそひて閒まをつづり

さながら錦にしきの如ごとくなり

のどかに吹ふき來くる春風はるかぜは

花辨くわべんを四よ方に散ちらしつつ

芳香ほうかうますます薰くんじ充みち

迦陵かりようびんが頻伽てんごくは天國てんごくの

春はるを清すがしく歌うたふなり

地ちは一面いちめんの花蓆はなむしろ

五色ごしきの蝶てふは翩翻へんぱんと

春野はるのの花はなにたはむれつ

爽快さつくわい限り無なかりけり

顯津あきつ男をの神かみの一行いつかうは

白馬はくばに跨またがり麒麟きりんの背せなに

乘のりて悠々いういう進すすみゆく

鳳凰ほうわう天てんに舞まひ狂くるひ

百ももの神達かみたち口々くちぐちに

天津あまつ祝詞のりとを奏上そつじやうし

嚴いづの言靈ことたま宣のりあげて

天あめと地つちとは向むかひ合あひ

高照山たかてるやまの靈場れいちやうに

流ながるる如ごとく進すすみゆく

太元おほもとあきつ顯津男をの神かみの

旅立たびだちこそは清すがしけれ

彌々いよいよ是これより國くにを生うみ

國魂神を生まさむと 勇猛心を發揮して

東の宮や榮城山 後に眺めて進みゆく

神の心ぞ雄々しけれ 澄み渡りたる大空に

渡らふ月の光清く 涼しき風は非時に

面を撫づる夜の野邊 障らむものこそ無かりけれ

ああ惟神々々 顯津男の神の草枕

旅の出立ち清しけれ。

大御母の神の急報によりて、經綸の神々は高照山麓の聖地高日の宮に伊寄り集

ひ、顯津男の神の降臨を今や遅しと待ち給ひける。高日の宮に集れる神達の中よ

り選まれて道の邊に待ち迎へたる神あり、この神の御名を眼知男の神と言ふ。又

の名を目の神と言ふ。目の神は花爛漫と咲き匂ふ原野の中の十字路に味豊の神、

照男の神を従へて、今や一行の來着を待ち受け給ひぬ。大御母の神言の案内につ

れて進み來る顯津男の神の英姿を眺めて、目の神は喜び勇み謠ひ給はく、

けながくも吾待侘びし甲斐ありて  
あこがれの岐美は今や來ませる  
大御母神の神言に從ひて  
この十字路に岐美待ちむかふ

顯津男の神は馬上より、

汝こそは眼知男の神なれや

わが名をよくも覺りいませる

東の宮を立ち出で國つくる

神業畏みわれ來つるかも

唯一人旅に立つ身と思ひしを

我をむかふる公ぞ尊き

主の神の神業畏し我は今

國くにつくらむとここにい出で來し

大御母神おほみははかみの神言みことの導みちびきに

八洲やすの河原かはらもやすく渡わたりぬ

八洲河やすかはの清きよきが如ごとく國原くにばらに

塵埃ちりほこりさへなかれと思おもふ

眼知男まなこしりの神かみは馬前ばぜんに端然たんぜんとして威儀ゐぎを正ただし、

主すの神かみの造つくらせ給たまひし紫微しびの國くにも

岐美きみなかりせば治をさめむよしなし

百神ももがみの醜しこのさやりは繁しげくとも

汝なが言靈ことたまに靡なびき伏ふすべし

高照たかてるの山やまは畏かしこし岐美きみ坐まさば

神かみの御稜威いづは四方よもを光てらさむ

顯津男の神は馬上より、靜に御歌よませ給ふ。

久方の天に日月輝きて

光したまはむ高照の山

紫の雲の包みし高照の

山を明かして神代を治めむ

如衣比女の神は馬上より、

遙々と岐美を迎へし目の神の

貴の功に感謝し奉らむ

われはもよ女にしあれども高照の

山の雲霧拂はむとぞ思ふ

顯津男の神の力となりまして

此國原を開け目の神  
吾も亦顯津男の神と諸共に  
貴の神業仕へむと思ふ

目の神はこれに答へて、

雄々しくも宣らせ給ひし言の葉よ

如衣の神は貴の益良女

いざさらば御供に仕へ奉るべし

駒はなけれど膝栗毛にて

斯く謠ひて眞榊を打振り打振り山野の邪氣を拂ひながら、高照山の高原を矢  
の進むが如く分け入り給ふ。萬の神の歡呼の聲は以前に勝りて益々高くさやけく、  
神は善惡上下の區別なく道の兩側に跪きて一行を迎へ奉る。



(昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 加藤明子謹録)

第十九章 高日の宮(一八五〇)

太元顯津男の神は、大御母の神、眼知男の神の先頭にて萬神に送られながら、高照山の山麓高日の宮の清所につき給へば、常磐木の松は晝もほの暗きまで繁り榮え、庭の面は白砂を敷きまはされ、木蔭の庭の上には七色の草花爛漫として咲き亂れ、その莊嚴さ麗しさ譬ふるに物なかりける。

ここに明晴男の神、近見男の神達は、白き薄衣を纏ひながらうやうやしく出で迎へ、先づ大御母の神の乗らせる駒の轡をとらせ給ひて、

大御母の神の神言の計らひに

四方の雲霧明け晴れの神

曇りたる世も今日よりは明晴の

神の心は樂しかりける

大御母の神は馬上より降らむとして、

主の神の貴の恵にひたされて

太元顯津男の神を迎へし

今日よりは高照山の雲霧も

くまなく晴れむたのもしの世や

と謠はせつつひらりと駒を降り、顯津男の神の乗らせる駒の轡をとりながら、

はるばると來ませる神よ此處はしも

わが住家ぞや早や降りませ

顯津男の神の此の地にます上は  
これの神國は安く榮えむ

顯津男の神は馬上より、大御母の神に御歌にて答へ謠ひ給ふ。

□  
いく山脈越えてわれをば迎へましし

岐美の眞心かたじけなみおもふ

岐美が住むうづの清所に導かれ

嬉しさあまりて言の葉もなし

如衣比女の神は馬上を降らむとして謠ひ給ふ。

□  
山清く水また清く吹く風も

涼しき清所に甦るかな

背せの岐美きみの御供仕みともつかへてわれは今いま

貴うづの清所すがどに甦よみがへりつつ

大御母神おほみははかみの御言みことの計はからひに

われあこがれの岐美きみに逢あひぬる』

眼まなこ知男しりをの神かみは喜よろこびにたへず、御手みてを上下じやうげ左右さいうに振ふりながら踊をどり狂くるひつつ謠うたひ給たまふ。

年としといふ年としはあれども月つきといふ

月つきはあれども良よき日ひてふ

八や十日そかびあれど今日けふの日ひは

如何いかなる神かみの御惠みめぐみか

太元神おほもとがみの現あれまして

われ等らに百ももの福ふくいん音を

教へ導き給ひつつ  
これの神國も平らかに  
いと安らかに永久に  
建てさせ給ふぞ尊けれ  
われは神力無き神の  
如何に心をあせれども  
みたまの曇り深くして  
世を照すべき術もなし  
目の神と人はいへどもこの眼  
足下さへも見えわかぬ  
半日先の事さへも  
明らめかぬる魂の  
深きくもりを如何にせむ  
今日より總てを新しく

眼まなこひらきて大道おほみちに

仕つかへまつらむ目の神かみの

みたまをあはれみ給たまへかし

今日けふの良よき日ひの佳よき辰ときは

天地てんちの神かみの御計みはからひ

いよいよ高照たかてる山の尾をの

雲霧くもぎりはれて日月じつげつの

光ひかりを近ちかく仰あふぐべし

ああ惟かむながら神々かむながら

恩頼みたまのふゆぞかしこけれに

顯津男あきつをの神かみは出迎でむかへの諸神しよしんに導みちびかれ八尋殿やひろどのの奥深おくふかく入いり給たまふ。

顯津男あきつをの神かみは八

尋殿るどのの莊嚴さうごんさを見みて謠うたひ給たまふ。

うるはしき廣き御殿に導かれ

わが胸とみに明けはなれけり

今しばしこれの御殿にとどまりて

國ひらかばや力の限りを

大御母の神はこの御歌を聞きて謠ひ給ふ。

顯津男の神よつぶさに聞し召せ

これの清所は岐美のみあらか

主の神の貴の依さしに汝が爲めに

われは御殿を造りて待てるも

この宮は瑞の御靈の月の神

永久にまつれる清所なるぞや

月神の御靈と生れし岐美なれば

安くましませ心おきなく

汝こそは如衣の比女とみあひまして

國造りませうま怜に委曲に

顯津男の神 百神に神生みの業とざされて

國造りせむと此處に來にけり

今日よりは誰憚らず如衣比女と

力をあはせて神業に仕へむ

如衣比女の神は末座に端坐しながら莞爾として謠ひ給ふ。

幾年を岐美待ちわびし甲斐ありて

樂しき今日となりにけらしな



今日よりはわが魂を立て直し

謹み畏み神業に仕へむ

ここに比古比女の二柱神は大御母の神のとりもちによりて、高日の八尋殿に目  
出度婚ぎの式をとり行ひ給ひ、八十年の間これの宮居に鎮まり給ひぬ。

(昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 林彌生謹録)

## 第二〇章 廻り逢ひ(一八五一)

太元顯津男の神は、高日の宮の八尋殿に、天之御柱、國之御柱をみたて給ひて、  
右り左りの神業を行はせ給ひ、如衣比女の神を呼ばひて、婚ぎの神業をなし給ふ。  
大御母の神は祝して、

☐ 天なるやあめ

主の大神の依さしますス おほかみ

御靈も清き神司みたま きよ かむつかさ

東の宮に在しましてひがし みや

神國を治め世を教へみくに をさ よ をし

日に夜に貴の神言をひ よ かつ かむこと

宣らせ給へど百神のの たま ももかみ

心一つに片よりてこころひと かた

神旨にかなふものもなくみむね

朝な夕なに神業のあさ ゆふ かむわざ

後れむ事をなげかししおく こと

顯津男の神今ここにあきつを かみいま

國の司と現れましてくに つかさ あ

神の依さしの如衣比女とかみ よ ゆくえひめ

婚とつぎの業わざを遂とげ給たまふ  
今け日ふの良よき日ひの佳よき辰ときに  
主スの大神おほかみを初はじめとし  
天あま翔かり在ます百ももの神かみ  
國くに翔かります八十やその神かみ  
歡よろぎ集つどひて大神おほみのり宣のり  
壽ことほぎ給たまふ目め出で度たさよ  
駒こまは嘶いなき麒麟きりんは謠うたひ  
鳳ほう凰わう天てんより舞まひ降くだり  
迦かり陵りやう頻びん伽がは聲こゑ清きよく  
常とこよ世よの春はるを歌うたふなり  
高たか照てる山やまに紫むらさきの  
雲くも棚たな引びきて四よ方もの國くに  
諸ももの草くさ木きはゆたかなる

粧よそほひなして花はな開ひらき

貴うづのつぶら實み満みち満みちて

齋ゆ場にはに生おふる稻いな種たねは

日ひ々びに茂しげりて遠とこ久しへの

足たる穂ほ八や十そ穂ほと榮さかえつつ

天あま津つ神み國くにの神かみの代よを

壽ことほぎ奉まつる今け日ふこそは

この天てん界かいの初はじめより

今いまに例ためしもあたふら尊と

今け日ふの婚とつぎの神かむ業わざは

紫し微び天てん界かいの礎いしぞ

太おほ元もと顯あき津つ男をの神かみの

貴うづの神かむ業わざいひろや廣ひろに

いたかや高たか々だかに天あま津つ日ひの

輝かがやく如ごとく照てれよかし

西にしより昇のぼる瑞御靈みづみたま

月つきの御神みかみの面おもの如ごと

清すがしく涼すずしく生あれまして

これの國原隈くにはらくまもなく

しめりをあたへ百木草ももきぐさ

恵めぐみの露つゆに生いかせ給たまへ

ああ惟かむながら神々々かむながら

神壽かむほぎ仕つかへ奉たてまつる

天津あまつ日は照てる月つきは満みつ

靈地れいちの上うへは五穀たなつもの

所ところ狭せきまで實みのりつつ

四よ方の神々かみがみ世よを歌うたひ

歡よろこび樂たのしむ神代かみよこそ

岐美の出でましあればこそ

千代に八千代に榮えつつ

香りも清き白梅の

花の香四方に薰じつつ

榮ゆる神代こそ畏けれ

榮ゆる神代こそ畏けれ

顯津男の神は大御母の神の壽言に對し、感謝の御歌を謠ひ給ふ。

わが心知らせる岐美に導かれ

永久の住家に今日を來つるも

主の神の任けのまにまに八尋殿に

婚ぎの道を開ける嬉しさ

大御母神の神言のなかりせば

今日けふの喜よろこびあざらましを  
大御母神おほみははかみの神言みことを今日けふよりは  
まことの母ははと仕つかへ奉まつらむ  
久方ひさかたの天津神國あまつかみくにことごとく  
生言靈いくことたまにわれは照てらさむ  
言靈ことたまの天照あまてる國くにの眞秀良場まほらばに  
太ふとしく立たちしこれの宮みやかも  
高照山貴たかてるやまうづつの清所すがとに來きたりてゆ  
心こころの空そらも晴はれ渡わたりける  
高照たかてるの山やま高たかけれど大御母おほみはは  
神かみの心こころに及およばざるらむ  
』

如衣比女ゆくえひめの神かみは謠うたひ給たまふ。

☐ 天あ晴はれ天あ晴はれ國くに晴はれ心こころ晴はれにけり

高照山たかてるやまの春はるにあひつつ

大御母神おほみははかみの神言みことの計はからひに

春はるの心こころは燃もえ立ちにけり

燃もえ立ちし春はるの心こころをつぎつぎに

生いかして國魂くにたま生まむとぞ思おもふ

顯津男あきつをの神かみの神言みことに御子みこなくば

いかに神業みわざの成なりとぐべきやは

主スの神かみの御樋代みひしろとなりし吾われなれば

いかなる業わざもいとはざるべし

愛戀いとこやの吾背わがせの岐美きみと手てを引ひきて

この神國かみにを固かためたく思おもふ

大御母神おほみははかみと在まします大神おほかみに

子ことし仕つかへむ今日けふの生いく日ひゆ



大御母おほみははの神かみは莞爾くわんじとして御歌詠みうたよまし給たまはく、

二柱ふたはしら八尋やひろの御殿みとのにましまして

國魂くにたま生うますと思おもへば尊たふとし

今日けふよりは宮みやの司つかさと吾われなりて

岐美きみの神業みわざをたすけ奉まつらむ

眼知まなこしり男をとこの神かみは祝歌しゆくかを謠うたひ給たまふ。

天あめをぬく高照山たかてるやまを紫むらさきの

雲くもはいよいよ深ふかくなりつつ

高照山たかてるやまも勇いさむか殊更ことさらに

今日けふは光ひかりもしるく見みゆめり

高照山たかてるやまの常磐木とぎはぎみどりして

今日の良き日を壽ぎ顔なり

朝夕あさゆふにこれの清所すがどに仕へ奉るまつ

眼知男まなこしりをの神かみはうれしも

今日けふよりは此これの宮居みやゐに在ましまして

神國みくにの柱はしらみたて給はれ

二柱ふたはしらここに現あらはれます上うへは

この神國かみくににおそるるものなし

明晴あけはるの神かみは、婚とつぎの席せきに列つらなり給たまひて、御歌みうたよまし給たまはく、

東ひむがしの空そらより西にしに照てり渡わたる

天津あまつ陽光ひかげは清きよらけく

西にしより東ひがしに澄すみ渡わたる

月つきの光ひかりは清すがすが々し

月の御靈つきのみたまと生あれませる

太元おほもと顯津男とあきつをの神かみは

神かみの依よさしの神業かむわざを

仕つかへ奉まつると今いまここに

八尋やひろの御殿みとのに現あれまして

如衣ゆくえの比女ひめと婚とつぎまし

天あめの御柱みはしらめぐり合あひ

國くにの御柱みはしら立たて給たまひ

國くに生かうみ神生かみうみものを生うみ

この神國かみにを照てらさむと

現あらはれますぞ尊たふとけれ

われは明晴神司あけはるかむつかさ

四方よもにふさがる雲霧くもぎりも

生言靈いくことたまに明あきらけく

はらし奉りて大前に

朝な夕なを仕へつつ

今日の良き日の佳き辰に

逢ふも嬉しや惟神

いや永久に玉の緒の

千代も八千代も變りなく

輝きたまへ二柱

御前に畏み壽ぎ奉る

如衣比女の神は、返し歌詠まし給ふ。その御歌、

☐ 明晴の

神の神言よ汝こそは

雄々しき神よ男の神よ

吾<sup>われ</sup>はかよわき比<sup>ひ</sup>女神<sup>めがみ</sup>の  
身<sup>み</sup>にしあれ共<sup>とも</sup>國<sup>くに</sup>思<sup>おも</sup>ひ  
神<sup>かみ</sup>いつくしむ眞<sup>ま</sup>心<sup>ごころ</sup>は  
神<sup>かみ</sup>に誓<sup>ちか</sup>ひて忘<sup>わす</sup>れまじ  
これの宮<sup>みや</sup>居<sup>ゐ</sup>にある限<sup>かぎ</sup>り  
朝<sup>あした</sup>夕<sup>ゆふ</sup>を恙<sup>つつが</sup>なく  
神<sup>み</sup>業<sup>わざ</sup>に仕<sup>つか</sup>へ奉<sup>まつ</sup>るべく  
守<sup>まも</sup>らせ給<sup>たま</sup>へ明<sup>あけ</sup>晴<sup>はる</sup>の  
神<sup>かみ</sup>の神<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>の眞<sup>ま</sup>心<sup>ごころ</sup>に  
ゆだね奉<sup>まつ</sup>らむ惟<sup>かむ</sup>神<sup>ながら</sup>  
神<sup>かみ</sup>かけ誓<sup>ちか</sup>ひ奉<sup>まつ</sup>るなり。

立<sup>たち</sup>迷<sup>まよ</sup>ふ雲<sup>くも</sup>の帳<sup>とばり</sup>は深<sup>ふか</sup>く共<sup>とも</sup>

伊吹き被はむ女の言靈に

天も地も一度に開く今日こそは

主の大神の光なりける

皇神の神言畏し國津神の

心は愛しと國を照らさむ

ここに近見男の神は、壽ぎ歌うたひ給はく、

神國に永久の花咲く時近み

吾嬉しさにたへず歌ふも

高地秀の宮を守らす神司

これの清所に高照山はも

高照の山も今日より輝きを

まして國原さやけくなるらむ

ふたはしらかみ  
二柱神の神言の生れましを

くにつかみたち  
國津神達いさみてあらむを

われ  
吾も亦嬉しさあまり言靈の

たす  
助けによりて神代壽ぎぬ

(昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 谷前清子謹録)

## 第二章 楔の段(一八五二)

たかてるやま  
高照山の  
おほがいをがい  
大峽小峽より  
したた  
滴り  
お  
落つる  
まし  
眞清水は、  
ここ  
茲に  
あつま  
集りて  
たうたう  
滔々と  
お  
落つる  
たき  
瀧となり、  
ふち  
淵となりつつ、  
たかひ  
高日の  
みや  
宮の  
すがには  
清庭を  
みぎひだり  
右左に  
めぐ  
廻りて  
なが  
流れ  
居る。  
あきつを  
顯津男の  
かみ  
神、  
ゆくえひめ  
如衣比女  
の  
かみ  
神は、  
たかてるやま  
高照山の  
たきつせ  
瀧津瀬に  
みそぎ  
楔せむとて  
やかた  
館を  
た  
立ち  
いで、  
しづたき  
下瀧の  
かたへに  
た  
立ち  
寄り  
給  
たま  
へば、  
みなおとがうがう  
水音轟々として  
せんぢやう  
千丈の  
たか  
高きより  
お  
落ち  
くだち、  
あたり  
四邊は  
たき  
瀧の  
しぶき  
さざり  
狭霧となり

て眞ま白しろく、容易よういに近ちかづくべからざるの莊さう嚴げんさなり。如ゆ衣くえ比ひ女めの神かみは下しう瀧たきの落おつる  
水みな音おとにやや驚おどろき給たまひ、茫ぼう然ぜんとして空そらを仰あふぎ謠うたひ給たまはく、

久ひさ方かたの天あま津つ空そらよりくだつかと

思おもふばかりのこの瀧たき津つ瀬せは

滔たう々たうと落おつる水みづ秀ほの瀧たき壺つぼに

ちらばひくだけ霧きりとなりぬる

立たちのぼる瀧たきの狹さぎり霧きりに天あま津つ日ひは

いろいろいろに映はゆる清すがしさ

天あま津つ日ひのくだり給たまひし心こ地ちして

瑞みづの御み靈たまと共に見みるかな

この瀧たきの雄を々をしく落おつる状さまを見みて

瑞みづの御み靈たまの功いさ績ををおもふ

下しう瀧たきは高たかく清すがしも常と磐は木ぎの



狭はざま間ますかして落おつる水みな音おと

この瀧たきの貴うづの言こと靈たまよく聞きけば

タタターと鳴なる音おとの尊たふとき

ターターと落おちたきちつつ滔たう々と

瀧たき壺つぼ深ふかくなり響ひびくなり

鳴なり鳴なりて鳴なりも止やまざる瀧たき津つ瀬せは

生いく言こと靈たまのあらはれなるらむ

高たかきより低ひくきに落おつる瀧たきの如ごと

國くに津つ神かみたち清きよめまつらむ

言こと靈たまの幸さちはふこれの神かみ國くにに

生うまれて「タカ」の言こと靈たま聞きくも

この瀧たきは高たか天あま原はらと響ひびくなり

吾われみそぎせむ瑞みづの言こと靈たま

此この瀧たきは天あま津つ神かみ國くにに懸かりあれば

水の響きは四方にわたらむ

顯津男の神は御歌詠ませ給ふ。

滔々とみなぎり落つる下瀧の

勢みれば我はづかしき

一滴も滞りなく落ちくだつ

瀧はさながら神の心よ

下瀧の落つるが如くさらさらに

心のくもり袂ひたくおもふ

千丈の高きゆ落つる瀧水の

言靈高し地をゆすりつつ

言靈の助け幸はふ神國の

嚴の力を目のあたり見し

この淵ふちの深ふかきが如ごとくこの瀧たきの

高たかきにならふ心こころ持もたばや

落おち降くだち鳴なり鳴なり止やまぬ下しづ瀧たきの

水みな瀬せの音おとに神かみの聲こゑあり

澄すみきらふ貴うづの眞ま清しみづ水みづ朝あさ夕ゆふに

鳴なり鳴なり止やまぬ言こと靈たま清すがしも

常とき磐はぎ木まの松まつは春はる風かせにそよぎつつ

瀧たきの響ひびきをささせ居ゐるらし

非とき時じくに鳴なる音おと高たかき下しづ瀧たきの

かたへに立たてば魂たま冷ひえわたる

わが魂たまの冷ひえわたるまで佇たたずみて

瑞みづの言こと靈たま樂たのしみ聞きかむ

かか  
る處ところへ大御母おほみははの神かみ、  
明晴あけはるの神かみ、  
近見男ちかみをの神かみの三柱みはしら、  
兩神りやうしんの御後みあとを追おひて茲こゝ

に静々入り来りまし、天に懸れる下瀧の莊嚴さに打たれつつ、大御母の神は先づ  
謠ひ給ふ。

下瀧の高きは瑞の御霊かも

終日流れて國をうるほす

瑞御靈月の大神の神靈ぞと

朝夕われは稱へまつるも

鳴り鳴りて朝夕を轟ける

瀧の言靈吾を教ゆる

山高く谿また深く廣くして

この下瀧はなり出でにけむ

見上ぐればみ空の雲の狭間より

落つるが如し高瀧の水は

下瀧の水瀬はゆくゑ白浪の

龍たつの宮居みやゐの海うみに入いるらむらむ」

如衣ゆくえひ比女ひめの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

☐  
天あまわたる月大神つきおほかみの御惠みめぐみの

露つゆの雫しじくかこの高瀧たかたきは

天あまわたる月つきにみたまを寄よせ給たまふ

わが背せの岐美きみの稜威尊みいつたふとき

瀧津たきつせの清きよきを見みつつ思おもふかな

とどこほりなき岐美きみの心こころを

鳴なり鳴なりて幾千代いくちよまでも響ひびくらむ

月大神つきおほかみのいます限りかぎは

立たち昇のぼる霧きりを照てらして天津日あまつひの

かけ紫むらさきに耀かがひますも

この霧は昇り昇りて雲となり

高照山を紫に染むるか

紫の雲よりくだつ瀧なれば

吾はこれより身を滌ぐべし

と謠ひ終り、悠然として瀧壺近く寄り給ひ、滔々と落つる水の秀に身を打たせ、  
生言靈を宣り上げ給ふぞ雄々しけれ。顯津男の神もまた、瀧の下に進み給ひて、  
強き水の秀を浴みて袂の業につかせ給ふ。

明晴の神はこの様を拜し奉りて謠ふ。

勇ましき瑞の御靈の心かな

瀧に打たせる二柱の神

滔々と雲より落つる下瀧の

鳴音聞きても震はるるものを

神國かみくにを清きよめ給たまふと二柱ふたはしら

瀧たきにかからずさまの尊たふとき

この瀧たきの清きよきが如ごとくこの淵ふちの

ふかき心こころを神かみは知しるらむ

この瀧たきは顯あきつ津男をの神かみこの淵ふちは

如衣ゆくえの比女ひめがみ神と永久とに清すがしも  
『

近見男ちかみをの神かみはまたも謠うたひ給たまふ。

㊦ 天國てんごくの世よは近ちかみつつ高照たかてるの

山やまの下しつ瀧たき鳴なり響ひびくなり

近ちかく見みれば雲くもより降くだち遠とほく見みれば

松まつの木この間まゆおつる下瀧しつたき

白銀しろがねの柱はしらを立たてし如ごとくなり

遠く離りて見る下瀧は

常磐木の松に交らひ咲き匂ふ

百花千花を分け落つる瀧よ

白梅の花の香清く匂ふなり

この瀧水を掬ひて見れば

白梅の清き教を世に流す

薰りも高きこれの下瀧

斯く謠ふ折しも顯津男の神は、  
瀧壺を静々と出で給ひ、

思ひきやこの瀧壺は八千尋の

底をさぐれど果しなかりき

瀧高く瀧壺深きは主の神の

ふかき心とさとらひにけり



からたまも御魂も頓に清まりぬ  
めぐみの露の瀧津瀬あみて  
この瀧の清き心を我もちて  
この神國をうるほすべけむか

大御母の神は、また謠ひ給ふ。

瀧壺の底を極めし岐美こそは

げにや眞の瑞御靈なる

比女神の姿は何れにましますか

心もとなし早現れませよ

斯く謠ひ給へば、如衣比女の神の白き御姿は、  
波の上にばかりと浮き上り給ひ、  
しづしづとのぼり來りて、

背せの岐美きみのみあと慕したひて八千尋やちひろの

われは底そこひをくぐりみしはや

八千尋やちひろの底そこをくぐりて主すの神かみの

清きよき心こころをかたじけなみけり

朝夕あさゆふにみたまからたまを清きよむべき

この瀧津瀬たきつせは吾師わがしなりけり

茲ここに五柱いつはしらの神かみは常磐とぎはの木蔭こかげに整列せいれつして、一齊いつせいに生言靈いくことたまの神祝言かむほぎことを唱となへ、しづし  
づとして、高日たかひの宮みやの八尋殿やひろどのに歸かへらせ給たまひける。

(昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 内崎照代謹録)

第二二章 御子生みこみの段だん (一八五三)

ここに顯津男の神は、如衣比女の神と共に高照山の下津瀧に朝な夕なの袂の業を勤しみ給ひつつ、幾日を重ねて御子生み給ひき。生れませる御子の御名美玉姫の命と名附け奉る。紫微天界の百の神達は御子生れますと聞き給ひてより、高山の伊保理、短山の伊保理を掻き分け、河の瀬を開きて吾遅れじと、高日の宮に神集ひまし、國魂神のいとも安らかに平かに生れませしを喜びて、八尋殿の廣庭に踊の輪を造り給ひ、大物主の神は導師となりて高き歌殿に昇らせ給ひ、聲朗かに謠ひ給へば、百神達は手拍子足拍子を揃へつつ、歡ぎ喜び狂ひ給ひぬ。

大物主の神の御歌、

久方の高天原はいや清く  
限りも知らぬ雲の海  
空照り渡る天津日の  
神の光は隈もなく  
地上を照し給ひつつ

常磐ときはに開くひら神の國かみ

此神國このかみくにを知らさむと

主スの大神おほかみの神言みこと以て

雄々をしく優やさしく生あれませし

太元おほもとあきつを顯津男あきつをの神かみは

月つきの世界せかいに御靈みたまを止とどめ

ここからたまに肉身あらはを現あらして

西にしより東ひがしに廻めぐりまし

普あまねく瑞氣ずるきを天界てんかいに

地上ちじやうに満みたせ給たまひつつ

汐しほの満干みちひの功績いさをしに

海うみと陸くがとは隔へだてられ

彌いよよ美うつしき神かみの國くに

全またく生なり出いで給たまひけり

主スの大おほ神かみの神み言こと以もて  
如ゆ衣くえの比ひ女めと見み逢あひまし  
睦むつび親したしみ給たまひつつ  
初はめて貴うづの姫ひめ御み子こを  
生うせ給たまふぞ畏かしこけれ  
今け日ふより初はじめて天てん界かいは  
彌いや明あきけく樂たのもしく  
天あま津つ大おほ神かみ初はじめとし  
國くに津つ神かみ達たち八や百ひゃく萬まん  
各おのも各おのもに主スの神かみの  
依よさしの業わざを勤いそしみつ  
千ち代よの礎いし永えい久きうに  
築きづき給たまはむ世よとなりぬ  
紫し微び天てん界かいの眞ま秀ほ良ら場ばに

聳<sup>そ</sup>り立<sup>た</sup>ちたる高照<sup>たか</sup>の

山<sup>やま</sup>の尾<sup>をのへ</sup>上に紫<sup>むらさき</sup>の

雲<sup>くも</sup>立<sup>たち</sup>昇<sup>のぼ</sup>り瑞<sup>ずる</sup>氣<sup>き</sup>湧<sup>わ</sup>き

上<sup>かみ</sup>中<sup>なか</sup>下<sup>しも</sup>の瀧<sup>たき</sup>津<sup>つ</sup>瀬<sup>せ</sup>は

夜<sup>よる</sup>と晝<sup>ひる</sup>との差<sup>け</sup>別<sup>ぢめ</sup>なく

タ―ターターと響<sup>ひび</sup>くなり

タカ<sup>ことたまさきは</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>さきは</sup>ひて

こ<sup>め</sup>こ<sup>で</sup>に芽<sup>たく</sup>出<sup>あ</sup>度<sup>あ</sup>生<sup>あ</sup>れませる

美<sup>み</sup>玉<sup>たま</sup>の姫<sup>ひめ</sup>の生<sup>お</sup>ひ先<sup>さき</sup>を

彌<sup>いや</sup>幸<sup>さち</sup>なれと祈<sup>いの</sup>りつつ

月<sup>つき</sup>の象<sup>かたち</sup>の踊<sup>をど</sup>りの輪<sup>わ</sup>

月<sup>げ</sup>下<sup>つか</sup>に描<sup>えが</sup>き祝<sup>ほ</sup>ぎ奉<sup>まつ</sup>る

太<sup>おほ</sup>元<sup>もと</sup>顯<sup>あき</sup>津<sup>つ</sup>男<sup>を</sup>の神<sup>かみ</sup>よ

如<sup>ゆ</sup>衣<sup>くえ</sup>の比<sup>ひ</sup>女<sup>め</sup>神<sup>がみ</sup>今<sup>いま</sup>よりは

ひとしほこころ  
一入心を勵まされ

ス  
主の大神の神業に

つか  
仕へ奉らせ給へよと

これ  
此の齋場に八百の神

つど  
集ひて祈り奉る

あ  
あ惟神々々

あま  
天津日は照る月は満つ

ちじやうももばなちばなさ  
地上百花千花咲く

たかてるやま  
高照山の常磐木は

みどり  
緑も深く榮えつつ

たきつせ  
瀧津瀬の音彌清く

お  
落ちて流れて世をしめし

なが  
流れて終に瀧の海

ふか  
深き廣きにそそげかし

と生言靈の音頭に連れて、賑々しく歡ぎ喜び歌ひ踊り給ふ。

茲に大御母の神は御子生れますを喜び祝ひて、八尋殿の高座の上に現れ、萬神の前に言靈歌を宣らせ給ひぬ。其の御歌、

【あ】め晴れあめ晴れ國晴れ心晴れにけり

【い】づの御靈や瑞御靈

【う】しはぎ給ふ此國は

【え】らぎ樂しむ神國と

【お】さまるべきを百神の

【か】ら囀りに曇り果て

【き】よき神靈の顯津男の神を

【く】らき心にはからひつ

【け】しき神業爲す神と

【こ】ころの底も知らずして



【さ】 やぎ廻まはるぞうたてけれ  
 【し】 びの天界てんかい造れよと  
 【す】 の大神おほかみの神宣みことのり  
 【せ】 に負おひ奉まつり顯津男あきつをの神かみは  
 【そ】 でに御顔みかほを覆おほひつつ  
 【夕】 力の言靈ことたまもた黙もし難がたく  
 【ち】 ぢの思おもひは深ふかくして  
 【つ】 つしみ敬うやまひ誓約うけひまし  
 【て】 ん界限かいくまなく國くにを生うみ  
 【と】 ことはの神かみ生あれませと  
 【な】 やみ給たまひつ年としを經へて  
 【に】 ぎ衣たへの綾あやの高天たかまの高照山たかてるやまに  
 【ぬ】 碧玉ばたまの世よを照てらしつつ  
 【ね】 色いろすが清すがしき瀧津瀬たきつせに

【の】ぞみて朝夕あさゆふみそぎ楔せきつつ  
【は】るの花はな咲くさ時ときまちて  
【ひ】ろき教をしへの道みち芝しばを  
【ふ】み分け給たまふ折をりもあれ  
【へ】い安無事あんぶじに比ひめがみ女神のみの  
【ほ】とを破やぶりて生うまれまし  
【ま】すます清すがしき言靈ことたまに  
【み】玉たまの神かみの生おひ立たちを  
【む】上じやうに喜よろこび給たまひつつ  
【め】の神達かみたちに守まもられて  
【も】もの實子みこの實み召めさせつつ  
【や】尋ひろの殿とのにかしづきて  
【い】のちの綱つなの永ながかれと  
【ゆ】には（齋場）ゆたかに宣のり奉まつる

【え】にしの絲いとのもつれなく

【よ】の司つかさ神がみ生あれまして

【わ】かき神かみ國くに彌いや廣ひろに

【み】づと瑞みづとの神かみ御み靈たま

【う】しはぎ給たまふ天てん界かいに

【え】らぎ仕つかふる世よの元もとの

【を】さめ（鎮）と現あれしぞ芽め出で度たけれ

ああかむながら惟かむながら神かむながら々々

御み靈たま幸さちひ坐ましませよ

顯あ津きつ男をの神かみは二柱ふたはしら神がみの神かむ祝ほぎ言ごとに對たいし、歡よろこびのあまり謠うたはせ給たまふ。

嚴いづの御み靈たま瑞みづの御み靈たまは睦むつび合あひ

美み玉たまの姫ひめは生あれましにける

高照たかてるの山やまの靈氣れいきに守まもられて

優やさしき美玉みたまの姫ひめ生あれませり

この御子みこを育そだて育はこみ天界てんかいの

國魂くにたまがみ神かみと仕つかへまつらな

高地たかちほ秀ほの宮みやに仕つかふる神司みつかさは

この神かみ生みみを如何いかに見みるらむ

神かみを生うめ國魂くにたま生うめよと賜たまひたる

八十やその女神めがみもよしと思おもはむ

八十やその比ひ女め彼方かなた此方こなたにおはせども

御子みこを生うませる暇いとまだになし

愛戀いとこやの如衣ゆくえの比女ひめはいや先さきに

神かみの依よさしの御子みこを生うませり

今日けふよりは美玉みたまの神かみを謹つつしみて

はごくみ仕つかへ奉まつらむとすも  
』

茲こに如ゆ衣く比え女ひの神めは、産屋うを立出がで給たまひ謠うひ給たまふ。

天傳あまつたふ月つきの御靈みたまの宿やどりまし

美玉みたまの姫ひめは生あれましにけむ

背せの神かみに仕つかへて吾われは御子みこ生うみぬ

主スの大神おほかみの言靈ことたまの稜威いづに

天津あまつそら空わた渡らふ月つきに照てらされて

瑞みづの御靈みたまの御子みこ生あれましぬ

此この御子みこや天あめに昇のぼりて月つきとなり

土つちに降くだりて雨あめとなれかし

物ものみなを露つゆひ浸ひたしはごくみて

永と久はにましませ美玉みたまの姫神ひめがみ

御子みこ生うみて神かみの依よさしの只ただ一ひとつ

成なり遂とげ奉まつりしことの嬉うれしさ  
』

明晴の神は齋場に立ちて今日の慶事を祝し給ふ。

天津日は照る月は満つ

四方の山々緑して

野邊に茂れる五穀

豊かにつぶらに實りつつ

常世の春は來りけり

高照山の神風は

微妙の音楽かなでつつ

谷間の木々はダンスして

今日の慶事を祝ふなり

上中下の瀧津瀬は

夕力の言靈奏上し

月の賜ひし恵みの露を

四方よもの國原くにのはら悉ことく  
浸ひたし露うるほし天界てんがいは  
いますや益ます々に榮さかえ行ゆく  
時ときしもあれや神かみの稜威みいづも彌いや高たかき  
高日たかひの宮みやに仕つかへます  
顯津あきつ男をの神かみ如衣ゆくえひ比女ひめ  
婚とつぎ居あまして御子みこ生うませ  
美玉みたまの神かみと名な付けます  
其その神業かむわざの尊たふとさに  
山やまの尾上をのへや河かはの瀬せを  
分わけて百神ももかみ集つどひまし  
此これの齋場ゆにはに月つきの輪わの  
象かたちを造つくりて歌うたひます  
今日けふの賑にぎはひ例ためしなし

彌々神世の開口いよいよかみよのひらぐち

吾等國魂神々はわれらくにたまかみがみ

御空を拜し土に伏しみそらはいつちふ

喜び勇み感謝してよろこいさかんしや

爲す事さへも白雲のなことしらくも

彌高々と仰ぐなりいやたかだかあふ

ああ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸ひましませよみたまさは

（昭和八・一〇・一三 舊八・二四 於水明閣 森良仁謹録）

第二三章 中なかの高たか瀧たき（一八五四）



太元顯津男の神は、主の神の神言もちて高日の宮に禊し給ひ、如衣比女の神に御逢ひて美玉姫の命を生ませ給ひ、初めて命の名を稱へ給へり。言靈の水火より成り出でましし神靈をすべて神と稱へ、神と神との婚ぎによりて生れませる神靈を命と言ふ。此より後神と命の御名を判別して、言靈の神より出でし神なりや、婚ぎによりて出でし神なりやを明かにすべし。

善惡相混じ、美醜互に交はる惟神の經綸によりて、紫雲棚曳く高照山の八百八谷の隈には妖邪の氣鬱積して茲に邪神は顯現し、大神の神業に障らむとするぞ忌々しけれ。世人謂らく、天界又は天國と言へば、至善至美至嚴至重にして、寸毫の濁りなく、塵埃なく、清淨無垢なるべしと。吾も亦神界の奥底を探知する迄は世人の如く考へ居たりしが、實地の探檢によりて、意外の感に打たれたる程なり。さりながら、至善至美のみにしては宇宙の氣固まらず、萬有は生れざるなり。惡臭紛々たる糞尿を土に與ふれば、土地忽ち肥沃して五穀は豊にみのり、百の花は美しく咲き、果物蔓物、野菜に至るまでよく生育し、且つ味よろしきが如し。故に醜惡の結果は美となり、善となり、良味良智となるものなるを知るべし。唯善

悪あくの活用はたらきの度合どあひによりて其所名そのしよめいを變へんずるのみ。此大宇宙このだいうちうには絶對的ぜつたいてきの善ぜんもなく、  
又絶對的またぜつたいてきの悪あくもなし。これ惟神かむながらにして自然しぜんの大道たいだうと言いふなり。

如衣比女ゆくえひめの神かみは御子みこの日ひに月つきに生おひ立たちませるを樂たのしみて、朝あさな夕ゆふな森林しんりんをか  
きわけ、高照谷たかてるだにの中津瀧なかつたきに袂みそぎせむと出いでたまふ。さしもに鬱蒼うつさうとして猿ましろもなほ攀よ  
づべからざる岩壁がんぺきを傳つたひ出いでます事ことの危あやふさを思おもひて、眼知男まなこしりをの神かみは女神めがみの後うしろより  
密ひそかに遠とほく従したがひ給たまひぬ。如衣比女ゆくえひめの神かみは中津瀧なかつたきの水勢すゐせいの猛烈まうれつさと其莊嚴そのさうごんとに打うた  
れて、暫しばし恍惚くわつこつとして、吾身わがみのあるを忘わすれて如衣比女ゆくえひめの神かみは御歌みうたを詠うたひたまはく、

仰あふぎ見みれば雲くもより落おつる中津瀧なかつたきの

水みづの勢いきほひすさまじきかな

天地あめつちもわるるばかりの瀧たきの音おとに

われは寒さむさを身みに感かんじつつ

天あまの河かはの末すゑの流ながれと思おもふまで

この中瀧なかつたきの水みづの秀強ほつよきも

たぎち落る水瀨の音に穿たれし

この瀧壺は底なかるらむ

常磐木は天を封じてそそり立ち

中を一條おつる瀧はも

國魂の神を生まむと吾はここに

岩根をよぢて登り來しはや

瀧津瀨の勢いかにつよくとも

神國の爲めに楔せむかな

かく歌ひてざんぶと計り瀧壺に飛び込み給へば、猛烈なる渦に巻き込まれて水底深く沈み給ふ。折もあれ眼知男の神は息せきと此處に現れ來り、如衣比女の神の影の失せたまひたるに驚き、如何はせむと右往左往しながら嚴の言靈宣り上げ給ふ。

☐ 一とふたみよいつむゆななやこのたりももちよろづ  
二三四五六七八九十百千萬！

あはれ今如衣の比女は瀧壺の

底ひも深く隠れましけり

主の神の深き經綸か知らねども

この有様をわれ如何にせむ

主の神の經綸とあれば吾も亦

心やすけくここにあるべし

瀧壺の水底深くかくれにし

比女神思へば心おちみず

美玉姫の御子の命の居ます世に

隠れますとは心もとなき

神を「くは」へながら頭を水面に擡げたれば、  
斯く謠ふ折しも、瀧壺より頭に鹿の如き大なる角を生したる大蛇、  
如衣比女の  
眼知男の神は大に驚き、  
嚴の言靈

を繰返し繰返し、大蛇の歸順を主の大神に祈り給ふ。如衣比女の神は大蛇の巨口に「くは」へられながら、

☞ 吾は今荒振神に吞まれつつ

主の大神の御許にゆかむ

背の岐美に吾が事具に語れかし

なんぢ眼知男の神よ

眼知男の神は慄ひ乍ら、

☞ 神の代を曇らし奉る大蛇神

命にかけて言向け和はさむ

一二三四五六七八の言靈に

まつろひまつれ大蛇の神よ

斯く詠ひ給ふ眼知男の神を尻目にかけながら、大蛇は比女神を「くは」へたる  
まま姿を水中に匿しける。眼知男の神は水面の渦を眺め入りながら、如何にして  
顯津男の神に復命申さむやと、とつおひつ思案にくれ給ふ。

天地の眼知男の神ながら

比女を助くるよしなき苦しき

わが魂は曇らひにけむ言靈の

靈驗は見えず比女失へり

如何にしてこの有様を比古神に

つたへまつらむ苦し悲しも

主の神のみはかり事とは知り乍ら

今日の艱みは目もあてられず

主の神の御いきになりし天界も

曲の荒びのあるは悲しき

喜びよろこびと榮さかえにみつる天界てんかいに

歎なげきありとは思おもはざりしを

美玉みたま姫命ひめのみことの神代かみよに立たたすまでと

思おもひしことも水泡みなわとなりける

中津瀧なかつたきの水みなわ泡なわと消きえし如衣ゆくえ比女ひめの

ゆくへは何處いづこ主すの神かみの右みぎりか

顯あきつ津男つをの神言みことの御稜威みいづも比女ひめが神かみの

なやみ救すくはす術すべなきものか

如衣ゆくえ比女ひめ神かみ去さりますと聞きかすならば

歎なげかせたまはむ比古ひこ遲ぢの神かみは

如何いかにせむ泣なけど叫さけべど如衣ゆくえ比女ひめ

行方ゆくへは水泡みなわとなりたまひぬる

とうとうと無心むしんの瀧たきはこの歎なげき

つゆ知らぬがに落おちたぎちつつ

常磐木の松の梢も聲ひそめ

科戸の風の音づれもなし

吹く風の便りもがもと思へども

せむ術もなき谷閒なりけり

いざさらば巖を下り岩根樹根

ふみしめふみしめ宮居に歸らむ

眼知男の神は愁歎やる方なく、如衣比女の神の沈ませ給ふ灌壺を恨めしげに眺

めやりつつ、悄然として岩壁を下り、谷の難路を岩の根樹の根踏みわけ踏みしめ、

辛うじて高日の宮に歸り着かせ給ひぬ。

（昭和八・一〇・一六 舊八・二七 於水明閣 加藤明子謹録）

第二四章 天國の旅（一八五五）



眼まなこ知し男りの神かみは如ゆくえ衣ひ比め女めの神かみの遭さう難なんを見みて驚おどろき且かつ歎なげきつつ、一いつ刻こくも早はやく高たか日ひの宮みやの神かみ司つかさ、顯あきつ津つ男をの神かみに一いち伍ぶ一し什じふを報ほうぜむと、猿さるも通かよはぬ巖がん壁べきや岩いはの根ね樹きの根ねをふみさくみつつ、辛からうじて高たか日ひの宮みやに歸かへりつき、轟とどろく胸むねをおさへ乍ながら落おち着つかむとして落おち着つかず、宮みやの廣ひろ庭にはに呆ぼう然ぜんとして立たち給たまひ、天てんを拜はいし地ちを拜はいし、如ゆくえ衣ひ比め女めの神かみの冥めい福ふくを祈いのる折をりもあれ、大おほ物もの主ぬしの神かみを從したがへて、悠いっ々うと顯あきつ津つ男をの神かみは御ご殿てんの階きざ段はしを降おり給たまひ、目めの神かみの呆ぼう然ぜんたる姿すがたを見みて、

□ 汝なれこそは眼まなこ知し男りの神かみなれや

默もだして立たたすさまのあやしも  
□

目めの神かみは初はじめて此この御み歌うたに心こころづき、

□ 復かへり言こと申まをさむ術すべなき今日けふの吾われを

おもひて天てんに祈いのりてしはや

如衣比女は滔々落つる中瀧の

瀧壺ふかくかくれましけり

瀧壺にひそみて住める大蛇神は

比女の神言を呑みてかくれぬ

言靈の力に救ひ奉らむと

吾がねがひさへ水泡となりぬる

如何にして此の有様を申さむかと

われは汀にたたずみ居しはや

顯津男の神は泰然自若として、色をも變じ給はず、御歌うたはせ給ふ。

比女神の今の歎きはかねてより

我はさとれり主の神言もて

美玉姫の命を安く産みおきて

あめ の宮居に昇りし比女神  
ひめがみの高き功に報いむと  
われは御靈を祀りて待ちぬ  
なにごとも神の經綸のみ業なれば  
な 泣くも悔むも詮なかるべし  
かむわざ 神業を全く終りて御子を産み  
あめ 天に昇りし比女ぞ尊し  
なが さり乍ら瀧の大蛇を言向けて  
てんかい この天界の禍を祓はむ

め の神はこの御歌に、はつと胸を撫で下しながら、

ひろ 廣きあつき岐美の心に宣直し  
みなほ 見直しますぞ嬉しかりけり

比女神のみ供に仕へただ一人

かへらむつらさ苦しさををり

比女神の隠れまししを目のあたり

打ち仰ぎつつ心みだれぬ

八千尋の水底ふかく隠れましし

比女神の神言の悩みかしこし

今日よりは女神いまさず如何にして

國つくらすとおもひわづらふ

大物主の神は兩神の仲に立ちて、  
涙ぐみつつ聲低に謠ひ給ふ。

比古神の今日の心の苦しさを

おもひて吾は涙にくるる

貴御子と夫神を遺し神去りし

比ひ女めの神言みことの心こころしのばゆ  
如何いかにして御子みこを育はみ奉まつらむと

大物主おほものぬしのこころなやまし

目めの神かみの心遣こころづかひを聞きく身みには

ふたたび涙なみだあらたなりけり

わが涙天なみだあめに昇のぼりて雲くもとなり

地つちに降くだりて雨あめとなるらむ

斯かく謠うたひて兩眼りやうがんの涙なみだをスーと拭ぬぐはせ給たまひぬ。

目めの神かみも亦また悄然せうぜんとして再ふたび謠うたひ給たま

ふ。

二柱神ふたはしらかみの神言みことの言靈ことたまに

吾われは言いふべき言ことの葉はもなし

如何いかにせむ神かみの依よさしの御使みつかひの

吾は女神を見捨ててかへりし

この上は瀧の大蛇を言向けて

み代の禍はらはむとおもふ

斯く謠ひ終り、三柱の神は奥殿深く入らせ給ひ、祭壇の前に端坐して、生言靈の神言を宣り給ふ。顯津男の神は比女の遭難を神命に依りて前知し、早くも御靈代を造りて被ひ清め、祭壇の上に納め、いろいろの花を供へ、目の神の歸り來るを待ち給ひたるなりき。目の神は此のさまを見て驚きながら、

岐美こそは眞の神よ瑞の神

比女の遭難前に知りませり

明けき岐美の神靈を今更に

仰ぎぬるかな目の神吾は

語らはむ術なき身ぞと思ひしを

前まへに知しらせるあはれ岐き美みはも  
何事なにごとも主スの大神おほかみのみさだめと

おもひさだめて歎なげかざるべし

瀧津たきつ瀬せの音おと滔たう々たうと吾わが耳みみに

今いまも聞きゆる恨うらめしきかな

恨うらむまじ歎なげくまじとは思おもへども

靈代たましろ拜はいせばひとしほ戀こほし四

大物主おほものぬしの神かみは拍手はくしゆを終り、聲こゑさはやかに謠うたひ給たまふ。

八洲河やすかはのみ底そこゆ安やすく生あれましし

如衣ゆくえの比女ひめはあはれ世よになし

春駒はるこまを曳ひきて仕つかへし如衣ゆくえ比女ひめ

神かみの神言みことをおもへば悲かなしも

幾年を高日の宮に住みまして

御子を生ませし功績おもふ

これよりは御子の命にかしづきて

岐美の神業をつがせ奉らむ

比女神の御靈は天津高宮に

歸れど此處にいます如おもふ

比古神の御手代となりいやますに

仕へ奉らむ比女よ安かれ

比古神の顯津男の神は、儼然として靈代の前に謠ひ給ふ。

幾年を吾に仕へてつつがなく

御子を生ませる公ぞかしこき

一柱御子の命のある上は



我われは力ちからを落おとさざるべし

比ひ女めよ比ひ女めあとに心こころを殘のこさずに

主スの大神おほかみの大神おほみやにゆけ

汝なれに逢あひし日ひを思おもひつつ今いま茲ここに

くやみの涙なみだとどめあへぬも

さり乍ながら神かみの定めさだめは詮すべもなし

我われもこころをたて直なほしてむ

せめてもの我わが志こころざしと靈たまし代の

比ひ女め神かみこれの供物くもつを召めせよ

八百萬やほよろづの神かみがみ々は、如衣ゆくえ比女ひめの神かみの昇天しよつてんと聞ききて吾先われさきにと、高日たかひの宮みやに集あつまり給たまひ、  
弔とむじひの歌うたを次々つぎつぎ謠うたはせ給たまふ。遠津とほつ御幸みゆきの神かみ、

☞ 歎なげくとも詮せんなきものか比女ひめ神かみは

天津神國あまつみくにに昇のぼりましぬる

如衣比女天國ゆくえひめみくにに歸かへりませせど

靈たまは高日たかひの宮みやを照てらさむ

姫御子ひめみこを後あとに遺のこして神去かむさりし

比女神ひめがみの心こころいたはしきかも

神かみの國くににかかる歎なげきのあらむとは

おもはざりしよ御幸みゆきの神かみは  
『

次つぎに大御母おほみははの神かみは、比女神ひめがみの昇天しやうてんをいたく悼いたませ給たまひて、御歌詠みうたよませ給たまふ。

八洲河やすかはの清水しみづに生あれし比女神ひめがみは

惜をしや天國みくにに昇のぼりましける

主スの神かみの貴うづの經綸しぐみか知しらねども

われ朝夕あさゆふのなげかひ絶たえず

幾千代も共にみわざ<sup>つか</sup>に仕へむと

わがおもひしは夢<sup>ゆめ</sup>なりにけり

顯津男の神<sup>かみ</sup>の神言<sup>みこと</sup>のみ心<sup>こころ</sup>を

おしはかりつつ涙<sup>なみだ</sup>しぐるる

白銀<sup>しろがね</sup>の駒<sup>こま</sup>にまたがり迎<sup>むか</sup>へたる

よき日<sup>ひ</sup>おもへば夢<sup>ゆめ</sup>か現<sup>うつ</sup>か

歎<sup>なげ</sup>くとも最早<sup>もはや</sup>詮<sup>せん</sup>なしこの上<sup>うへ</sup>は

美玉<sup>みたま</sup>の姫<sup>ひめ</sup>を育<sup>はしく</sup>み仕<sup>つか</sup>へむ

比女神<sup>ひめがみ</sup>の神<sup>かみ</sup>去<sup>さ</sup>りましし此宮<sup>このみや</sup>は

月日<sup>つきひ</sup>の光<sup>かげ</sup>もうすら曇<sup>くも</sup>りつ

天津日<sup>あまつひ</sup>も月<sup>つき</sup>も歎<sup>なげ</sup>かせ給<sup>たま</sup>ふらむ

今日<sup>けふ</sup>の御空<sup>みそら</sup>はうすらくもれり

日<sup>す</sup>の本<sup>もと</sup>の神<sup>かみ</sup>は誄歌<sup>しのびうた</sup>詠<sup>よ</sup>み給<sup>たま</sup>ふ。

高たか照てるの山やまもくもりて比ひ女め神がみの

今け日ふのみゆきを仰あふぎおくりつ

からたまの神かみ生うみましし功いさ績をしを

のこして比ひ女めは神かむ去さりにけり

神かむ去さりし比ひ女めの神み言ことのけなげさよ

平へい然ぜんとして大を蛇ろちに吞のまれぬ

吾われは今いま比ひ女めの神み言ことの訃ふを聞ききて

日すの本もと山やまより降くだり來きにけり

諸もろ々もろの神かみ一ひと柱しらおちもなく

比ひ女めの昇しやう天てん惜をしまざるなし

比ひ古こ神がみの心こころ如い何かにと思おもひつつ

空そらに知しられぬ涙なみだの雨あめ降ふる

主すの神かみの大おほみよさしにまつろひて

如ゆくえ衣えの比ひ女めは神かむ去さりにけむ

□

片照かたてるの神かみはまた謠うたふ。

☐ おもひきや高日たかひの宮みやの神柱かむばしら

如衣ゆくえの比女ひめの神去かむさりますとは

一度ひとたびは見みらくおもひつ比女神ひめがみに

あはで別わかるる事ことの惜をしさよ

比女神ひめがみの昇天しやうてんききて吾われはただ

夢ゆめになれよと祈いのりけるかな

紫微界しびかいに姿見すがたみえずも比女神ひめがみは

天あめの高宮たかみやに輝かがやき居ゐまさむ

吾われはしも片照かたてるの神高かみ地秀たかちほの

尾をの上へをわけて來きたり弔とむらふ

主スの神かみの神言みこと畏かしこみ今日けふはしも

比女ひめ弔とむらふと降くだり來きしはや

比女神ひめがみの神かむさ去り給たまふは惜をしかれど  
神かみの經綸しぐみとおもへば尊たふとし㊦

明晴あけはるの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

㊦ 比女神ひめがみのこに現あられましてより

この天界てんかいは明晴あけはるの神かみ

あきらけく晴はれ渡わたりたる天界てんかいの

今日けふは曇くもりぬ比女ひめいまさねば

あけくれを仕つかへ奉まつりし比女神ひめがみの

かげだに見みえず淋さびしき今日けふなり

比古神ひこがみの雄を々をしき心こころきくにつけ

わが天界てんかいの榮さかえをおもふ

美玉姫神みたまひめがみの命みことに従まっろひて

吾われは神國みくにをひらき照てらさむ』

近見ちかみ男をの神かみは謠うたひ給たまふ。

中な瀧かたきの大蛇をろちの神かみの醜業しこわざを

比女ひめがみ神かみのために退やらはむと思おもふ

愛善あいぜんの光ひかりに満みつる天界てんがいに

仇報あだむくゆるは如何いかがあるべき

さり乍ながら世よの禍わざはひを打うち被はらふ

みわざは神かみも許ゆるさせ給たまはむ

これに在ます百ももの神かみ達たちきこし召めせ

世よのため大蛇をろちの神かみのぞかばや』

茲こゝに眞澄ますみの神かみは聲高こゑたか々と謠うたひ給たまふ。

☐ ます鏡眞澄の神の言靈に

切り放るべし瀧の大蛇を

天も地も眞澄に澄みてある世なり

醜の曲靈を清めずあるべき

われここに眞澄の神と現れて

比女を弔ひ言はかりすも

天界に禍をなす醜神を

打ちきためずば神世は榮えじ  
☐

斯く瀧の大蛇の言向けを提唱し給へば、百神は一度に「オー」と答へて、眞澄の神の御謀り事に参じ、これより百の神々は、中津瀧に向つて大蛇を言向けやはすべく、さしも難路の高照山の谿間を進ませ給ふぞ畏けれ。

（昭和八・一〇・一六 舊八・二七 於水明閣 内崎照代謹録）



第二十五章 言靈の瀧（一八五六）

抑々紫微天界の高照山は、佛書に所謂須彌仙山にして、スメール山と言ひ又、氣吹の山とも言ふ。次に高地秀山は、又の御名を天の高日山と稱へ、高照山に次ぐの高山なり。

高照山は高さ、今日の測量法によれば、三十三萬尺にして、其周圍は八千八百里にあまり、大峽小峽の四方に流るる數は、五千六百七十條あり。その中最も深く廣く數多の谷水を合して東方に向つて流るるを日向河と言ひ、南に向つて流るるを日南河と言ひ、西に向つて流るるを月の河と言ひ、北に向つて流るるをスメール河、一名高照河と言ふ。

又高地秀山の高さも之に準じて三十萬尺、東には東河流れ、南には南の大河流れ、西には西の大河、北には高地秀河流れて、紫微天界の大洋に注ぐ。而して高地秀山も谷の數、高照山に比して大差なかりける。

ただ高地秀山は、スメール山に比して岩石多く、山姿峻しく、屹然たるの差違

あるが如し。兩山共常に七色の雲ただよひ、神靈の氣山を包みて靈氣を四方に放  
てども、あちこちの谷間には邪氣鬱結して邪神現れ、遂には中津瀧の大蛇の如き  
曲神現れ出でたるなり。

ここに高日の宮の神司等は、如衣比女の靈を厚く慰め終りて、中津瀧の大蛇を  
言向けやはすべく、大御母の神、大物主の神、明晴の神、眼知男の神、眞澄の神  
等その他、百の神々を伴ひて、岩石起伏の谷の難路を辿りつつ、嚴の言靈宣り上  
げて、谷間の邪氣を抜ひ乍ら、勇み進んで中津瀧のふもとに着き給ひぬ。

太元顯津男の神は、如衣比女の靈を弔ふべく、高日の宮に在しまして、大御母  
の神の一行の無事を祈り、大蛇の神を言向けやはすべく、大御前に端坐して、瑞  
の言靈宣り給ひつつありき。

その言靈の御歌に、

三ツ栗の中津瀧根に出でましし

神の神言につつがあらすな

天界てんかいを曇くもらせ濁にごせし禍わざはひを

起おこす曲神まがみを放はならせたまへ

如衣ゆくえひ比女ひめ犠牲いけにえとなりし中津なかつたき瀧たきの

大蛇をろちを言向ことむけやはしませ神かみよ

主スの神かみの功績いさをしなくば如何いかにして

この曲神まがみのまつるふべきやは

高照たかてるの峰みねより落おつる瀧津たきつせ瀨せに

住すむ曲神まがみは厳いしき神かみはも

曲神まがみはいかに厳いしく強つよく共とも

生言いくこと靈たまの力ちからにおよばむ

比女神ひめがみは大蛇をろちの曲神まがみ恨みみつ

天あめの高宮たかみやゆ助たすけますらむ

と謠うたひ終をはり、神かみの御前みまへにひれ伏ふして、一いっ行かうの成せい功こうを祈いのり給たまふ。

ここに大御母の神等一行は、中津瀧の瀧壺の周圍に整列して、おのもおのものに生言靈を宣り給ふ。

大御母の神、澄みきらひ澄みきらひたる瀧壺に

かくるる曲神とく出でませよ

吾こそはアの御靈より現れし

大御母神言靈宣らむ

久方の高日の宮の神柱

底の曲神を吾はきたためむ

言靈の嚴の力をおそれなば

大蛇の神よ早やにまつるへ

萬丈の瀧は空より落たぎち

大蛇の頭打ちたたけかし

かく迄に宣る言靈を知らずがに

水底みそこに潜ひそむあはれ大蛇をろちよㄣ

大御母おほみははの神かみの水い火きを込こめての言靈ことたまも何なんの功いさをなく、依然いぜんとして灌壺たきつぼは青あをき波なみをた  
たへ、滔々たうたうと落おつる瀧たきの音おとのみ四邊あたりの森林しんりんを震ふるはせにけり。  
ここに大物主おほものぬしの神かみは、儼然げんぜんとして言靈歌ことたまうたを宣のり給たまふ。

大御母おほみはは神かみの神言みことの言靈ことたまもㄣ

聞きかず顔がほなる醜しこの大蛇をろちよ

主スの神かみの與あたへ給たまひし言靈ことたまを

醜神しこがみ汝なれに吾われはたむけむ

潔いさぎよくまつろひ來きたれ水底みなそこに

長ながくひそめる大蛇をろちの神かみよ

なるべくは嚴いづの言靈ことたま宣のり上げあて

汝助なれたすけむと思おもひつつ來きし

吾こそは大物主の神司われ おほものぬし かむつかさ

高照山も瀧も吾ものたかてるやま たき わが

この瀧は主の大神の神言もてたき す おほかみ みこと

吾に賜ひし言靈の瀧よわれ たま ことたま たき

常磐木の松は茂りて天を閉ぢときはぎ まつ しげ てん と

晝なほ暗く大蛇しのぶかひる くら をろち

主の神の生言靈に八千尋のす かみ いくことたま やちひろ

水底までも照し明かさむみなそこ てら あ

斯く謠ひ給ふ折もあれ、八千尋の底より、まばゆき許りの光現れ來り、大蛇はか うた たま をり やちひろ そこ ばか ひかゆらは きた をろち

水面に浮び上り、右に左にのた打ち廻りつつ、又もや水底に潜り入りぬ。すめめん うか あが みぎ ひだり うた まは また すめてい くぐ い

ここに眼知男の神は、萬の神等の力を得て、言靈歌を宣る。まなこしりを かみ よろづ かみたち ちから え ことたまうた の

高照の山にひそめる曲神をたかてる やま まがかみ

言こと向むけやはすと立たち向むひたり

かくならばせむ術すべなけむ大蛇をろちがみ神

生いく言こと靈たまにまつるひ奉まつれよ

比ひ女め神がみを吾わが目めの前まへにて害そこなひし

むくいよ大蛇をろち今いまに亡ほろびむ

亡ほろぼさず生いく言こと靈たまに救すくはむと

百もも神がみ達たちは現あれましにける

この御山みやま顯津あきつ男をの神かみ知し食しめす

清すが所どなりせば早はやく去されかし

いつまでもこの水底みなそこに潛ひそむならば

吾われは許ゆるさじ斬きりてはふらむ

澄すみきらふこの神國かみくにを畏おそれなく

荒あぶる神かみのおるかさあはれ〚

斯く謠ふ折しも、千尋の瀧壺を紅に染め乍ら、  
又もや大蛇は水面に體を現し、  
前後左右にのた打ち廻り遂に水底深く沈みける。  
ここに明晴の神は謠ひ給ふ。

久方の天の高照山に棲む

大蛇の神よ斬りてはふらな

玉の緒の生命惜しけく思ひなば

生言靈にまつるひ奉れ

吾は今神國の禍ひのぞかむと

百神伴ひ上り來しはや

水底に大蛇は深くひそむ共

言靈の征矢さくる由なけむ

御功績も高日の宮の比女神を

呑み喰ひたる大蛇惡らしも

汝も亦神より出し身魂なれば



ただに放るは惜ししと思ふ  
なるべくは吾言靈を諾ひて

よきに從ひまつるへよかし

八千尋の淵の底まで明晴の

神の功績を汝は知らずや

よしやよし千尋の底にひそむ共

生言靈にやはで置くべき

百神は今ここにあり如何にして

大蛇よ刃向ふ力あるべき

この言靈に水底の大蛇は、紅の腹をひるがへし乍ら浮き上り、巨口を開いて黒  
き毒氣を吐く事數百丈、忽ち四邊は暗夜の如く、咫尺を辨ぜざるに至れり。  
ここに近見男の神は、この邪氣を祓はむとして、言靈歌をよみ給ふ。

烏羽玉の黒き水火はく曲神は

今を最後と荒れくるひつつ

近見男の神ここに在り汝大蛇

心なごめてまつるひ來れ

曲神の水火は眞黒に包めども

ふきて放らむわが言靈に

科戸比古神よ忽ち現れて

谷間を包む邪氣被へかし

斯く謠ひ給ふや、全山の百樹の梢をゆるがせて、科戸の風は、岩も飛べよと吹  
き荒れつつ、大蛇の吐ける眞黒き毒氣は、跡かたもなく散りうせて、萬丈の瀧は  
白くかかり、瀧壺は大蛇の血潮に染みて眞赤く見えぬ。又もや大蛇は水底にし  
びたりと見え、ブクブクと水泡を水面に吹き上ぐるのみ。

ここに眞澄の神は、威儀を正して、天を拜し地に伏して、言靈歌を詠ませ給ふ。

科戸邊の神の伊吹きに退はれて

黒雲忽ち吹き散りにけり

言靈の稜威貴し近見男の

嚴言靈に風出でにける

高照の山の百樹をそよがせて

科戸の神は生れましにけり

神國に禍なす瀧の大蛇さへ

得たまりかねて隠るひにけり

いざさらば眞澄の神は主の神の

御水火に嚴の言靈宣らむ

八千尋の瀧壺深くしのぶなる

大蛇よ嚴の言靈知らずや

言靈の嚴の劍をぬきかざし

まつろふ迄を攻めなやまさむ

吾こそは天の眞澄の神言ぞや

汝の力はつきむとすらむ

斬りはふる生言靈をやはめつつ

言向けやはすと眞心の吾よ

水底の大蛇よ吾宣る言靈を

つぶさに悟れ命を助けむ

斯く謠ひ給へば、大蛇は以前にかはる優しき姿を水面に浮べ乍ら、兩眼に涙を流し幾度も頭を下げ、忽ち瀧水を口にふくみ伊吹の狭霧を吹き起し吹き起し、雲を湧かせ、雨を降らせ乍ら、高照山の頂高く、天に向かつて逃げ行きぬ。  
ここに大御母の神は眞澄の神の言靈の威力を感じ給ひて、御歌よまし給ふ。

畏しや眞澄の神の言靈に

醜の大蛇は蘇りたり

愛善あいぜんの光ひかりただよふ天國てんごくに

救すくはれぬものはあらざりにけり

比女神ひめがみをなやまし奉りまつし大蛇をろちさへ

主スの言靈ことたまに救すくはれにけり

愛善あいぜんの心照こころてらして吾われも亦また

萬よろづの神かみに交まじはらむかな

眞澄ますみの神かみは謠うたひ給たまふ。

天てんも地ちも眞澄ますみにすめる神國かみくにに

ひとり輝かがやく愛善あいぜんの力ちからよ

村肝むらきもの心こころ汚きたなき大蛇をろちがみ神かみも

主スの大神おほかみの御子みこなりにけり

主スの神かみの御水みい火きのくもり固かたまりて

現れ出でにけむこれの大蛇は  
主の神の靈に生りしと思ふ故に  
吾は大蛇を助け逃しつ

大物主の神は、眞澄の神の清き心に感じ給ひて、  
謠ひ給ふ。

天も地も眞澄の神の優しかる

ここに感じて蘇りつつ

魂も眞澄の神の眞心に

吾恥かしくなりにけらしな

愛善の力の強く輝かば

醜の曲神もなびき伏すなり

明晴の神は謠ひ給ふ。

☐ 高照たかてるの御山みやまの邪氣じやきも明晴あけはるの  
今日けふより清きよく月日つきひ照ひるらむ  
今日けふよりは高照たかてる山やまは安やすらかに  
神業みわざ仕つかへむ百ももの神かみたち☐

かくして中津瀧なかつたきの大蛇をろちは、百神ももがみの生言靈いくことたまにうたれ、蘇よみがへりつつ天高てんたかく立たち去さりに  
ける。

（昭和八・一〇・一六 舊八・二七 於水明閣 谷前清子謹録）

第三篇 東雲神國しののめしんこく

第二六章 主神の降臨（一八五七）

高照河の上流に、高くかかれる萬丈の瀑布中津瀧の淵に潛める大蛇は、大御母の神、眞澄の神たちの天津眞言の言靈によりて雲を起し雨を降らせつつ、大空高く逃げ去りたれども、妖邪の氣は山の谷々を包みて、さしもに清き聖山も黒雲常に覆ひて時に暴風を起し、樹木を倒し宮居を破り、豪雨を降らして諸神を苦しめ、田畑を破り其害日に月に烈しくなりければ、高日の宮の神司は諸神を集めて、天地の害を除かむと大御前に嚴めしく祭壇を新に造り、山の物、野の物、河海の種々の美味物を八足の机代に置き足はし、御酒御饌御水堅鹽を奉りて國土平安の祈願を籠め給ふ。

顯津男の神は、邸内より滾々として湧き出づる玉の御池に身を滌ぎ、聲も清しく大前に天津祝詞を奏上し祈り給ふ。其宣言、  
掛卷も綾に恐き、天津高宮に大宮柱太しき立てて鎮まり坐す主の大御神、天の峰火夫の大神の大御前を謹み敬ひ、遙に遙に拜みまつる。抑々これの紫微の天界



は、大御神の大御言もて天津眞言の言靈に生り出で給ひ、山野の草木は日に夜に榮え、百神達は美しき神代を樂しみ、朝夕の風も和やかに、降り來る雨もほどほどに、總ての物を浸しつつ、神の依さしの神國は全く茲に現れぬ。彼百神達は大御神の大神業を稱へまつり、喜びまつりて麻柱の誠を盡し、紫微天界は日に月に彌廣々く、彌開けに開け彌榮えに榮えける折しもあれ、高照山の峰高く、落ち來る瀧の其中津瀧に醜の大蛇の潛み棲みて、萬の神々を害ひまつり、天に成るもの地に生ふるもの悉く其の禍を蒙らざるものなし。故ここをもて、百の神々をこれの齋場に神集ひ、天津眞言の祝詞もて大御神の御心を和め奉り、四方の雲霧吹き拂ひ神代の昔にかへし奉らむと、謹み敬ひ願ぎ申す。此有様を平らけく安らけく聞召し相諾ひ給ひて、我等が麻柱の誠をうま怜に委曲に聞し召し、これの神國は曲もなく汚れなく荒ぶる神は影ひそめ、眞言の道に立ち歸り、共々に神國のため神業に仕ふべく、守らせ給へと高日の宮の神司、顯津男の神謹み祈り奉る」  
と聲も爽やかに太祝詞言宣り給へば、高照山の峰より、香しき風吹き起りて、妖邪の氣は忽ち吹き拂はれ、尾上を包みし黒雲は跡なく消えて紫の雲棚曳きわたり、

天津日の光、月の光は皓々として地上に光を投げ給ふぞ畏けれ。忽ち四邊に微妙の音楽響き、紅白青紫黄色の旗を手に手に翳しつつ、八十の神達は主の大神の御尾前に仕へつ、高日の宮の清庭に悠然として天降ります尊さに、顯津男の神、大御母の神、大物主の神其他の諸神は宮の清庭に拜跪し、莊嚴の神氣に打たれ乍ら、謹み敬ひ迎へまつる。顯津男の神は恭々しく主の大神を三拜し、自ら御尾前に仕へまつり、高日の宮の至聖殿上に招ぎまつりける。

顯津男の神は主の大御神の降臨を拜しまつりて恐懼に堪へず、謹みの餘り御聲までも慄はせ給ひて恐る恐る御歌詠ませ給ひける。

かけまくも綾に畏き主の神の

天降りますこそ尊かりける

高地秀の山を下りて我は今

神を生まむとここに來つるも

大神の生言靈に生り出でし

紫微しびてん天界んかいはうまし神國みくによ

久方ひさかたの高日たかひの宮みやに天降あもりましし

主スの大神おほかみの嚴々いついづしきかも

願ねがはくはわれに力ちからを賜たまへかし

この神國かみにを永久とほに守もるべく

日ひを重かさね月つきを閱けみしてやうやくに

妖邪えうじやの空氣くうきは湧わき出いでにけり

いかにして此これの邪氣じやきをば拂はらはむかと

主スの大神おほかみの神言みことこ請こひける

ここに主スの大神おほかみは儼然げんぜんとして立たたせ給たまひ、  
と打ち振うりながら、嚴おこそかに宣のり給たまふ。  
左手ゆんでに玉たまをかかへ右手めでに幣ぬさを左右さいうさ

言靈ことたまの天照あまてる國くによ言靈ことたまの

眞言濁れば國は亂れむ

朝夕に生言靈の響なくば

この天界は曇り亂れむ

言靈は總てのもの力なり

心清めて朝夕宣れよ

澄みきらふスの言靈の御水火より

正しき尊き神はうまれむ

濁りたる神の言靈世に凝りて

曲神達は生れ出づるなり

高照山醜の大蛇も神々の

言靈濁れる酬いとこそ知れ

斯く大神宣を宣り終りて、主の大神は至聖殿上に消ゆるが如く神姿をかくし給  
ひぬ。茲に顯津男の神は朝な夕なに生言靈を宣りまつれども、わが靈魂のいづく

にか曇り濁りのある事を悟りて大に悔い給ひ、  
百神達に向つて、心の丈をのべ傳  
ふべく御歌詠ませ給ふ。

☞ おほけなくも高日の宮の神司

百神達の御前に申さむ

久方の天より降りし主の神の

生言靈にわれ打たれける

朝夕を袂に靈魂清めつつ

未だ濁れるわが魂うたてき

如衣比女神去りしよりわが心

曇りしものか神代は曇りつ

主の神の教畏み今日よりは

わが魂を洗はむと思ふ

主の神のわれにたまひし八十比女も

ただ國くに生なみのためなりにけり

戀こひすてふ心こころ起おこりていたづらに

迷まよひぬるかな比ひめ女神がみの前まへに

神かみを愛あいし神かみを戀こふるも誠まごころ心の

ために非あらずば世よは亂みだるべし

八や十そ比ひ女めを愛あいと戀こひとに泣なかせつつ

われつつしみの違たがへるを思おもふ

凡ただがみ神がみのそしりを恐おそれ身みを安やすく

守まもらせむとせし事ことのうたてさ

百もも神かみよ心こころしたまへ今日けふよりは

われ主すの神かみの神言みことに仕つかへむ

百もも神かみはいかに賢さかしくはかゆとも

神かみの依よさしに我われは違たがはじ

□

と謠うたひ給たまひて顯あきつ津男をの神かみは、主スの大御神おほみかみの大神宣おほみことのまにまに、國くに生にうみ神かみ生みの神みわ  
業ぎに仕つかへまつり得えざりし事ことを、わが心こころの汚きたきより出いでしものと大おほに悔くい給たまひ、今こん  
後ごは凡神ほんしん達たち如何いかに言ことはかり譏そしり合あふとも、自己じこの名譽めいよを捨すてて只管ひたすらに神命しんめいに應こたへ  
むと宣言せんげんし給たまひしなり。茲ここに居列ゐならぶ神々かみがみは主スの大御神おほみかみの神言みことを謹聽きんちやうし、又また宮司みやつかさの  
宣言のりごとを諾うべなひ、己おのが小ちさき心こころの曇くもりより神業みわざを妨害ぼうがいし居ゐたる事ことを今更いまさらの如ごとく悔くい給たま  
ひて、先まづ大御母おほみははの神かみよりお詫わびの言靈ことたまを宣のり給たまふ。

主スの神かみの依よさしに生あれし宮司みやつかさの

神業みわざ知らざりし吾われを悲かなしむ

如何いかならむ神かみの妨さまたげありとても

神業みわざの爲ためには雄々をしくませよ

百神ももかみの小ちさき心こころを押おしはかり

主スの神言かむことに背そむきたまひし

吾われも亦また主スの神言かむことを悟さとらずて

凡<sup>ただが</sup>神<sup>がみ</sup>のごと<sup>おも</sup>思<sup>ひ</sup>けらしな

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>こそは<sup>あめ</sup>天<sup>の</sup>依<sup>よ</sup>さし<sup>かむつかさ</sup>の神<sup>司</sup>

われ等<sup>ら</sup>に<sup>ひ</sup>比<sup>す</sup>べき<sup>かみ</sup>神<sup>に</sup>おはさず

今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>よりは<sup>こころ</sup>心<sup>の</sup>駒<sup>こま</sup>を<sup>た</sup>立<sup>て</sup>直<sup>なほ</sup>し

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>に<sup>つか</sup>仕<sup>へ</sup>む<sup>おほみはは</sup>大<sup>の</sup>御<sup>は</sup>母<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>は<sup>は</sup>

大<sup>おほものぬし</sup>物<sup>の</sup>主<sup>かみ</sup>の神<sup>は</sup>御<sup>みうたよ</sup>歌<sup>詠</sup>まし<sup>たま</sup>給<sup>ふ</sup>。

☐ 天<sup>あまわた</sup>渡<sup>る</sup>月<sup>つき</sup>の御<sup>みたま</sup>靈<sup>の</sup>宮<sup>みやつかさ</sup>司

百<sup>ももがみたち</sup>神<sup>の</sup>達<sup>は</sup>か<sup>ゆ</sup>べし<sup>やは</sup>

主<sup>ス</sup>の胤<sup>たね</sup>を<sup>あなたこなた</sup>彼<sup>方</sup>此<sup>方</sup>に<sup>まく</sup>ば<sup>らす</sup>

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の神<sup>みわざ</sup>業<sup>を</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ざり</sup>に<sup>けり</sup>

日<sup>ひ</sup>の神<sup>かみ</sup>は<sup>ひ</sup>日<sup>の</sup>神<sup>かみつき</sup>月<sup>は</sup>月<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>

おのもおの<sup>みわざ</sup>ものに<sup>あり</sup>ける



凡神ただがみの誠まことをもちて大神おほかみを

議はかゆる心こころの愚おろかしさを思おもふ

凡神ただがみの誠まことは月つきの大神おほかみの

眞言まことに比ひして差別けぢめありける

大神おほかみのよしと宣のらする神業かむわざも

凡神ただがみの目めに惡あしと見みゆるも

凡神ただがみのよしと思おもひし神業かむわざは

大神業おほかむわざの妨さまたげとなりぬ

神々かみがみはそれ相さう當たうの職務つとめあり

小ちひさき神かみの議はかゆべきかは」

茲ここに顯津男あきつをの神かみは、二神にしんのわが神業みわざをやや諒解りやうかいしたる事ことを喜よろこび給たまひて、御歌みうたよ  
まし給たまふ。

大御母大物主の言靈に

我は心もなごみ初めたり

今日よりは醜の囁き耳とせず

我おほらかに神前に仕へむ

如衣比女の姿に心暗まされ

わが言靈は濁りたるらし

わが神業諾ひたまふ神あれば

心の魂は曇らざるべし

わが心曇れば忽ち言靈も

濁りて神代は亂れむとすも

恐るべきものは心よ言靈よ

朝な夕なに洗ひ清めむ

斯くおほらかに宣示し給ひて、主の大神の賜ひしわが神業を明かにし、怯めず

臆せず遂行せむ事を言擧げし給ひたるぞ、天界經綸發祥の基礎とこそ知られける。  
(昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 加藤明子謹録)

## 第二十七章 神祕の扉(一八五八)

主の神より瑞の御靈太元顯津男の神に依さし給へる國生みの神業とは、荒果てたる國土を開拓し、神々の安住すべき土地を開かせ給ふの意にして、神生みの神業とは、國魂神を生み給ふの意なり。先づ國を生みて其國魂たる、正しき清き神魂を生まざれば、神々は優勝劣敗の氣分を起して終に收拾すべからざるに至るを憂ひ、茲に國の司たるべき御子を生み給ふの意なり。而して主の神より八十比女神を與へ給ひたるは、現代人の如き又ホコとホトとの接合にあらずして、只兩神の眞言の言靈の水火と水火とが融合調和し給ふ神業に感じて、ここに神靈胎内に宿りて、終には日を足らし月を満たして呱呱の聲と共に生まれ出で給ふ神業なり。

比女神と比古神の澄み切り澄みきらひたるスの言靈の水火を初めとし、男神のウ  
聲と女神のア聲とここに凝りて神示の神業は完成するものなり。故に現代の如く  
ペニスとムツシエリーとの交接の如き醜猥の手續を取るにあらざるを知るべし。  
世は次々に變り行きて現代人の如き、御子生みの手段を取るに至りたれども、  
遠き神代の神々は斯かる手段を取るの要なく、清く正しき眞言の生言靈を互に宣  
り交しつつ、女神は男神に、男神は女神に融合親和して、二神は茲に一神となり、  
水火と水火とを蒸し蒸して其神業を爲し終へ給ふなりき。男神女神が其の豊圓な  
る肌と肌とを抱き合せ給ふ時は、互に舍密電氣の發生により温熱次第に加はりて、  
蒸しつ蒸されつ御子の靈宿るなり。斯くして生れたる男の御子を「ムス」子と言  
ひ、女の御子を「ムス」女といふは、今に至るまでその稱へは同じ。遠き神代に  
於ける太元顯津男の神が八十比女神に對せる御子生みの神業を聞きて、現代人は  
一夫多妻の邪道と誤解するの懼れあるものなれば、ここに説示し置くものなり。  
故太元顯津男の神は、八十比女神を御樋代として百神の暗き心を照すべく、御  
子生みの神業に奉仕し給ひしこそ畏けれ。

天界は愛と善との世界なれば、其愛は益々昂じて戀となり又戀愛となるは止むを得ざる自然の理と知るべし。愛は一切萬有に對する情動の活用にして、戀は之に反し或一つのものに焦れて魂のこびりつく意なり。故に戀は親子の中にも、君臣の間に、又朋友男女の間に起る情動なり。戀愛に至りては然らず、戀ひ戀ひて焦れたる末は終に其肉體をも任せ任され、終には夫婦の道を造り又は破るの結果となる、之を戀愛の情動といふ。

今の世に至るも主の神の神言を蒙りて世に生れ出でたる神人は、凡人の如き形式を取らず、古の天界に於ける夫婦の道の如く、水火と水火とを組み催合ひ、情動と情動の接合によりて御子生みの神業を爲し得るものなれば、極めて清淨なる行爲なれども、凡人は妬み嫉み心捻け曲りて、醜惡の行爲を爲せるものと見做すこそ是非なけれ。女男兩神は互に顔と顔とを摺り合せ、胸と胸とを抱き合せ、互に手を握りて愛の情動を交接し、其水火の發動によりて貴の御子は生れ出づるものなり。

有徳の神人は現代に生ると雖も、此の方法によりて御子は生れ出づべし。女男

互たがひに心こころに恨うらみなく、妬ねたみなく、嫉そねみなく、其その清きよき赤あかき言こと靈たまを取とり交かはす時ときは、別べつに男女だんぢよの交かう接せつの手段しゆだんを採とらずとも貴うづの御み子こは生うまれ出いづべし。これ言こと靈たまの天あま照てる國くにの幸さちひなり。現げん代だいにても、想さう像ざう妊にん娠しんといふことあり。ここに或ある女をんなありて遙はるかに戀こひ遠とほく慕したひつつ、手たま枕くらの夢ゆめ結むすばずと雖いへども、有う徳とくの神しん人じんの御み名なを聞ききて朝あさ夕ゆふ之これに敬けい慕ぼし、愛あいを籠こめ戀こふる時ときは、神しん人じんの靈れい魂こん忽たちまち親しん臨りんして水い火きを睦むつみ合あひ、茲ここに胎たい兒じとなりて現あらはるなり。故ゆゑに賢けん明めいにして至し粹すい至し純じゆんなる女にょ體たいには、一い切っさいの交かう接せつなくして御み子こ生うまはる理由りゆうなり。

又また妊にん婦ぷは常つねに聖せい賢けんの像ざうを壁へき間かんに懸かけて敬けい慕ぼおかざる時ときは、容よう貌ぼう美うしき賢けん兒じ生うま、羅ら漢かん像ざうの如ごとき醜しう惡あくなる容よう貌ぼうを朝あさ夕ゆふ見みる時ときは、醜しう惡あくなる男だん女ぢよの御み子こ生うまはるものなり。善ぜん言げん美び詞しの言こと靈たまを朝あさ夕ゆふ拜はい誦しゆし、神しん人じんの面おも影かげを心しん中ちゆうに描えがくときは神かみの御み子こ生うまはる、惡あく言げん暴ぼう語ごを常つねに口くちにする時ときは寧ねい猛まう醜しう惡あくなる御み子こ生うまはる、國くにを亂みだし家いへを破やぶり、終つひに兩りやう親しんを泣なかしむるものなり。故ゆゑに現げん代だい人じんと雖いへども常つねに言こと葉はを謹つつしみて、朝あさな夕ゆふなに善ぜん言げん美び詞しの神かみ言ことを奏そう上じやうし、清きよき赤あかき眞ま言ことの心こころ以もて神しん人じんを戀こひ慕したふ賢けん女ぢよは、眞まさしく國こく家かの柱ちゆう石せきとなるべき善ぜん良りやうの御み子こを生うみ得うるものなりと知しるべし。嗚あ呼あ惟かむ神かむ靈ながら幸たまち

倍へ坐ま世せ。

（昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 森良仁謹録）

第二八章 心内大蛇しんないをろち（一八五九）

ここに顯津男あきつをの神かみは、今迄いままでの退嬰たいえい的政策せいさくを採とりし弱よわき心こころを悔くひ給たまひ、心こころの駒こまを立たて直なおし、大勇猛だいゆうまうしん心を發揮はつきして、世よに憚はばからず、阿おもねらず、偽いつはらず、清きよき赤あかき正ただしき心こころのままを輝かがやかし、生言靈いくことたまの幸さちひに國魂くにたまがみを生うまむやと、再ふたび主すの神かみの祭壇さいだんに齋戒さいかい沐浴もくよくして、海河山野うみかはやまぬのくさぐさ種々うましものの美味物うましものを八足やたりの机代つくゑしろに所狹ところせき迄まで置き足たらはし、生言靈いくことたまも朗ほがらかに、太祝詞ふとのりの宣のり給たまひぬ。

掛卷かけまくも綾あやに畏かしこき、久方ひさかたの天津高日あまつたかひの宮みやに嚴いづの御柱みはしら立たて給たまひ、高天原たかあまはらに千木多加ちぎたか知しりて、彌永遠いやとこに領有うしはぎるます、天津大御祖あまつおほみおやの大神おほかみの大前おほまへに、高日たかひの宮みやの神司かむつかさ、太元もとあきつを顯津男かみの神かみは、謹つつしみ敬あやまひ天てんに踏せまり地ちに跼ぬきあしして願ねぎ白まさく。抑々そもそも此これの天界てんがいは、

あめのみちたつ 天之道立の神紫微の宮居に鎮まり在して、神々の心を治むる道を依さし給ひ、我  
はしも主の大神の神宣以て、東の宮の神司と任せられ、弱き心のたへがてに、神  
の依さしに背きつつ、高照山の麓なる此の宮居にうつろひて、神の依さしの神業  
に仕へ奉らふ折もあれ、如衣の比女を女と定め、美玉姫の命を生みて喜び勇む間  
もあらず、比女の神言は高照山の、中津瀧に忍ばひ棲める、大蛇の神にあへなく  
も玉の緒の生命を奪はれぬれば、我はしも心の穢れを悔いにつつ、己が御靈を清  
めつつ醜の曲靈を退はむと、主の大神を祈る折、天の雲路をかき分けて、いと嚴  
かに下り給ひし主の神の神宣畏み、これよりは心の駒を立て直し、百神等のささ  
やきを濱の千鳥と聞きながし、空吹く風とみなしつつ、神の依さしの神業に、身  
もたなしらに仕ふべし。仰ぎ願はくば主の大神の清き正しき言靈の、貴の力をた  
び給ひて、我神業を遺ちもなく、うま怜に委曲に遂げさせ給へ。今日の良き日の  
佳き辰に、高日の宮の神司顯津男の神謹み敬ひ祈願奉らくと白す』  
大御母の神は、神前に向ひ御歌よまし給ふ。



主スの神かみの貴うづの神みこと宣かを畏しこみて

今いまたたすかも瑞みづの御み靈たまは

主スの神かみの神みこと宣か畏しこみ吾われも亦また

瑞みづの御み靈たまの神みわざ業たす助たすけむ

吾わが言こと葉ば正ただしと思おもひ居あたりしを

今いまや悟さとりぬ偽いつはりなりしと

凡ただが神かみの心こころをもちて主スの神かみの

御み心こころ如何いかに悟さとらひ得うべきや

中なかつ津たき瀧たきの醜しこの大を蛇ろちは逃にげぬれど

なほ思おもはるる後のちのなやみを

神かみ々がみのくをらろちき心こころの固かたまりて

大を蛇ろちの神かみは生あれ出いでにけむ

水みづ清きよき中なか瀧たきの淵ふちに沈しづみたる

曲まがは吾われにもあらずやと思おもふ

澄すみきれる高たか日の宮みやに仕つかふ吾われは  
淵ふちの大蛇をろちにさも似にたるかな  
□

大物主おほものぬしの神かみは又また謠うたひ給たまふ。  
○

□ この宮みやは見る目め清すがしき中なか瀧たきの

淵ふちにも似にまして曲まがのわれをり

神業かむわざを力ちから限かぎりにさまたげし

吾われは大蛇をろちの靈魂みたまなるらし

神々かみがみの心こころのくもり晴はれぬれば

醜しこの大蛇をろちは生うまれざるべし

如衣ゆくえ比女ひめを惱なやまし奉まつりし大蛇をろちこそ

吾等われらが心こころの曲まがにぞありける

主すの神かみに言こととく由よしもなき迄までに

吾言靈は閉ざされにけり

明晴の神は又謠ひ給ふ。

思ひきや吾魂に中ツ瀧の

大蛇の深く潛み居しとは

比女神を惱ましたるも吾胸に

住む大蛇よと思へば悲しき

日に夜に比女を悲しむ心もて

心の大蛇斬りはふるべき

滔々と瀧の清水のおつる如

清しかれよと心を祈る

吾心くもりぬし事恥かしと

思へど詮なし魂洗はばや

身を責むる鬼も大蛇も他になし  
皆吾魂ゆ生れ出づるも

近見男の神は又謠ひ給ふ。

神々の言靈歌を聞きながら

吾面映ゆくなりまさりつつ

今日までの事を思へば恥かしも

面ほてりつつ言葉さへ出でず

他を悪しと思ひし事の淺ましさ

皆吾魂ゆ生み出でしものを

愛善の眞言の心照る身には

御魂さやけく四方を照さむ

照すべき貴の魂を持ち乍ら

曇くもらせ奉まつりし罪つみを悔くゆるも  
善よき事ことと思おもひひがめて日ひに月つきに  
吾わが爲なせし業わざ曲まがにぞありける  
今日けふよりは心こころの駒こまを引ひき立たてて  
愛あい善ぜん世界せかいに進すすまむと思おもふ  
』

眞ます澄すみの神かみは又また御み歌うたよませ給たまふ。

万ばん丈ぢやうの岩いは根ねにかかる清きよ瀧たきの

清きよき心こころを持もたまほしけれ

眞ま清しみ水みづの澄すみて溜たまれる深ふか淵ふちは

底そこの底そこまで澄すみきらひたり

この瀧たきとこの深ふか淵ふちは主すの神かみの

御み靈たまの凝こりて集つどへるならむか

魂たましひにひそむ大蛇をろちを言こと向むけて

輝かがやき給たまへ瑞みづの御靈みたまよ〇

ここに顯津男あきつをの神かみは、憚然ぶぜんとして謠うたひ給たまふ。

愛戀いとこやの如衣ゆくえの比女ひめを惱なやませし

大蛇をろちはくらき我魂わがたまなりけり

今日けふよりは曲まがの影かげだにあらせじと

生言靈いくことたまのひかり照てらさむ

朝夕あさゆふに神前みまへに言靈ことたま宣のりつれど

心こころの曲まがは放はなれざりしよ

この瀧たきの清きよきが如ごとく瑞御靈みづみたま

四方よもの神國かみくにうるほし奉まつらむ

國魂くにたまの神かみとなるべき御子みこ生うむと

我われは今日けふより靈魂みたま磨みがかむ  
如衣ゆくえ比女ひめみ罷まかりたるも主すの神かみの

我われを教をしゆる鞭むちなりにけり

我心わがこころ清きよく正ただしくありしならば

如衣ゆくえの比女ひめは罷まからざりしを

我心わがこころ小こさく汚きたなくもらひて

淵ふちの大蛇をろちとなりけらしな

我われは今月いまつきの御靈みたまと現あらはれて

國くにの八十國やそくに隈くまなく惠めぐまむ  
□

斯かく謠うたひ終をはり、中津瀨なかつせの瀧壺たきつぼに身みをひたし給たまひつつ、

仰あふぎ見みれば萬丈ばんぢやうの瀧たきよ伏ふして見みれば

千尋ちひろの淵ふちよわが魂たまをののく

戦<sup>をの</sup>ける心<sup>こころ</sup>のおくにあるものは

曲<sup>まが</sup>の大蛇<sup>をろち</sup>の片割<sup>かたわ</sup>れならむや

清<sup>きよ</sup>く赤<sup>あか</sup>き眞言<sup>まこと</sup>の魂<sup>たましひも</sup>持<sup>た</sup>つ身<sup>み</sup>には

千尋<sup>ちひろ</sup>の淵<sup>ふち</sup>もおどろかざるらむ<sup>〚</sup>

斯<sup>か</sup>く謠<sup>うた</sup>ひ給<sup>たま</sup>ひつつ、百神<sup>ももかみ</sup>と共に<sup>とも</sup>七日七夜<sup>ななかななよ</sup>の禊<sup>みそぎ</sup>を修<sup>しう</sup>し、大御母<sup>おほみはは</sup>の神<sup>かみ</sup>に美玉姫<sup>みたまひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>  
の養育<sup>やういく</sup>をたのみ置<sup>お</sup>きて、高照<sup>たかてる</sup>の峰<sup>みね</sup>を後<sup>あと</sup>に、神々<sup>かみがみ</sup>を率<sup>ひき</sup>ゐて東<sup>ひがし</sup>の國<sup>くに</sup>原<sup>はら</sup>目<sup>め</sup>ざしつつ、い  
そいそとして御山<sup>みやま</sup>を降<sup>くだ</sup>り給<sup>たま</sup>ふぞ畏<sup>かしこ</sup>けれ。

(昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 谷前清子謹録)

## 第二九章 無花果<sup>いちじゆく</sup> (一八六〇)

茲<sup>ここ</sup>に高日<sup>たかひ</sup>の宮<sup>みや</sup>の神司<sup>かむつかさ</sup>太元<sup>おほもと</sup>顯津男<sup>あきつを</sup>の神<sup>かみ</sup>は、主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>の嚴<sup>いづ</sup>の言靈<sup>ことたま</sup>かかぶりて猛<sup>たけ</sup>き心<sup>こころ</sup>の



駒<sup>こま</sup>立<sup>た</sup>て直<sup>なほ</sup>し、大御母<sup>おほみはは</sup>の神<sup>かみ</sup>、眼知男<sup>まなこしり</sup>の神<sup>かみ</sup>、味豊<sup>あちとよ</sup>の神<sup>かみ</sup>、輝夫<sup>てるを</sup>の神<sup>かみ</sup>を高照山<sup>たかてるやま</sup>の麓<sup>ふもと</sup>、高日<sup>たかひ</sup>の宮<sup>みや</sup>の神司<sup>かむつかさ</sup>と定め置<sup>さだ</sup>きて、大物主<sup>おほものぬし</sup>の神<sup>かみ</sup>、近見男<sup>ちかみを</sup>の神<sup>かみ</sup>、眞澄<sup>ますみ</sup>の神<sup>かみ</sup>、照男<sup>てるを</sup>の神<sup>かみ</sup>を伴<sup>ともな</sup>ひ、天<sup>あめ</sup>の白駒<sup>しろこま</sup>に跨<sup>また</sup>がり、國魂神<sup>くにたまがみ</sup>を生<sup>う</sup>まばやと、心<sup>こころ</sup>いそいそ出<sup>い</sup>で給<sup>たま</sup>ふ。

茲<sup>ここ</sup>に大御母<sup>おほみはは</sup>の神<sup>かみ</sup>は美玉姫<sup>みたまひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>を、主<sup>す</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>の御靈<sup>みたま</sup>と崇<sup>あが</sup>め奉<sup>まつ</sup>り、朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに心<sup>こころ</sup>をこめて育<sup>そだ</sup>てはぐくみ仕<sup>つか</sup>へ奉<sup>まつ</sup>り、其<sup>そ</sup>の成<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>を待<sup>ま</sup>ち給<sup>たま</sup>ひける。大御母<sup>おほみはは</sup>の神<sup>かみ</sup>は大御前<sup>おほみまへ</sup>に畏<sup>かしこ</sup>まり貴<sup>うづ</sup>の言靈<sup>ことたまとな</sup>唱<sup>な</sup>へ給<sup>たま</sup>ひて、八尋殿<sup>やひろどの</sup>の清庭<sup>すがには</sup>に降<sup>お</sup>り、玉<sup>たま</sup>の御池<sup>みいけ</sup>に楔<sup>みそぎ</sup>を修<sup>しう</sup>し給<sup>たま</sup>ひ、心<sup>こころ</sup>も清<sup>きよ</sup>く朗<sup>ほがら</sup>かに謠<sup>うた</sup>ひ給<sup>たま</sup>ふ。その御歌<sup>みうた</sup>、

久方<sup>ひさかた</sup>の空<sup>そら</sup>を仰<sup>あふ</sup>げばかぎりなく

高<sup>たか</sup>し廣<sup>ひろ</sup>しも神<sup>かみ</sup>のまにまに

限<sup>かぎ</sup>りなき廣<sup>ひろ</sup>き天地<sup>てんち</sup>に神<sup>かみ</sup>と生<sup>な</sup>りて

われは小<sup>ちひ</sup>さき事<sup>こと</sup>をおもはめ

高照<sup>たかてる</sup>の山<sup>やま</sup>はいかほど高<sup>たか</sup>くとも

天<sup>てん</sup>の高<sup>たか</sup>さに及<sup>およ</sup>ばざるべし

高照たかてるの山やまは非時ときじく雲湧くもわきて

水火すゐくわの呼吸いきの風光かぜひかるなり

ときじくに花咲はなさき實みのる高照たかてるの

山やまの姿すがたの雄々をしきろかも

屹然きつぜんと天てんに聳そびゆる高照たかてるの

山やまのいかしき心こころもたばや

瑞御靈みづみたまこれの聖地せいちを立たち出いで

いづれの國くにに神生かみうますらむ

謹つつしみて美玉みたま姫ひめの命みことを育そだてむと

朝あさな夕ゆふなをおもへば樂たのしき

瑞御靈みづみたま姫ひめの命みことをあとにして

旅たびにたたせるその雄々をしさよ

瑞御靈みづみたまいまさぬこれの大宮おほみやを

われは代かはりて朝夕あさゆふ守まもらむ

駒こま竝なめて瑞みづの御靈みたまは出いでましぬ

み空そらの月つきの冴さえ渡わたる夜よを

大前おほまへに祝詞のりとまを白まをせば清すがしけれ

主スの大おほかみ神かみにまみゆる心地こころす

國くにを生うみ神かみを生うませる神業かむわざの

貴うづのはたらきおもへば畏かしこし

われは今いま心の駒こまを立たて直なほし

瑞みづの御靈みたまの神かみをうべなふ

眼まなこ知しり男をの神かみは清庭すがにはに立たち、襖みそぎ終をはりて謠うたひ給たまふ。

玉池たまいけの清きよき鏡かがみに寫うつりたる

月つきをし見みれば岐美きみの俣しのばゆ

天あまわたる月つきを寫うつせし玉たまの池いけは

瑞みづの御靈みたまの鏡かがみなるらむ

朝夕あさゆふを仕つかへ奉まつりし瑞御靈みづみたま

今いまはいづくの果はてにますらむ

大御母神おほみははかみの功いさをを今いまぞしる

姫ひめの命みことを育はぐみましつ

みいさをも高日たかひの宮みやの神司かむつかさ

大御母おほみははの神かみに仕つかへまつらむ

大御母神おほみははかみは高日たかひの大宮おほみやの

貴うづの三柱みはしらけがさじとおもふ

嚴御靈いづみたまいづの教をしへにかたよりて

瑞みづの御靈みたまを無視なみせしを悔くゆ

今日けふよりは心こころのくもり吹ふき被はらひ

あしたゆふべを神言かみごと宣のらむ

言靈ことたまの幸さちふ神かみの國くになれば

われ一日ひとひだも怠おこたるべけむや

月つきも日ひも高照山たかてるやまの神かむなび奈備なびに

仕つかへて心こころくもらふべきやは

高照山たかてるやまに湧わき立つ紫むらさきの

雲くもこそ神かみの心こころなるらむ

朝夕あさゆふに月日つきひの光ひかりあび乍ながら

高照山たかてるやまは紫雲しうんたち立たつ

輝夫てるをの神かみは謠うたひ給たまふ。

☐ 朝夕あさゆふをみたたま輝夫てるをの神かみながら

いつか心こころのくもらひを恥はづ

瑞御靈みづみたまいまさぬ今日けふを謹つつしみて

この大宮おほみやに仕つかへ奉まつらむ

清きよきあかき眞まことの心こころをみがきつつ

仕つかへ奉まつらむ神かみのみ前まへに

一ひと日ひだに嚴いづ言こと靈たまをおこたらば

この國くに原はらはくもらひ亂みだれむ

言こと靈たまの力ちからによりて生あれし國くによ

朝あした夕ゆふべの祈いのりわすれじ

味あぢとよ豐とよの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

足あし曳びきの山やま野ぬの木この實みも味あぢとよ豐とよの

神かみのみ代よこそめでたかりける

言こと靈たまの光ひかりによりて生あれませる

天あま津つ國くになり天あま津つ神かみなり

吾われもまた主すの神かみうしはぐ高たか天あまの

アの言靈ゆ生れし神なり

天界に初めて命生れましぬ

瑞の御靈と比女神のなかに

美玉姫神の命はめづらしも

この天界に身體もたせば

想念の世界もつぎつぎ物質と

化して榮えむ言靈の幸に

天界の現象は意志想念の世界にして、愛の情動に満ちたれば、普く國土は清く  
すがしく美しく、七色の光彩四方に満ち、山は青く野は平らかに、所々に花爛漫  
と咲き匂ふ小山散在し、吹き來る風も清く、やはらかく、實に住みやすき境界な  
り。大御母の神は、眼知男の神、味豊の神を伴ひて、百花匂ふ野邊の遊びを始め  
給ひ、美玉姫の命を樂しく遊ばせ給ひぬ。美玉姫の命は其の性質伶俐温厚にして、  
艶美しく肌細やかに、あだかも鳥の玉子の如し。百神達はこの姫命を此の上なく

慈しみ且つ敬ひ奉りて、種々の花など取り御手に握らせ奉り、姫命の喜び給ふ笑顔を  
顔を見て楽しみ居りき。

味豊の神は、野邊に實れる無花果の實を、腕もたわわに筆り來りて、姫命の御前に  
前に横山の如く置き足はし、捧げ奉れば、姫の命は細き白き御手を伸ばさせ給ひ、  
その中の一つを掴みて忽ち口に入れ給ひしに、見る見る御背は長く伸びあがり、  
御身體は彌太りに太り、今までの幼かりし姫の命は俄に成人してその言靈さへも  
大人びつつ、側にある三柱の神達を驚かせ給ひしぞ不思議なれ。茲に大御母の神  
は、美玉姫の命の、見る見る成人し給ひし御姿に驚き給ひて、感嘆のあまり御歌  
詠まし給はく、

☐ 天晴々々姫の命は無花果の

味豊かさに大くなりましぬ

味豊の神のいさをに無花果の

木の實は清く生れ出でにけり



斯<sup>か</sup>くならば高<sup>たか</sup>日の宮<sup>みや</sup>の神<sup>かむつ</sup>司<sup>かさ</sup>

姫<sup>ひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>よわれはゆづらむ

主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>み著<sup>しる</sup>けし目<sup>ま</sup>のあたり

姫<sup>ひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>は生<sup>お</sup>ひ立ちませり

喜<sup>よ</sup>びのかぎりなるかも美<sup>み</sup>玉<sup>たま</sup>姫<sup>ひめ</sup>の

命<sup>みこと</sup>の斯<sup>か</sup>くまで生<sup>お</sup>ひたたすとは

味<sup>あぢ</sup>豊<sup>とよ</sup>の神<sup>かみ</sup>は喜<sup>よ</sup>びのあま<sup>り</sup>手<sup>て</sup>を拍<sup>う</sup>ち、  
足<sup>あし</sup>拍<sup>び</sup>子<sup>やうし</sup>をとり、  
花<sup>は</sup>野<sup>なの</sup>の中<sup>なか</sup>に踊<sup>をど</sup>り狂<sup>くる</sup>ひつつ謠<sup>うた</sup>

☐ 天<sup>あ</sup>晴<sup>は</sup>々<sup>れ</sup>々<sup>あ</sup>

主<sup>ス</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>ゆ生<sup>あ</sup>れませる

美<sup>み</sup>玉<sup>たま</sup>の姫<sup>ひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>はや

高<sup>たか</sup>日の宮<sup>みや</sup>は今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の日<sup>ひ</sup>を

はじめとなして彌榮に  
榮え奉らむ嬉しさに  
手の舞ひ足の踏みどさへ  
知らずに吾は踊るなり  
この神國にただ一人  
からたま持たす姫命の  
天降りまししは言靈の  
嚴の力を物質と化し  
廣き世界の神々を  
安く住はせ給はむと  
主の大神の神言もて  
生れ出で給ひし嬉しさよ  
吾は味豊神にして  
百の果物五穀

甘<sup>あま</sup>き味<sup>あぢ</sup>はひもたさむと

朝<sup>あした</sup>夕<sup>ゆふ</sup>のけぢめなく

貴<sup>うづ</sup>の忌<sup>いむ</sup>鋤<sup>すき</sup>忌<sup>いむ</sup>鋤<sup>くは</sup>に

この天<sup>てん</sup>界<sup>かい</sup>をひらきつつ

貴<sup>うづ</sup>の木<sup>こ</sup>の實<sup>み</sup>はやややに

實<sup>みの</sup>らひ満<sup>み</sup>ちて果<sup>はて</sup>もなく

百<sup>もも</sup>の神<sup>かみ</sup>達<sup>たち</sup>朝<sup>あさ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>の

御<sup>み</sup>饌<sup>け</sup>たてまつる嬉<sup>うれ</sup>しさよ

とりわけ今日<sup>けふ</sup>は姫<sup>ひめ</sup>命<sup>こと</sup>

わが生<sup>な</sup>り出<sup>い</sup>でし無<sup>い</sup>花<sup>ち</sup>果<sup>ゆく</sup>の

木<sup>こ</sup>の實<sup>み</sup>をとらせ給<sup>たま</sup>ひてゆ

にはかに身<sup>み</sup>丈<sup>たけ</sup>伸<sup>の</sup>び給<sup>たま</sup>ひ

その顔<sup>かん</sup>も大<sup>お</sup>人<sup>と</sup>びて

いよいよ宮<sup>みや</sup>の神<sup>かみ</sup>柱<sup>しら</sup>と

たたせ給はむ目出度さよ

得耐へぬ儘に手を拍ちて

吾は狂ひつ踊るなり

嗚呼惟神々々

恩頼の幸ひし

今日の花野の嬉しさよ

天の御空ゆ降ります

主の言靈に生り出でし

美玉の姫の命こそ

これの神國の柱なれ

嗚呼惟神々々

御靈幸ひましませよ

眼知男の神、御歌うたはせ給ふ。

□ おもひきや姫の命は忽ちに

無花果召して伸び立ち給へり

無花果の香具の木の實のいさをしを

われ今更にさとりけるかも

主の神の恵みの露のかたまりか

この無花果に太り給ひぬ

天高く野邊また廣し花の中に

遊ばす姫の命美し

茲に美玉姫の命は異様の光を放ちながら、  
花野の中に儼然として立ち上り給ひ、  
御歌宣らせ給はく、

□ 吾はしも月の世界ゆ生れましし

神靈なりせば生ひたち早しも

月の露あみて太りし無花果は

わが身體を生かす御饌なり

今よりは高日の宮に司とし

天津神國を安く守らむ

大御母神のいさは天渡る

月の稜威に等しかるべし

味豊の神のいさをぞ畏けれ

わがからたまを育み給へば

あら尊と眼知男の神なれば

これの清庭を見立て給ひし

大御母の神は再び謠ひ給ふ。

☐ 姫命宣らす言葉のかしこさに

嬉しき涙止めあへぬも  
嬉しさに口ごもりつつ言の葉も  
出でざるままに黙し居につつ

味豊の神はまた謠ひ給ふ。

今日よりは此の神國も安らけく  
ひらけゆかなむ命の稜威に

眼知男の神は謠ひ給ふ。

あら尊と眼知男の神吾は  
答への言葉も出でざりにけり  
いざさらば高日の宮に歸らむと

前に立たせる姫の命よ<sup>さき たた せ り め の みこと</sup>』

(昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 内崎照代謹録)

第三〇章 日向の河波(一八六一)

道の隈手もつつがなく 太元顯津男の神は<sup>みち くまで おほもとあきつを かみ</sup>

眞澄の神の空清く 東の空も明晴の<sup>ますみ かみ そらきよ あづま そら あけはる</sup>

神のいさは照男神 大物主ともるともに<sup>かみ てるをがみ おほものぬし</sup>

高照山の聖場に 別れを告げて出で給ふ<sup>たかてるやま せいぢやう わか っ たい</sup>

天津日は照る月は冴ゆ 高照山は雲表に<sup>あまつ ひ てる つき さ たかてるやま うんべう</sup>

高く紫雲をぬき出で 天國浄土のありさまを<sup>たか しうん てんごくじやうど</sup>



紫微天界の遠近に

輝きあるぞ清しけれ。

ここに顯津男の神は、五柱の神と共に高照山を西に眺めつつ、東の國を治め、  
國魂神を生まむと、心いそいそ出で給へば、日向河の流は前途に横はり、一行の  
神々は如何にして此の廣河を渡らむかと、暫し思案にくれながら、各も各もに御  
歌詠まし給ふ。

顯津男の神の御歌、

見渡せば限りしられぬ廣河の

水のおもての青みたるかも

高照の峰より落つる日向河

春をたたへて青く流るる

高照山あとふりかへり眺むれば

紫の雲尾根に湧き立つ

主スの神かみの稜威みいづも清きよく澄すみきらふ

高日たかひの宮みやを我われ出いでにけり

日向ひむかがは水み瀬なせはいかに強つよくとも

瑞みづの言靈ことたま宣のりて渡わたらむ

言靈ことたまの幸さちひ助たすくる神國みくになれば

この激流げきりうも何なんのものかは

大物主おほものぬしの神かみはまた御歌詠みうたよませ給たまふ。

天てんを摩ます高照山たかてるやまの木々きぎの露つゆ

ここに流ながれて河かはとなりぬる

日向ひむかがは水みづの勢いきほひながめつつ

瀧たきの大蛇をろちを思おもひ出いづるも

月つきも日ひも清きよく流ながるる日向河ひむかがはを

われ渡らばや言靈の舟に

あをあを  
青々と底ひもしらぬこの流

月を浮べつ日を沈めつつ

この水は四方に流れて國原の

百の草木を生かしこそすれ

瑞御靈恵みの露の集りて

この日向河は生り出でにけむ

せせらぎの音たかだかと響くなり

高照山ゆ落つるながれは

瑞御靈ここにいませば底深き

日向の河も安く渡らむ

眞澄の神はまた謠ひ給ふ。

澄みきらふ天地の中にすみすみて

流るる日向の河は清しも

わが眼路の届かぬまでに廣々と

流れはげしき日向河はも

この河の瀬々の流れは澄みきらふ

空をうつつして青みたるかも

われは今瑞の御靈に従ひて

神業の爲來りけるかも

神業の道に横ふ日向河

深きは神の心なるらむ

高照の山の靈氣の滴るか

この河水は眞澄みたるかも

明晴の神は御歌詠まし給ふ。

㊦ 滔々たうたうと流ながる水みづのはてしなきは

神かみの稜威みいづの現あらはれなるらむ

渡わたらはむ橋はしさへもなきこの河かはを

見みつつ岸邊きしべに吾われは立たち居をり

久方ひさかたの天津神あまつかみたち聞召きこしめし

わが通とほるべく河水かはみづ干ほさせよ

如何いかにして吾われはこの河渡かはわたらむと

心細こころほそくもなりにけらしな

月つきも日ひも波間なみまに浮うかぶこの河かはを

渡わたらむ術すべのなきぞ悔くやしき

國魂くにたまの神かみを生うませる神業かむわざぞ

心こころしあらば河かはよ退しりぞけ

清きよきあかき正ただしき眞まことの言靈ことたまも

この河神かはかみは聞召きこしめささずや ㊦

近見男の神は御歌詠ませ給ふ。

岸を洗ふ水の流れは高くとも

神の恵みに渡らむとぞ思ふ

よしやよし水の藻屑と消ゆるとも

何か恐れむ神の身われは

國魂の神生みまする旅立に

さやる日向の河ぞうたてき

今しばし生言靈を宣り上げて

河守る神を言向和さむ

久方の主の大神の神言もて

國造ります瑞御靈ぞや

瑞御靈めぐみの露の集りて

日向の河の生れしを知らずや

河守かはもりの神かみよ日向ひむかの河水かはみづよ  
心こころしあれば吾言わがことたま靈たまを聽きけ

照男てるをの神かみは謠うたひ給たまふ。

☐ 月つきも日ひも照男てるをの神かみは此處ここにあり

河守かはもりの神かみにもものを申まをさむ

久方ひさかたの天あめの高日たかひの宮司みやつかさ

みゆきの道みちよ妨さまたげするな

天あめは高たかくまた廣ひろくして限かぎりなし

日向ひむかの河かはは帶おびより狭せましも

この狭せまき河かはの流ながれを行ゆきなやむ

われ神かみながら恥はづかしみ思おもふ

廣ひろくとも天地てんちの廣ひろさに比くらぶれば

ものの數かずかは日向ひむかの流ながれは』

六柱むはしらの神かみがみ々は、日向河ひむかがはの岸邊きしへに立たち、御歌みうたうたひながら、茫然ぼうぜんとして行ゆき惱なやま  
せ給たまふ折をりしもあれ、日向河ひむかがはの水瀨みなせを左右さいうに割わりて、白馬はくばに跨またがり現あらはれ給たまふ女神めがみあり。  
後方しりへに六頭ろくとうの駒こまを従したがへながら、波なみを押し分わけ此方こなたに向むかつて進すすみ來くるあり。顯津あきつ  
男をの神かみはこの體ていを見みて喜よろこばせ給たまひ、

□ あな尊瑞たふとみづの言靈現ことたまあらはれて

河守かはもりの神かみ生あれましにけり

河守かはもりの神かみの勳いさをを今いまぞ知しる

ひかせる駒こまの迅はやさ清きよさよ』

飛とび下おり、六柱むはしらの神かみの前まへに敬意けいを表あらわしながら、  
かく謠うたひ給たまふ折をりしも、河守かはもりの神かみは忽たちまち岸邊きしへに、  
駒諸こま共もろとも驅かけ上のぼり給たまひ、ひらりと



主スの神かみの靈たまに生なり出いで給たまひたる

瑞みづの御靈みたまにもものを申まをさむ

われこそは日向ひむかの河かはを朝夕あさゆふに

守まもり仕つかふる比ひめがみ女神がみなるぞや

瑞みづ御靈みたま國くに魂たまがみ神がみを生うまさむと

今け日の旅た立ち待まちわびにつつ

この駒こまに早はやく召めしませ日向ひむかがは河かはの

流ながれも暫しばしせきとめて見みむ』

ここに顯あきつ津男をの神かみは感謝かんしゃしながら、

あありがたし忝かたじけなしと申まをすより

吾わが言ことの葉はは出いでざりにけり

河守かはもりの神かみのいさをの尊たふとさに

わがたましひは甦りつつ  
白銀の春駒の背に跨りて  
われは越えなむ日向の流を

大物主の神は謠ひ給ふ。

河守の神のいさをぞ尊けれ  
六つの駒までひかせ給ひつ

河守の神。

この駒は御供の神に参らする  
天の白駒安く召しませ

眞澄ますみの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

白駒しろこまの嘶いななく聲こゑを聞ききしより

日向ひむかの河かはの流ながれ割われつつ

河底かはそこゆ駒こまひきつれて生あれませる

河守かはもりの神かみは貴うづの比女ひめがみ神かみ

近見ちかみ男をの神かみはまた謠うたひ給たまふ。

河守かはもりの比女ひめがみ神かみたちの眞心まごころに

報むくいむ術すべもわれなかりける

河守かはもりの比女ひめのみことよ瑞靈ずゐれいを

守まもりて彼岸ひがんに送おくりたまはれ

明晴あけはるの神かみは御歌みうた詠よまし給たまふ。

□ なやみてし心こころも今いまや明晴あけはるの

神かみの嬉うれしさたとへむものなし

河守かはもり比ひ女神かみの神言みことのはからひに

この速河はやかはを安やすく渡わたらむ□

照男てるをの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

□ 大空おほぞらに月日つきひ照男てるをの神かみながら

この河かはのみはなやみたりける

主スの神かみに瑞みづの言靈ことたま宣のり上あげて

河守かはもり神かみの出いでまし待まちしよ□

と何れの神も、感謝の意を表し給ふ。河守の神はにこやかに、御歌もて答へ給ふ。

われこそは瑞の御靈の御心の

水火より生れし河守比女よ

この河を岐美渡らすと聞きしより

駒を並べて待ち居たりける

この駒は駒野ケ原にわが飼ひし

萬里の駒よ足元迅し

かく謠ひ給ひ、眞つ先に乗り來し駒に再び跨り給へば、顯津男の神を初めとし、  
五柱の神はつぎつぎ馬背に跨り、せきとめられし廣河を、駒の蹄の音も勇ましく、  
一文字に彼方の岸に着き給ひける。

ここに河守比女の神は、馬上より一行の神を見返りながら、

日向河水あせにつつ瑞御靈

渡しまつりぬいざ河満てよ

と、宣り給ふや、暫くせきとめられし河水は、一度にどつと兩岸を浸しつつ、渦  
巻き立ちて流るさま、實に凄じく見えにける。河守の神は馬上より、遙か彼方  
の森林を指ざし乍ら、

見の限り廣き大野の末にして

わが住む館はかすみけらしな

いざさらば瑞の御靈よ百神よ

わが家に來りて暫し休ませ

言靈の神の稜威に照らされて

われは河水しばしとどめし

と御歌うたひつつ先に立たせ、  
上豊かに謠ひ給ふ。

遙か彼方の森蔭さして急ぎ給ふ。

大物主の神は馬

高日の宮を立ち出でて

大山小山打ち渡り

小川の數々うち越えて

ここにいよいよ日向河

岸邊につけば滔々と

水瀨はげしく底深く

渡らむよしも無かりしが

瑞の御靈をはじめとし

神々ともに岸に立ち

河の流れを眺めつつ

生言靈を宣りつれど

何なにのしるしもあら波なみの  
伊いたけ猛くるり狂くるふばかりなり  
折をりしもあれや河底かはそこを  
左さ右いうにわけて生あれませる  
河守かはもり比女ひめの神司かむつかさ  
白馬はくばに跨またがり悠々いういうと  
六むつの白駒しろこま引きつれて  
此方こなたの岸きしにのぼりまし  
瑞みづの御靈みたまをはじめとし  
われら一行いっかう白駒しろこまを  
與あたへ給たまひし嬉うれしさよ  
われら馬背ばはいに跨またがりて  
河守かはもり比女ひめの後うしろより  
暫しばしあせたる河底かはそこを



足を速めて飛ばせつつ  
漸く岸に着きぬれば  
日向の河の河水は  
一度にどつと荒波を  
立てつつ岸を洗ひ行く  
この光景の凄まじさ  
瀧の大蛇のそれよりも  
一人強く感じけり  
彼方にかすむ森林は  
河守比女の神館  
何はともあれ神界の  
深き経綸を諾ひつ  
瑞の御霊に従ひて  
われは楽しく進むなり

ああ惟神々々  
かむながらかむながら

御靈幸倍坐世よ  
みたまさちはへましませ  
㊦

ここに瑞の御靈顯津男の神の一行六柱は、漸く河守比女の神館に駒を下り、奥庭深く入り給ふ。ああ惟神靈幸倍坐世。

(昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 白石恵子謹録)

### 第三章 夕暮の館(一八六二)

太元顯津男の神は河守比女の神の心厚き計らひにて、六頭の白き駿馬を與へられ、さしもに廣き日向河の激流を彼方の岸にやすやす渡りをへ、河守比女の神に導かれ、廣き大野の末に遠く霞める河守比女の神館に漸くつきて、駒をひらりと飛び下りつつ奥庭深く進み給ふ。

この館は四方に青芝垣を廻らし、常磐木の松は蜿蜒として、梢を龍蛇の如く庭にたれ、楠の大樹は晝も猶小暗きまでに天を封じて、庭のあちこちに聳り立ち、折から吹き来る科戸の風に泰平の春をうたふ、梢のそよぎも床しく見えける。ここに顯津男の神は、あまり館の清しさにやや驚き給ひつつ御歌よませ給ふ。

☞ 常磐木の松の青垣めぐらせる

これ館は何か床しも

あちこちに空を封じて聳りたつ

楠の木群の葉末光れる

百鳥は楠の梢に巣ぐひつつ

言靈御歌うたひあるかも

庭の面に苔青々と蒸しにつつ

露を宿せるさま素晴らしき

思ひきや大野の末にかくの如

清すがしき館たちのいみじくたつとは  
河守かはもり比女ひめ神かみの館やかたと思おもへども  
床ゆかしき人ひとの籠こもらふがに見みゆ  
『

大物主おほものぬしの神かみはうたひ給たまふ。

『 廣ひろ々と果はてしも知らぬ青垣あそがきの

中なかに建たたせるこの館やかたはも

空そら清きよく土つちまた清きよき野のの果はてに

澄すみきらひたるこれの館やかたよ

百鳥ももどりは時ときじく春はるをうたひつつ

神代みよの前ゆくて途ことほを壽ことほぐがに思おもふ

ちよちよと囀さへづる小鳥ことりの聲こゑ冴さえて

楠くすの木群こむれはそよぎつ光ひかりつ  
』

眞澄ますみの神かみはうたひ給たまふ。

☐ われは今いま此處ここに來きたりて村肝むらぎもの

心こころ眞澄ますみの神かみとなりぬる

庭にはの面もに白砂しらすな敷しきて水みづを打うち

筭目はうきめ正ただしき館やかた清すがしも

純白じゆんぱくの砂すなを敷しきたる清庭すがにはに

白馬はくばの嘶いななき聞きくは清すがしも

日向ひむか河水かは瀨みなせをわけて現あれましし

比女ひめ神がみも駒こまも瑞みづの御靈みたまか

近見ちかみ男をの神かみは又またうたひ給たまふ。

☐ 天國てんごくも早はや近見ちかみ男をの神かみわれは

岐美きみにしたが従したがひすが清所すがとにき來きつるも

久方ひさかたのたかひ高日たかひのみや宮みやにくら比くらぶべべき

このすがには清庭すがにははみづみづしもよ

清庭すがにはのなもなかにわ湧わけるま眞清水ましみづは

月日つきひをうつ寫うつすかがみ鏡かがみなるらむ

眞清水ましみづをたたへしいけ池いけのそこ底そこ照てりて

眞鯉まごひ緋鯉ひごひのあそ遊あそぶたち館たちはや

照男てるをのかみ神かみはまた又またうたたひ給たまふ。

㊦ 瑞御靈神みづみたまかみのみとも御供みともにつか仕つかへつつ

廣河ひろかは渡わたりきここにき來きつるも

吹ふくかぜ風かぜにまつ松まつのこすゑ梢こすゑはそよぎぎつつ

春はるのか香か散ちらちすかくは芳かくはしはきたち館たちよ

おほそら  
大空を封じて立てる楠の木くすの

この太幹ふとみきの世よに珍めづしらしも

この楠くすの太ふとりしを見てこの館たちの

古ふるきを思おもふ神かみの館たちかも

何なに神がみのおはしますかは知らねども

知らしず知らしずに謹つつしみのわく

この館たちに住すませる河守かはもり比女ひめ神がみは

楠くすの精せいよりあれましにけむ〇

かく謠うたひ給たまふ折をりしも、河守かはもり比女ひめの神かみは再ふたび表おもてに現あられ來きたり、

㊦  
掛卷かけまくも綾あやに畏かしこき瑞御靈みづみたま

とく吾館わがたちに休やすませ給たまへ

この館たちは外そとはすぶすぶ中なか見みれば

ほらほら廣き住居なるぞや

六柱の神の住居に叶ひたる

わが館永く留まりませよ

顯津男の神はうたひ給ふ。

比女神の厚き心にほだされて

神生みの旅を立寄りにけり

いざさらば比女の言葉に従ひて

御殿を深く進み入るべし

大物主の神の神言よ比女神の

心そむかず早や入りませよ

大空も眞澄の神よわれと共に

奥に進まむこれの館を



近見男の神も諸共進みませ

これの館はほらほら廣しも

常磐木の梢の露も照男神

われに従ひとく進みませ

かく謠ひて、顯津男の神は長き廊下を傳ひながら、かけ離れたる清しき館に進み入り給ふ。五柱の神は、この館の侍女の神に導かれて別殿に息を休め給ふ。

ここに河守比女の神は顯津男の神を正座に直し、満面に笑みをたたへ給ひて、御歌詠ませ給ふ。

久方の天の高日の大宮ゆ

下り給ひし岐美ぞ尊き

天地の永き月日を待ちわびし

比女神ありと岐美は知らずや

皇神すめかみの深ふかき經綸しぐみにこの館たちは

建たてられにける吾家わがやにあらねど

この館たちの主ぬしは正まさしく世司よつかさの

比女神ひめがみいます清所すがとなるぞや  
』

顯津男あきつをの神かみはこの御歌みうたに驚おどろき給たまひ、

世司よつかさの比女ひめはわが妻つま何故なにゆゑに

これの館やかたにひそみゐますか

八十やそ比女ひめのひと一ひとつ柱はしらと主すの神かみの

給たまひし比女ひめよ疾とく出いでまさめ  
』

かく歌うたひ給たまへば、次の間つぎより比女神ひめがみの御歌みうた清すがしく聞きえ來きたる。その御歌みうた、

岐美待ちてけながくなりぬ吾は今

花の蕾の開かむとすも

御顔もまだしら梅の花なれば

早く手折らせ比古遅の神よ

主の神の神言畏み今日までも

岐美を待ちにし心の苦しき

と謠ひ終り、しとやかに此の間に現れ給ふ女神は、艶麗譬ふるに物無く、宛然梅

花の露に綻ぶ如き容姿なりける。

顯津男の神は今迄の退嬰心を放棄し比女神の前に近づき寄り、その手を固く握りて、二度三度左り右りにさゆらせ給へば、世司比女の神はパツと面に赤き血潮を漲らせ、稍俯きておはしける。

ここに河守比女の神は、

☐ 二柱みあひますなるこの蓆むしろ

われはとくとく退きまつらむしりぞ

主の神の依さし給ひし神業よス

ためらひ給ふな神のまにまに☐

と謠ひつつ、廊下を傳ひて五柱の神の休らへる居間へと退き給ふ。

あとに二柱の神は、互に言靈の水火を凝り固め、左り右りの神業を行ひ給へば、  
忽ち、御腹ふくらみて呼吸も苦しげになり給ひけるぞ目出たけれ。

これより顯津男の神は御子の生れますまで比女に止められて、ここに國津神を  
招き、百の教を垂れ給ひける。

五柱の神はこのさまを垣間見ながら、満面に笑みを湛へ、天を拜し、地に伏し、  
歡び給ひて先づ大物主の神は御歌うたひ給ふ。

☐ 主の神の恵の露の固まりて

瑞みづの御み靈たまの水い火きとなりぬる  
世よつ司かさの神かみの御み水い火きは凝こり凝こりて

貴うづの神かみの子こ宿やどし給たまはむ

ああら尊たふとこれこれの館やかたに世よつ司かさの

比ひ女め神がみますとは知しらざりにけり  
』

眞ます澄みの神かみはうたひ給たまふ。

此こ處こに來きて神かみの經し綸ぐみを悟さとりけり

八や十そ比ひ女めの神がみの忍しのびます館たち

八や十そ比ひ女めの中なかの一ひとつとあれませる

世よつ司かさ比ひ女めは細くは女しめなるも  
』

近ち見かみ男をの神かみはうたひ給たまふ。

比女神の貴の姿は見るからに

心清しくなりにけらしな

瑞御靈これの細女賢女を

御樋代として御子を生まさむ

生れませる御子は必ず國魂の

神にしあれば雄々しくあらむ

明晴の神はうたひ給ふ。

天も地も茲に漸くあけはるの

神の神言も壽ぎまつらむ

今となり主の大神の御心を

たしに悟りぬこの館に来て

こんもりと青芝垣をめぐらせる

これの館は婚ぎによろしも  
ふたはしらあめ  
二柱天の御柱めぐりあひ  
ウとアの言靈ひらき給はむ  
ことたま

照男の神は又うたひ給ふ。  
てるを  
かみ  
また  
たま

久方の空に月日も照男神  
ひさかた  
そら  
つきひ  
てるをがみ

今日は御供の神と仕へつ  
けふ  
みとも  
かみ  
つか

常磐木の松の梢の色深く  
ときはぎ  
まつ  
こずゑ  
いろふか

千代萬代を祈りこそすれ  
ちよ  
よろつよ  
いの

常磐木の松葉は枯れて落つるとも  
ときはぎ  
まつば  
か  
お

雙葉は必ず離れぬものを  
もろは  
かなら  
はな

何時までもこれの館に留りて  
いつ  
やかた  
とどま

御子の数々生ませと祈る  
みこ  
かずかず  
う  
いの

わが祈る生言靈を主の神よ

うまらにつばらに聞召しませ

斯く五柱の神々は今日のみあひを祝しつつ、香具の木の實を机代に置き足らはして、語りあひつつ食ませ給ふ。

折しもあれ、高照山の山頂を明るく染めながら、圓満清朗の月は、めでたきこれの館をのぞかせ給ひぬ。

（昭和八・一〇・一七 舊八・二八 於水明閣 林彌生謹録）

第三二章 玉泉の月（一八六三）

日向の河の向岸

東南方に開けたる



大平原の中心に

廣くかまへし神館

玉泉郷に導かれ

太元顯津男の神は

大物主神眞澄神

近見男の神照男神

久しき思ひも明晴の

神を伴ひやうやくに

河守比女に導かれ

これの館に出でたまひ

珍の景色にみとれつつ

館の中に入りませば

八十比女神の石柱

世司比女に廻り逢ひ

初めて見合す顔と顔

互に面はほてりつつ

瑞の言靈のり交し

神の依さしの神業に

心を浄め身を清め

慎み畏み仕へます

神業ぞ實にも尊けれ

此平原の一带を

東雲郷と稱へつつ

世司比女と水火合せ

國魂神を生ませつつ

鎮まり居ます大神業

うま怜に委曲に述べたつる

嗚呼惟神々々

主スの大神おほかみの御守みまもりに  
古ふるき神代かみよの物語ものがたり

漏もれなく遺おちなく彌いや廣ひろに  
示しめさせたまへと瑞ずゐ月げつが

天恩てんおん郷きやうの東ひがしなる  
水明すゐめい閣かくに端坐たんざして

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる  
嗚呼あ惟あ神かむ々な々が

靈幸みたまさち倍はおはしませ。

茲こゝに顯あきつ津男つをの神かみは世司よつかさ比女ひめの神かみと共ともに、  
常とき磐は木ぎ茂しげる玉泉ぎよくせん郷きやうの廣ひろき庭園ていゑんを逍遙せうえうし  
たまひつつ、東南隅とうなんぐうに立たてられし三層樓さんそうろうの高殿たかどのに、  
靜しづ々しづ登のぼりて四方よもの國形くにがた覽みはせ  
御歌みうた詠よませ給たまふ。

目路めぢのかぎりこれの大野おほのは紫むらさの

瑞氣ずゐ漂きたふ東雲しのめの國くによ

此國このくには土地とち肥こえたれば五穀たなつもの

ゆたに稔みのらむ美うしの國くに

高照たかてるの山やまに湧わき立たつ紫むらさきの

雲くもをし見みればわが魂たまさか榮さかゆも

見みはるかす此この國くに原はらは東しの雲のめの

御空みそらにも似にて清すがしかりけり

國くに造つくり神かみを生うまむと立たち出いでし

我われはうれしも清すが所とを得えたり

西南せいなんの空そらに聳そびゆる高照たかてるの

山やまにかかれる晝ひる月の光かけ

天渡あまわたる月つきは西にしより東ひむがしの

空そらに進すすます神代かみよなりけり

我われも亦また月つきの御靈みたまと現あらはれて

國くに拓ひらかむと東ひがしせしかも

天津あまつ日はこれの館やかたを光てらしつつ

御空みそらの月つきは世よを守まもります

主スの神かみの言こと靈たまきよ清きよく凝こり凝こりて

空そらに月つき日は現あれましにける

わが靈みたま世よつ司つかさ比ひ女めと水い火き合あせ

いよいよ月つきは満みたむとするも  
』

世よつ司つかさ比ひ女めの神かみは欣きん然ぜんとして御み歌うた詠うたはせ給たまふ。

主スの神かみの神みこと言ことかしこみ此この館たちに

けながく待まちし女めの子こよ吾われは

八や十そ日か日はあれども今け日ふの佳よ日きこそ

天あめ地つち開ひらくる喜よろこびにみつ

淡あは雪ゆきの若わかやる胸むねをそだだきて

岐き美みと寢いねなむ夜よの毎ごと々ごとを

此この館たちは天あめの浮うき橋はし空そら高たかく

神かみの築きづきし天あめの御柱みはしらよ

東南とうなんに果はてなく廣ひろく開ひらけたる

この東雲しののめの國くにはさやけし

永とこ久とはにこれの館やかたに鎮しづまりて

國魂くにたまがみ神かみを生うませ給たまへよ

見みはるかす大野おほのの果はてに膨ふくれ膨ふくれ

擴ひろがる常磐ときはの森もりの清すがしも

目路めぢとほ遠とほく限かぎりもしらぬ國原くにはらの

光ひかりとなりて生あれし岐美きみはも

一ひと夜よの左ひだり右みぎりの契ちぎりにて

御子みこはわが身みに宿やどらせ給たまへり

此この上うへは赤あかき心こころを岐美きみの邊へに

捧ささげて朝あさ夕ゆふ仕つかへまつらむ

顯津男の神は御歌もて答へ給ふ。

久方の月の恵の露うけて

早や孕すかいとこやの比女

栲綱の白きただむき淡雪の

若やる胸を抱きてしはや

股長に寝ねし一夜の夢さめて

今比女神とゐ向ひ立つも

東雲の神の國こそ目出たけれ

彌長々に榮ゆる常磐木

常磐木の松と樟との生ひ茂る

みくにを彩る百花千花よ

白梅は非時香り無花果は

永久に實りて美し國原

高照たかてるの山やまの縁みどりにおくられて

わが東雲しののめの公きみに逢あふかな

浮橋うきはしに公きみと立たたして見みはるかす

この東雲しののめの國くには果はてなき

晝夜ひるよるを慎つつしみ仕つかへて主すの神かみの

御靈みたまを守まもれ御子みこ生まるまで

世司よつか比女さひめの神かみは謠うたひ給たまふ。

主すの神かみの御靈みたまを宿やどせし岐美きみこそは

永久とほにましませよこれの館やかたに

久方ひさかたの天あめの浮橋うきはし高殿たかどのに

岐美きみと吾われとは國形くにがた見るも

村肝むらきもの心こころ清きよめて國形くにがたを

見れば扇とひらきたるかも

日向河東北に流れ東雲の

國は東南に果てなく廣し

西南に高照山は聳え立ち

日向の河は東北をかぎる

濠々と此國原は湯氣立ちて

永久に生きたり勇ましの國よ

いざさらば比古遅の神よ浮橋を

下りたまへよ夕近めば

と先に立ちて、三層樓の高殿を下りつつ、二神は再び庭の清所に出で給ひ、玉泉の傍に立ちて、稍しばし安らひ給ふ。玉泉の清泉は女男二柱の御姿を清くすがしく其儘に寫して、鏡の如く澄みきらふ。男神は、夕暮れこの清泉に圓満清朗の月の御影浮べるを覽はして謠ひ給ふ。



久方ひさかたの御空みそらの月つきも此水このみづに

寫うつりて清すがしく輝かがやきいますも

大空おほぞらをここに寫うつして月夜つきよ見みは

惠めぐみの露つゆを湛たたへたまふか

仰あふぎ見みる月つきにあれども今いまを見みる

月つきは眼ま下したに輝かがやきたまふ

久方ひさかたの月つきの惠めぐみの露つゆこそは

汝なれが御腹みはらに宿やどりたまひぬ

月つき満みちてあれ出いでし御子みこの顔かんばんせは

これこの鏡かがみに寫うつる月つきはや

いとこやの妹いもの御姿みすがた其そのままに

泉いづみの底そこに立たつが清すがしも

世司よつかさ比女ひめの神かみは謠うたひ給たまふ。

水底も天津御空の光ありて

月日渡らふ玉泉かも

清々し岐美の姿の頭邊に

月は笑まひてかからせたまふ

仰ぎ見つつむきて見つつ大空の

月は清しも岐美と吾に似て

天も地も一つになりて月の露

ここに集めし玉泉かな

玉泉に清き姿を寫しつつ

玉の神の子宿らせまたへり

高照のみ山のごとく嚴めしく

日向の流れの清しき岐美はも

斯く二神は玉泉の兩側に立ちて、

御子の宿らせ給ひし嬉しさを祝ぎ給ふ折もあ

れ、大物主の神は庭の眞砂を靜に囁かせながら進み來り、  
恭々しく聲朗かに謠ひ  
給ふ。

玉泉に立たせる神は月と月

天と地との御姿なるも

久方の御空の月を宿したる

これの泉は世司比女よ

常磐木の梢うつして玉泉

かからす月はさやかなりけり

天渡る月も泉に下りまし

露を宿せる目出度き館はも

高照山高日の宮を立ち出で

玉の泉の月を見るかな

二柱ここに鎮まりましまして

御子みこをうませよ星ほしの如ごとくに

大空おほぞらの星ほしも下くだりて玉泉ぎよくせんに

影漂かげただよはつきせ月つきをも守らせり

吾われこそはおほものぬし大物主かむつかさの神司

この神國かみくにをと永久まもに守らむ

比古神ひこがみの御楯みたてとなりて此國このくにに

永久とに仕つかへむ大物主おほものぬし吾われは

顯津男あきつをの神かみは謠うたひ給たまふ。

𠬪 畏かしこしや大物主おほものぬしの神宣みことり

我われにかなへり魂たまに響ひびけり

神生かみうみの業わざを遂とげなば東雲しののめの

國くには榮さかえむ豊榮とよさかのぼりに

あまつひの豊榮のぼる東雲の  
天津日の國はさやけし常春の國よ  
常春の國の司とまけられて  
ここに下らす大物主なれ  
』

おほものぬし  
大物主は謠ひ給ふ。

御子生みの神業委曲に終へましし  
神の御後をわれは守らむ  
』

よつかさひめの神は謠ひ給ふ。

永久に月の恵の露あびて  
御腹の御子を育みまつらむ  
』

かく各も各も玉泉の傍に立ちて述懐歌を謠ひ終り、静々と奥まりたる御殿に入らせ給ひぬ。

(昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 加藤明子謹録)

### 第三三章 四馬の遠乗(一八六四)

茲に大物主の神は顯津男の神の御側近く仕へ、玉泉郷に留り給ひ、近見男の神、眞澄の神、照男の神、明晴の神は各も各も東雲國の東西南北を受持ち、國造りの神業に仕へ給ひぬ。

顯津男の神は五柱の神を御側近く招きて依さし給はく、

大物主神は館に留りて

わが神業を補ひ奉らへ

明晴あけはるの神かみは東ひがしに出いでまして

神かみの御子みこ等を導みちびき給たまへ

照男てるをの神かみは西にしの國くにをば經廻へめぐりて

神かみを生いかせよ國くにを照てらせよ

北きたの國くにを拓ひらかせ給たまへ天あめも地つちも

眞澄ますみの神かみの貴うづの功績いさをに

高照たかてるの山やまの姿すがたも明あきらけく

近見ちかみ男をの神かみは南方みなみを守まもらへ

詠よみ給たまふ。

茲ここに顯津男あきつをの神かみの神言みこと畏かしこみて、

五柱いつはしらの神かみは各々おのおの依よさしの方かたに向むかはむとして御歌みうた

大物主神おほものぬしかみの神言みことは比古神ひこがみの

神言みことかしくこみ近ちかく仕つかへむ

美<sup>うま</sup>し御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>生<sup>あ</sup>れ<sup>ま</sup>す迄<sup>まで</sup>は動<sup>うご</sup>かじと

こころ定<sup>さだ</sup>めし大物主<sup>おほものぬし</sup>よ

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>月<sup>つき</sup>の満<sup>みち</sup>干<sup>ひ</sup>はありとても

吾<sup>われ</sup>は變<sup>かは</sup>らじ道<sup>みち</sup>に仕<sup>つか</sup>へて

東<sup>しの</sup>雲<sup>のめ</sup>の國<sup>くに</sup>は爽<sup>さや</sup>けし吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かせ</sup>も

やはく清<sup>すが</sup>しく木<sup>こ</sup>の實<sup>み</sup>はみのる

國<sup>く</sup>原<sup>には</sup>に生<sup>お</sup>ひ立<sup>た</sup>つ大物主<sup>おほものぬし</sup>の神<sup>かみ</sup>

榮<sup>さか</sup>え守<sup>まも</sup>らむ幾<sup>いく</sup>世<sup>よ</sup>の末<sup>すゑ</sup>まで

と大物主<sup>おほものぬし</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌<sup>みうた</sup>もて答<sup>いら</sup>へ給<sup>たま</sup>ひぬ。

茲<sup>ここ</sup>に明晴<sup>あけはる</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌<sup>みうた</sup>詠<sup>よ</sup>まし給<sup>たま</sup>ふ。

東<sup>ひむがし</sup>の御空<sup>みそら</sup>はここに明晴<sup>あけはる</sup>の

神<sup>かみ</sup>は進<sup>すす</sup>みて國<sup>くに</sup>造<sup>つく</sup>りせむ



東雲しのめの神かみの御國みくにの東ひむがしを

拓ひらけと宣のりし畏かしこき神かみはや

いざさらば東ひがしをさして上のぼるべし

吾わが行く旅たびに神かみの幸さちあれ

比古ひこ神がみの依よさしに報むくい奉まつらむと

われは朝夕あさゆふこころ盡つくさむ

玉泉たまいづみこれの館やかたにかがやける

瑞みづの御靈みたまよ安やすくましませ

高照たかてるの山やまは雲井くもゐに隠かくるべし

遠とほく東ひがしの國くにに向むかへば

日向ひむかが河は清はきよき流ながれを傳つたひつつ

吾われは進すすまむ東ひがしの國くにへ

河守かはもり比女ひめ賜たまひし白しろき駿馬はやこまに

跨またがり行ゆかむ旅路たびぢはるけく

顯津男の神は謠ひ給ふ。

☪ 明晴の神の雄々しき言の葉よ

主の大神も勇み給はむ

駿馬の背に跨り出で立たす

明晴の神の姿雄々しも

世司比女の神は謠ひ給ふ。

☪ 玉泉館を後に駒の背に

鞭ち給ふ神ぞ雄々しき

明晴の神はいそいそ駿馬に

跨り荒野を鞭たすらむ

大物主の神は、明晴の神の出立ち給ふ御姿を遙に打眺めつつ謠ひ給ふ。

駿馬の足竝速し明晴の

神の御姿野邊に霞みつ

駿馬に鞭たしつ出でましぬ

すがた勇し明晴の神

明晴の神の東に廻りませば

天地ますます晴れ渡るべし

比古神の神言畏み出で立たす

神の心に吾涙湧きぬ

勇しく出で立ち給ふ御姿に

稱への言葉吾無かりける

近見男の神は依さしの儘に南の國を拓かむとして、白馬に跨り聲勇しく謠ひ給

☐ 顯津男の神比女神よいざさらば

吾は南に鹿島立ちせむ

比古神の依さしの言葉片時も

吾は忘れず國を拓かむ

春風に送られながら南の

國に向はむ吾ぞ勇し

玉泉寫らす月も今日よりは

拜むよしなし名残惜しくも

月と月見逢ひて御子を孕ませる

これの館を吾は去り行く

二柱初め大物主の神

河守比女よ健かに坐せ

南みなみの國くに原はら遠とほくさかるとも

岐き美みは忘わすれじ束つかの閒まさへも

いざさらば大物主おほものぬしよ朝夕あさゆふを

仕つかへて御子みこを育はぐみ給たまへ

河守かはもり比ひ女神めがみの神言みことよ世司よつかさの

比ひ女神めがみ近ちかく守まもらせ給たまへ

と御謠みうた詠よましつつ白馬はくばの背せにひらりと飛とび乗のり、蹄ひづめの音おともカツカツと鬣たてがみを春風はるかぜに  
靡なびかせ給たまふ。其その雄を々をしき御姿みすがたを見送みおくり見送みおくりつつ、顯津男あきつをの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

勇いさましき出立いでたちなるかも近見男ちかみをの

駒こまにむちうち立たたす國原くにはら

南みなみの國くにに渡わたらひ神々かみがみを

導みちびき給たまふ神業みわざ俣しのばゆ

近見男の貴の言靈鳴り鳴りて  
總てのものは甦るらむ

大物主の神も謠ひ給ふ。

近見男の神は南に出でましぬ

白銀の駒に鞭たせつつ

白梅の非時香る大野原

鞭たすかも近見男の神は

世司比女の神は謠ひ給ふ。

勇しき近見男の神の姿かな

駿馬のかげ見えなくなりぬ

大野原紫にかすみ白梅は

四方に香りて迎へ奉らむ

勇しく雄々しくませる近見男の

神の功績を今よりぞ知る

この館に比古遅の神と籠り居て

神業のなるを祈り奉らむ

河守比女の神は謠ひ給ふ。

日向河限りに此の國原を

今日まで吾は守りこしはや

近見男の神は南を拓かすと

聞けば嬉しも吾魂安し

西東南北なる國原も

安く拓けむ四柱の神に  
今日よりは四柱の神を力とし  
心安けく館に仕へむ

茲に照男の神は依さしの儘に出で立たむとして白馬に跨り、  
庭上に立ちて別れの御歌詠まし給ふ。

月讀の御靈と生れます比古遅神に

いざや別れむ安くまませ

高照の山の麓の國々を

拓かむとして吾は行くなり

玉泉いや永久に清らけく

澄みてまませ二柱の神

大物主神の神言よいざさらば



幸さきくあれませ館やかたに仕つかへて

世よつかさ司ひめがみこころやすの比ひめがみこころやす女神みこころやす心安やすらけく

御みこ子う生うみましいやすかて彌いやすか榮えませ

河かは守もり比ひ女めの神かみの賜たまひし駿はやこま馬まに

われ跨またがりて西にしに向むかはむ

月つきも日ひも朝あさ夕ゆふ浮うかぶ玉たま泉いづみ

今けふ日ふを名なごり残りと吾われは行ゆくなり〇

斯かく謠うたひ終をはるや、ひらりと馬ば背はいに跨またがり二ふたつ三みつ鞭むちを加くはへて、トウトウトと高たか照てる山やま  
の方ほう向かうさして驅かけ出だし給たまふ。

顯あきつ津つ男をの神かみは、照てる男をの神かみの勇いさましき姿すがたを遙はるかに見み送おくりながら、

駿はやこま馬あしの足あしはやみかも大おほ野の原はら

靄もやにかくれし照てる男をの神かみはも

高照たかてるの山やまの麓ふもとの神かみ々がみも

安やすく榮さかえむ此この神かみいまさば  
□

世司よつかさひめ比女かみの神かみは御歌謡みうたうたひ給たまふ。

□ 勇いさましき神かみの姿すがたよ駿馬はやこまの

早はやくも見みえずなりにけらしな

目路めぢの限かぎり霞かすむ大野おほのを驅かけて行ゆく

駒こまの蹄ひづめの音おとひびくなり

高照たかてるの山やまは白雲しらくも帯おびにして

白馬はくばの神かみを迎むかへ奉まつらむ  
□

大物主おほものぬしの神かみは御歌謡みうたうたひ給たまふ。

ㄣ 駿馬はやこまの早御姿はやみすがたは隠かくるひぬ

照男てるをの神かみの勇いさましき旅たび

千萬ちよろづの名残なごりを後あとに勇いさましく

照男てるをの神かみは出いで立たちにけり

高照たかてるの山やまも照男てるをの神かみまさば

醜しこの大蛇をろちも籠こもり得えざらむ

河守かはもり比女ひめの神かみは御歌みうた謠うたひ給たまふ。

ㄣ 月つきも日ひも清きよく照男てるをの神司かむつかさ

西にしの御國みくにに出いでましにけり

吾魂わがたまと贈おくりし駒こまに跨またがりて

出いでます姿すがた雄々をしかりける

吾魂わがたまは駒こまにいつきて西にしの國くにを

安く守らむ神司と共に  
□

眞澄の神は北の國を拓き給はむと、諸神に暇をつげ立出むとして駒の背に跨り  
ながら、左手を頭上に翳しつつ御歌詠まし給ふ。

□ かかる世に太元顯津男の神よ

いざいざ立たむ眞澄神吾

御子生みの神業を確に終へ給ふ

神の功績ぞ尊かりける

貴の御子宿らせ給ふと村肝の

心安らぎ吾は出で行く

世司の神よ朝夕心して

御腹の御子を守らせ給へ

大物主神の神言よ二柱の

神かみを守りまもりてまさきくありませ

河守かはもりの比女ひめの眞言まことに貴うづの御子みこ

生あれまます神世みよとなりにけらしな

日向ひむか河中がはなかに拓ひらかむ北きたの國くに

天地てんち眞澄ますみの清所すがどとなさばや

いざさらば館やかたを守まもる神々かみがみよ

吾われは進すすまむ北方ほくばうの國くにへ

と謠うたひ終り駒こまの頭かしらを立て直たし一鞭ひとむちあてて鈴すずの音ねも勇いさましくシヤンコシヤンコと立た

ち出いで給たまふ。

顯津男あきつをの神かみは別わかれを惜をしみて御歌みうた詠よまし給たまふ。

勇いさましく眞澄ますみの神かみは出いでましぬ

館やかたの神かみに心こころのこしつ

朝夕あさゆふに我われを守りし神々かみがみの

其その大方おほかたは出いで立たちましぬる

四柱よはしらの神かみは遙はるけく出いでまして

何なにか淋さびしき此この館やかたかも

北きたの國くにに眞澄ますみの神かみの出いでまさば

頓とみに榮さかえむ山やまも大野おほのも

駿馬はやこまに鞭むちうち立たたす御姿みすがたは

日向ひむかの河かはの早瀬はやせに似にたるも

我言わがことば葉そむ反そむき給たまはず四柱よはしらは

先さきを争あらそひ出いでましにける

世司よつか比女さひめの神かみは御歌みうた詠よまし給たまふ。

四柱よはしらの神かみの立たたせし此館このたちは

うら淋しもよ風もしづみて  
やがて今美しき國を造り終へ  
かがやき給はむ日こそ待たるる』

大物主の神は御歌詠ひ給ふ。

㊦ 比古神に従ひてこし五柱の

神四柱は出でましにけり

四柱の神に別れて吾は今

近く仕へむ二柱の神に

東雲の國は今日より彌榮に

拓け榮えて果しなからむ』

河守比女の神は又謠ひ給ふ。

四柱よはしらの神かみ勇いさましく出いでましぬ

此この國くに原はらを拓ひらかむとして

此この館たちに豊ゆたに太た豊ゆたに鎮しづまりて

國くに造つくりませ瑞みづの御み靈たまよ』

(昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 森良仁謹録)

### 第三四章 國魂くにたまの發生はつせい(一八六五)

太元おほもと顯あきつ津男つをの神かみは 五柱いつはしらの神かみ從したがへて

日向ひむかの早はや瀬せを打うち渡わたり 玉泉ぎよくせん郷きやうに出いでまして

八十やそひ比め女神がみのその中なかに すぐれて賢さかしき細くは女しめの



世司比女に廻りあひ  
右り左の神業に  
水火と水火とは固まりて  
月の雫は比女神の  
体内深く止まりぬ  
之より比女は日に月に  
御身重らせ給ひつつ  
御子の生れます吉き日をば  
喜び待たす許りなり  
御供に侍りし五柱  
中に大物主を置き  
他四柱の神々は  
西や東や北南  
四方の國原拓かむと  
顯津男の神言もて  
貴の館を立ち給ひ  
俄に淋しくなりませり  
東の空は東雲めて  
紫雲棚引く貴の國  
東雲國の眞秀良場に  
世司比女の御館  
美々しく清しく建ち給ふ。

ここに太元顯津男の神は、  
月満ちて比女神と別るるとき  
庭の最中  
の眞清水に、朝夕に禊しつ、  
御子に恙もあらせじと、  
祈り給ふぞ畏けれ。

遅ぢの神かみの御前みまへに恭うやうやしく坐ざして、御歌みうた詠よませ給たまふ。  
比ひ女め神がみの御腹みはらは、日ひを重かさねつつ、追おひ々おひ益ます々ますに太ふとらせ給たまひ、呼い吸きも苦くるしげに比ひ古こ

☐ 一ひと度たびの契ちぎりながらも吾わが御腹みはら

月つきを重かさねて太ふとくなりぬる

御腹みはらの子こ恙つつがあらせじと朝あさ夕ゆふに

吾われは祈いのるも誠まことをこめて

この御腹みはら安やすく開ひらけて御子みこ生うまれ

生おひ立た坐ますまで岐き美み離さかりますな

大神おほみわぎ業わざいかに尊たふとくおはす共とも

御子みこ生うみの業わざは軽かるからず思おもふ

顯あきつ津つ男をの神かみは謠うたひ給たまふ。

主スの神かみの依よさしの神みわざ業な成なり成なりて

御み子こ生あれますと聞きくぞ嬉うれしき

主スの神かみの我われに賜たまひし御み樋ひ代しろよ

汝なれの功い績さをはあらはれにけり

御み子こすでに宿やどらすと聞きけば愛いとこ戀ちやの

公きみと寢いねなむすべもなきかな

主スの神かみの御み子この宿やどらすこの館たちは

高たか天あま原はらの清すが所どなりけり

朝あさ夕ゆふを心こころ安やすけく在ましませよ

御み腹はらの御み子こを守まもらひにつつ

世よ司つか比かさ女ひめの神かみは謠うたひ給たまふ。

朝あさ宵よひに心こころの御み綱つな引ひきしめて

苦しけれ共御子を守らむ』

斯く謠はせ給ふ折しも、俄かに御腹痛み給へば、比古遅の神は驚かせ給ひて、

大物主神はいづくぞ河守比女

神はいづらぞ疾く來りませ』

と朗に詠ませ給ふ御歌に、大物主の神、河守比女の神は、いそいそとここに現れ來り、大物主の神は、

天晴々々御子の生れます時は來ぬ

月日の神よ守らせたまへ

安らけく生まれ給はむ比女の神の依さしの御子にありせば

東雲しののめの國くには今日けふより神柱かむばしら  
生あれ出いでましていや榮さかゆべし  
』

河守かはもり比女ひひめの神かみは欣然きんぜんとして、

』  
吾わが待まちし御子みこの生あれます時ときは來きぬ

天地あめつちの神かみ守まもりませ

世司よつか比女さひめ神かみよ靜しづかにおはしませ

御子みこ安やすらかに生うまれますはも  
』

世司よつか比女さひめ』御子みこを生うむ業わざに仕つかへし其日そのひより  
いといも苦くるしき今日けふなりにけり  
』

河守比女かはもりひめ 主すの神かみの御水みい火きのかかりし御子みこなれば

安やすらに平たひらに御子みこ生まれませ給たまはむ

斯かく謠うたひ給たまふ折をりもあれ、「ウア」の聲こゑをあげて玉たまの如ごとき姫御子ひめみこ生まれましぬ。女め  
男を二神にしんを初はじめ、大物主おほものぬし、河守比女かはもりひめ二神にしんは、歡えらぎ喜よろこび産湯うぶゆ等などを取とりて、御子みこの體からだを  
洗あらひ清きよめ、正座しやうざに据すゑ置おきて謠うたひ給たまふ。

久方ひさかたの空そらは雲くもなく晴はれにつつ

地つちも光ひかりて御子みこ生まれましぬ

東雲しののめの空そら晴はれ渡わたり玉たまの御子みこ

國魂くにたま神がみは生あれましにける

この御子みこや生あれます上うへは東雲しののめの

國くには安やすけく榮さかえますらむ

顯津男の神は歡びの餘り、天を拜し地に伏して合掌し乍ら、

久方の天の岩戸は開けたり

世司比女の貴の力に

今日よりは月日も清く星清く

これの國原照りまさるらむ

主の神の稜威の恵のいや廣に

今日のよろこび齋らし給へり

河守比女の神は謠ひ給ふ。

東雲の國原明くなりけり

瑞の御靈の御子生れませば

この館に比女の神言をかばひてし

久しき吾はむくいられける』

ここに生れませる玉の御子を、大物主は抱き上げ祝し給ふ。

足引の山も大野も言靈の

水火を合せて壽ぎまつらむ

天地の一度に開くる思ひかな

神の依さしの御子の出でまし

大物主神は今日より御子の爲

あかき心を永久にささげむ』

太元顯津男の神は、今日の生日に生れませる御子に、日向の姫と申す御名を授け給ふ。



この御子は日向の河の眞清水の

靈なりせば日向姫とふ

日向姫神の恵に生ひ立ちて

これの神國を領有ぎませよ

我御子と思へど正しく主の神の

御子にしありせば敬ひ奉るも

世司の比女神よ御子の生れましし

今日より日向姫に仕へよ

世司比女は御歌詠まし給ふ。

畏しや比古遅の神の大神宣

うなじにうけて守り奉らむ

主の神の御水火に成出し御子なれば

吾<sup>われ</sup>はいつかむ朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なを  
この御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>や生<sup>お</sup>ひ立<sup>た</sup>ちまして東雲<sup>しののめ</sup>の  
司<sup>つかさ</sup>にならずと思<sup>おも</sup>へば尊<sup>たふと</sup>き』

大物主<sup>おほものぬし</sup>の神<sup>かみ</sup>は祝<sup>ほ</sup>ぎ歌<sup>うた</sup>宣<sup>の</sup>り給<sup>たま</sup>ふ。

日向<sup>ひむかひめ</sup>姫<sup>うづ</sup>貴<sup>やかた</sup>の館<sup>あ</sup>に生<sup>あ</sup>れましぬ

早<sup>は</sup>や東雲<sup>しののめ</sup>の國<sup>くに</sup>は明<sup>あ</sup>けたり

東雲<sup>しののめ</sup>の空<sup>そら</sup>に昇<sup>のぼ</sup>らず日<sup>ひ</sup>の神<sup>かみ</sup>の

光<sup>ひかり</sup>に等<sup>ひと</sup>し御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>の姿<sup>すがた</sup>は

日向<sup>ひむかひめ</sup>姫<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>こそ畏<sup>かしこ</sup>けれ

東雲<sup>しののめ</sup>の國<sup>くに</sup>に生<sup>あ</sup>れましぬれば

日向<sup>ひむかがは</sup>河流<sup>はなが</sup>るる清<sup>しみづ</sup>水<sup>ましみづ</sup>は

御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>の生<sup>お</sup>ひ立<sup>た</sup>ちひたしこそすれ』

ここに日向姫の命は、大物主の神、河守比女の神の日々の養育と、世司比女の慈愛こもれる真心の乳房に、すくすくと伸び立ち給ひたれば、顯津男の神は、神業の成りしを喜び給ひて又もや御子生み、神生みの神業に仕へ奉るべく、一切の事を大物主の神に托し置き妻神に暇を告げて、遠く遠く神生みの旅に立たす事はなりぬ。

(昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 谷前清子謹録)

### 第三五章 四鳥の別れ〔一八六六〕

茲に顯津男の神は、主の大御神の依さしの神業の其の一部の成りしをいたく喜び給ひ、世司比女の神、日向姫の命の神人を、大物主の神に頼みおき、且つ河守比女の神に厚く謝辭をのべ乍ら、名殘惜しくも住みなれし此の館を立ち出でむと  
して、御歌詠まし給ふ。

久方ひさかたの天あめの高宮たかみやいや高たかに

われは仰あふがむ神生かみうみ終をへて

わが心こころ天津日あまつひの如ごと晴はれにけり

國魂くにたま神がみは安やすく生あれまし

國魂くにたまの神かみの生あれます今日けふよりは

依よさしの神業みわざまたも仕つかへむ

世司よつか比さ女神ひめかみに別わかれてわれは今いま

南みなみの國くにに進すすまむとすも

高照山たかてるやま南みなみにひらく神國かみくには

あらぶる神かみの多おほしとぞ聞きく

この館やかた久見ひさみることはあたはじと

おもへば寂さびしきわが思おもひなり

日向ひむか姫ひめの命みことよ汝なれはすすく

育そだちて國くにの柱はしらとなりませ

日向姫命の御前を離るとも

われは忘れじ愛ぐしみにつつ

世司の比女神われに別るとも

歎かせ給ひそ惟神なれば

われこそは神國をひらき神を生む

司にしあれば留まり得ずも

此の御歌を聞くより、世司比女の神は、追慕の念止みがたく、御聲を曇らせ乍ら御歌うたひ給ふ。

みづみづし瑞の御靈の神柱は

幾代ふるともわれ忘れめや

露の間の契と思へば悲しもよ

夜ごと夜ごとを如何に眠らむ

高照たかてるの峰みねより高たかき瑞御靈みづみたま

神かみに別わかれて何なにたのしまむ

年とし月つきをけながく待まちて逢あひ初そめし

岐美きみははやくも別わかれ立たたすか

凡ただがみ神かみの身みにおはさねば出いでましを

止とどむる術すべもわれなかりけり

よしや岐美きみ萬里ばんりの外そとにおはすとも

忘わすれ給たまひそわれと御子みことを

日向ひむかひめ命みことを育そだて岐美きみの前まへに

捧ささげむよき日ひなきぞかなしき  
□

大物主おほものぬしの神かみは御歌みうたうたはせ給たまふ。  
。

□ 二柱神ふたはしらかみの心こころをおしはかり

われは涙なみだにくれにけるかも

斯かかる世よにかかる歎なげきのおはすとは

夢ゆめにもわれは思おもはざりしよ

この上うへは御み子こを守まもりて比ひめ女神がみに

安やすく仕つかへむ岐き美み出いでまさね

比ひめ女神がみのあつき心こころを知しりながら

出いでます岐き美みを雄を々をしとおもふ  
』

河かは守もり比ひめ女めの神かみは謠うたひ給たまふ。

☐ この上うへは神かみの神みわざ業わざよ妨さまたげじと

思おもひ直なほしつ名なごり残を惜をしまる

玉たま泉いづみ湧わき立たつ清しみづ水づ眞ま清しみづ水づは

岐き美みの姿すがたを永と久はに浮うかべむ

ふたはしらむか  
二柱向ひ立たして御姿を

うつし給ひしことを忘れじ

つきひ  
月も日も朝夕浮ぶ玉泉

わす  
忘れたまひそこれの眞清水

おほぞら  
大空の月も宿らす玉泉

きみ  
岐美の姿のうつらであるべき

ときはぎ  
常磐木の松の梢の色ふかみ

きみ  
岐美の御ゆきを送る今日かも

まんねん  
萬年の齡たもてる大幹の

くす  
楠の梢は露垂らしつつ

くす  
楠の木の葉末の露は岐美を送る

まことのしたたる涙なるかも

あきつを  
顯津男の神は暗然として兩眼に涙を湛え乍ら、  
ひらりと馬背に跨り御歌詠まし



給たまふ。

足あし曳びの山やまの百もも草ぐさ八やち千ぐさ草さも

露つゆにうなだる神み代よなりにけり

東しの雲のめの國くには廣ひろけし比ひ女め神がよ

心こころくばりて安やすくましませ

住すみなれしこれの館やかたに別わかれ行ゆく

苦くるしき我われの心こころをさとらせ

朝あさ夕ゆふに御み子この聲こゑ聞ききし樂たのしさも

今け日ふより聞きき得えず我われは淋さびしも

いざさらば名な残ごりは盡つきじ神かみたちよ

國くにつくるべくわれは立たたなむ

と謠うたひ給たまひて、馬ば背はいに鞭むちち神み姿すがた勇いしく玉ぎ泉よくせん郷きやうを立たち出いで給たまふ。

世よ司つか比さ女ひめの神かみは御みあ

後見送りながら、ハツとばかりに泣き伏し給ふ其の眞心ぞあはれなりけり。大物  
主の神は御後遙かに見送りながら、

☞ 天晴々々貴き瑞の御靈はや

只一柱大野を馳せませす

紫の瑞氣ただよふ東雲の

廣き國原獨り進ますも

瑞御靈これの館に現れまして

命生みませし事の畏き

千萬のなやみに耐へて瑞御靈

國つくります神業尊し

百神の醜のさやぎをよそにして

國つくります雄々しき神よ

大空にかがやく月の光澄みて

玉たまの泉いづみはかがやきにけり

瑞御靈みづみたまこれの館やかたにまさずとも

この玉泉ぎよくせんを御靈みたまと仰あふがむ

村肝むらきもの心淋こころなびしき夕ゆふぐれは

玉たまの泉いづみの月つきを仰あふがむ

せめてもの岐美きみの名残なごりと玉泉たまいづみ

夕ゆふべを仰あふぎまつらな

世司よつかさ比女ひめの神かみは、やうやう心こころをとり直なほし儼然げんぜんとして立たち上あがり、玉泉たまいづみの前まへに近ちか寄より御歌詠みうたよまし給たまふ。

永久とことはに澄すみきり漂ただよふこの泉いづみは

瑞御靈みづみたまか月宿つきやとります

比古神ひこがみのこれの館やかたにまさずとも

玉たまの泉いづみはわれをなぐさむ

仰あふぎ見みれば空そらに月つき讀よみ俯ふして見みれば

玉たまの泉いづみにやどらす月つきかけ

久ひさ方かたの御み空そらを渡わたる月つき讀よみの

御み靈たまにそひて御み子こを生うみけり

この御み子こはいたづら事ことに生あれ出いでし

命みことにあらず神かみの御み靈たまよ

駿はやこま馬まに鞭むちうち出いでし比ひこがみ古こ神かみは

今いまやいづこを驅かけりますらむ

わが靈たまは岐き美みの乗のらせる駿はやこま馬まに

いそひて行ゆくも月つき照てる野の邊べを

夢ゆめ現うつ露つゆのちぎりの岐き美み送おくる

今け日ふの夕ゆふべのはかなき思おもひよ

村むらぎも肝こころの心こころを洗あらふ玉たま泉いづみ

うつらふ月はわが命かも  
『

河守比女は御歌詠ませ給ふ。  
。

雄々しくも神の御業に仕へむと  
』

妻子をあとに岐美立ちにけり

ただ一人果しも知らぬ國原に

鞭たす岐美の雄々しさおもふ

雄々しくも優しくませし瑞御靈

かたみと泉に月を浮かせり

今よりは日向の姫の命をば

育みまつり國を治めむ

大物主の神の御稜威に日向姫

國の柱と生ひ立ちまさむ  
』

いづれも述懐の歌詠み給ひつつ、主の立ち出でし館に神言を奏上し、其の夜は  
淋しく語り明し給ひけるが、比古神を戀ふる心の愈々深く悲しく、世司比女の神  
は東雲の空近く、三層樓の高殿に登り、南方を遙かに打ち見やりつつ御歌詠まし  
給ふ。

☞ 天晴々々雲のあなたに出でましし

岐美はいづらぞ心もとなや

むらさきの雲は南にたなびけり

ああこの清しき紫の雲はや

東雲の國魂神を生みおきて

雄々しき岐美は立たせけるかも

戀ほしさの心は同じわが岐美の

あつき心を愛しとおもふ

ままならば瑞の御靈と諸共に

いづくの果も照らさむものを

南みなみの空そらにかがやき給たまふべく

岐美きみははるけく出いでましにける

かりごもの亂みだれ果はてたる國原くにはらを

治をさめますらむ岐美きみの稜威みいづは

岐美きみは今いまいづらの空そらを驅かけますか

われは戀こひしもあとに残のこりて

比古ひこ神がみに再ふたび逢あはむ術すべもなき

わが身みとおもへばひたに悲かなしも

愛善あいぜんの光ひかりに満みつる神代みよにして

かかる歎なげきのありと知しらざりき

村肝むらきもの心こころの駒こまをたて直なほし

われは歎なげかじ神かみの御前みまへに

なげかへばひたに曇くもらむ國原くにはらと

おもひあきらめ世に生きむかも

主スの神かみよ瑞みづの御靈みたまの行先ゆくさきに

幸さちあれかしと守まもり給たまひね」

世よつ司かさ比女ひめの神かみは、一切いっさいをあきらめ給たまひ、高殿たかどのを降おりて玉たまの泉いづみに禊みそぎしつ、是これより  
二柱ふたはしらの神かみと共ともに朝夕あさゆふ心を配くばり、力ちからを合あはせ、御子みこを守まもり育そだて、東雲しののめの國くにを千代ちよに八や  
千代ちよに守まもり給たまひしぞ畏かしこけれ。

（昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 内崎照代謹録）

### 第三十六章 荒野あらのの駿馬はやこま（一八六七）

高地たかちほやま秀山おほみやの大宮おほみやと

高日たかひの宮みやにましまして



數多の神にかしづかれ

輝き給ひし神司

主の大神の神言もて

貴の神業仕へむと

百の悩みをなめ給ひ

美玉の姫の命をば

後に残していそいと

命に名残惜しみつつ

五柱の神従へて

さしもに廣き日向河

激流渡り漸くに

東雲國に着きにけり

玉泉郷に身をよせて

日向の姫の命をば

嚴のみいきに生ませつつ

今日は淋しき獨旅

神馬に跨りカツカツと

蹄の音も勇ましく

南をさして出で給ふ

如衣の比女には先だたれ

世司比女には生き別れ

いとしき御子をあづけおき

主の大神のみよさしの

神業に仕へまつらむと

晝と夜とのけぢめなく

嵐に面を吹かれつつ

出でます姿ぞ勇ましき

右も左も荒野原

目路の限りは萱草の 風にさゆるるばかりなり

瑞の御靈は馬上より この光景をみそなはし

かくまで荒れし國原を 開きて神を生まむこと

安き神業にあらざるを つくづくなげき給ひつつ

千里の野路を渡り終へ 此處に横ふ廣河の

堤に駒を降りまし しばらく息を休めけり

ああ惟神々々 遠き神代の天界の

國生み神生みの神業は 現代人の想像の

迎も及ばぬ難事なり。

瀬深く、やや薄濁りて西方に流れゐたり。 顯津男の神は堤上に立たせ給ひて、  
先に渡り給ひし日向河に比ぶれば、約二十分の一の流ながら、相當に廣く、水

國造り神を生まむとわれは今

此この横河よこがはに行き當りける

河守比女神かはもりひめかみの出いでましあるならば

これの水瀬みなせをとどめ給たまふを

村肝むらきもの心淋こころなびしも黄昏たそがれて

この河土手かはとてにわが獨り立たつ

如何いかにしてこれの流ながれを渡わたらむや

駒こまはあれども水瀬みなせはげしき

雷いかづちの轟とどろく如ごとき瀧津瀬たきつせの

音おとにわが駒驚こまおどろき騒さわぐも

黄昏たそがれの河かはの岸邊きしべに佇たたずめば

河風かはかぜそよぐ篠しのの笹原ささはら

さらさらと小笹をささ揺りて吹ふきまくる

風かぜは強つよしも物騒ものさわがしも

河かはの邊べにわれ黄昏たそがれて是非ぜひもなし

東雲しののめの空そら待ちわびむかな

ひた濁にごるこれの流ながれは物凄ものすごし

醜しこの大蛇をろちの潜ひそむがに見みゆ

主スの神かみの教をしへを守まもる神生かみうみの

わがゆく旅たびは苦くるしかりけり

世司よつかさの比女神ひめがみ今いまや高殿たかどのに

上のぼりてわが名呼なよびたつるらむ

大物主神おほものぬしかみの心こころをおしはかり

今いまや淋さびしくなりにけらしな

折々をりをりに水瀬みなせの音おとの變かはるこそ

あやしきろかもこれの流ながれは□

處こに現あらはれ來きたり、瑞みづの御靈みたまをうやうやしく迎むかへながら、御歌詠みうたよまし給たまふ。  
かく御歌詠みうたよます折をりしもあれ、近見男ちかみをとこの神かみは數多あまたの神々かみがみを従したがへ、白馬はくばに跨またがり此こ

☐ あはれあはれ瑞の御靈は出でましぬと

われさとらひてい迎へまつるも

小夜更けの河邊に獨ゐますこそ

畏れ多しもこの駒に召せ

瑞御靈乗らせる駒は疲れ居り

この早河を渡るにふさはじ

この御歌に、顯津男の神は勇みたち、直に御歌もて應へ給ふ。

☐ 小夜更けの此の河邊になづみてし

われ迎へむと來りし公はや

横河の流れはひたに濁らひて

大蛇の神の潜むがに思ふ

只獨り荒風そよぐ河の邊に

心淋しく夜を更かしぬる』

近見男の神はうたひ給ふ。

玉泉貴の館を立ち出で

吾は荒ぶる神を和めつ

今此處に従ひ來る神達は

何れも荒ぶる神なりしなり

言靈の嚴の力にまつるひて

神業に仕ふる神とならせる

われも亦ただ一柱白駒の

背に跨りて此處に來りし

この河は未だ渡らず大蛇棲むと

思へば今日までためらひにける

海原うなばらをさぐり求めて水みづ走る

雄を々をしき駒こまを引ひきて來きたりぬ

いや先さきに嘶いななく駒こまに岐き美み召めせよ

主スの御み水い火きより生あれし駒こまなる  
□

顯あ津き男つの神かみは應こたへて謠うたひ給たまふ。

主スの神かみの御み水い火きに生あれし駒こまなれば

凡ただ駒こまならず神かみにいまさむ

主スの神かみの御み靈たまの水い火きの凝こり凝こりて

駒こまとなりけむわれ渡わたすべく

横よこ河がはの流ながれは如い何かに高たかくとも

これの神馬しんめは安やすく渡わたらむ  
□

近見男の神は、

□ いざさらば瑞の御靈よ百神よ  
われに續かひ渡らせ給へよ

と、謠ひもあへず、ザンブとばかり激流めがけて駒を追ひやり給へば、顯津男の神も百神も、われ後れじと手綱ひきしめ鞭をあて、大龍の激流を渡るがごとく、  
驀地に南の岸にのぼらせ給へり。

顯津男の神は渡り來りし流を振り返りながら、

□ 近見男の神の神言と主の神の

守りに安く渡りけるかも

この駒や主の大神の言靈の  
凝りしと思へば尊かりけり



言靈ことたまの力ちからに物ものは成なり出いづと  
深ふかく悟さとりぬ今いまの河越かはこえに  
百神ももがみは一柱ひとばしらもおちず速河はやかはを  
渡り給わたへり勇いさましきかも  
』

近見男ちかみをの神かみは答こたへて謠うたひ給たまふ。

瑞御靈神みづみたまかみの神言みことの言擧ことあげに

われ恥はづかしくなりにけらしな

主スの神かみの神言みことかしくみ駿馬はやこまを

岐美きみの御爲みために招まねき來きしのみ

今日けふよりはわれも御側みそばに侍はべりつつ

貴うづの神業かむわざあななひまつらむ  
』

顯津男の神はうたひ給ふ。

大野原獨淋しく來しものを

今賑しく汝に會ひぬる

今よりは十一柱神伴ひて

南の國原拓かむとぞ思ふ

行く先に如何なる山河横ふも

この駒なれば安く渡らむ

ここに、十一柱の神の中より勝れて御背の高き神、御側近く駒を進め、左手を  
天にさしかざし右手を馬の背に向けながら、御前に御歌うたひ給ふ。

われこそはアの言靈になり出でし

圓屋比古の神御供に仕へむ

この國くにを造つくらむとして朝夕あさゆふに

惱なやみけるかも魔神まがみのために

近見ちかみ男をの神かみの出いでましありしより

わが神業かむわざはひらけ初そめたり

瑞御靈神みづみたまかみのみあとに仕つかへむと

われは幾年いくとせ幾日いくひ待ちしよ

願ねがはくば御供みともに使つかひ給たまへかし

眞心まごころ清きよく光ひかる神かみはや  
□

顯津男あきつをの神かみは御歌みうたうたひ給たまふ。

☐  
かねて聞きく圓屋まるや比古ひこの神かみは公きみなるか

雄々ををし勇いさましうづの御姿みすがた

國造くにつくり神生かみうむ業わざを助たすけむと

汝なれ圓屋比古まるやひこ現あれましにけむ

主スの神かみの御心みこころなりと喜よろこびて

われは許ゆるさむ旅たびの御供みともを」

圓屋比古まるやひこの神かみは、儼然げんぜんとして謠うたひ給たまふ。

有あり難がたし岐美きみの言靈ことたま聞きくにつけ

わが魂たましひはをどり出いでつつ

赤あかき清きよき正ただしき心こころを楯たてとして

仕つかへまつらむ岐美きみの御側みそばに」

いや先さきには近見ちかみ男をの神かみ、草くさをふみしだきつつ進すすませ給たまひ、次つぎに太元おほもと顯津男とあきつをの神かみ、

次に、圓屋比古まるやひこの神かみは九柱このはしらの神々かみがみを従したがへ、駒こまの轡くつわを竝ならべて、未いまだ神跡しんせきなき大曠原だいくわうげんを、言靈歌ことたまうたを宣のりながら進すすみ給たまふ。近見ちかみ男をの神かみは馬上ばじやうゆたかに、

果<sup>は</sup>てしも知らぬ薄<sup>すすきはら</sup>原

この曠<sup>くわうげん</sup>原の眞<sup>まんなか</sup>中を

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>みたま</sup>靈と諸<sup>もろとも</sup>共に

國<sup>くに</sup>魂<sup>たまがみ</sup>神を<sup>う</sup>生<sup>う</sup>まむとて

進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>くこそ勇<sup>いさ</sup>ましき

圓<sup>まる</sup>屋<sup>や</sup>比<sup>ひ</sup>古<sup>こ</sup>神<sup>がみ</sup>百<sup>もも</sup>神<sup>がみ</sup>よ

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>みたま</sup>靈を<sup>まも</sup>よく守<sup>まも</sup>り

心<sup>こころ</sup>を注<sup>そそ</sup>ぎて出<sup>い</sup>でませよ

嵐<sup>あらし</sup>は如何<sup>いか</sup>に強<sup>つよ</sup>くとも

醜<sup>しこくさ</sup>草如何<sup>いか</sup>に繁<sup>しげ</sup>るとも

大<sup>をろち</sup>蛇<sup>しよしよ</sup>は處<sup>しよしよ</sup>々に潜<sup>ひそ</sup>むとも

如何<sup>いか</sup>で恐<sup>おそ</sup>れむ主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>の

嚴<sup>いづ</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たまさち</sup>幸<sup>ちは</sup>ひて

道<sup>みち</sup>の隈<sup>くまで</sup>手<sup>て</sup>も恙<sup>つつが</sup>なく

千里萬里もすくすくと

安く進ませ給ふべし

行く手に如何なる難關の

あるか知らねと言靈の

水火を照して取りのぞき

神の依さしの神業を

うま怜に委曲に爲し遂げて

天津御祖の御前に

復命言葉白すまで

撓まず屈せず進むべし

天津祝詞の太祝詞

天に響きて月となり

星ともなりてきらきらと

わがゆく先を照すべし

われらは神なり言靈の  
稜威によりて生りしもの  
如何でか曲をおそれむや  
ああ惟神々々  
嚴の言靈尊けれ

圓屋比古の神は謠ひ給ふ。その歌、

主の大神の神靈より  
生れ出でませしアの聲の  
水火固まりてなり出でし  
圓屋比古神ここにあり  
瑞の御靈の神生みの  
神業を助けまつらむと

大峽小峽に身を潜め

生言靈を宣りゐたる

折しもあれや醜神は

山の尾上や河の瀬に

さやりて百の災を

起しゐるよと聞くよりも

如何に言向け和さむと

心を碎く折もあれ

高日の宮より降ります

近見男の神現れまして

互に眞言を語りつつ

心を合せ神力を

一つになして國生みの

神業に仕へまつらむと



案<sup>あん</sup>じわづらふ折<sup>をり</sup>もあれ  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>の出<sup>い</sup>でましを  
風<sup>かぜ</sup>の便<sup>たよ</sup>りに聞<sup>き</sup>きしより  
近<sup>ち</sup>見<sup>かみ</sup>男<sup>をとこ</sup>の神<sup>かみ</sup>諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に  
九<sup>この</sup>つ神<sup>がみ</sup>を引<sup>ひ</sup>連<sup>きつ</sup>れて  
御<sup>み</sup>供<sup>とも</sup>に仕<sup>つか</sup>へまつらむと  
喜<sup>よろこ</sup>び勇<sup>いさ</sup>み來<sup>きた</sup>りけり  
いづくの荒<sup>あらの</sup>野<sup>の</sup>にさまよふも  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>のます限<sup>かぎ</sup>り  
何<sup>いづ</sup>れの神<sup>かみ</sup>も恐<sup>おそ</sup>れじと  
はかりはからひ神<sup>かむ</sup>業<sup>わざ</sup>の  
御<sup>み</sup>供<sup>とも</sup>に仕<sup>つか</sup>へまつりけり  
あ<sup>かむ</sup>あ<sup>な</sup>惟<sup>ながら</sup>神<sup>かむ</sup>々<sup>ながら</sup>々<sup>ながら</sup>  
巖<sup>いづ</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>の幸<sup>さち</sup>ひて

吾等十柱神達を

いや永久に變りなく

神業に使用ひ給へかし

偏に願ひ奉る

偏に願ひ奉る

ここに、瑞の御靈顯津男の神一行十二柱は、白馬の轡を竝べ、南へ南へと進ませ給ふ。

(昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 林彌生謹録)

### 第三十七章 玉手の清宮(一八六八)

ここに太元顯津男の神は、近見男の神、圓屋比古の神達十一柱を率ゐて、際限

もなき曠原を渡り、夜を日に次いで、南の國原さして進ませ給ふ。遙か南方の空  
にかすめる高山あり、顯津男の神は、駒をとどめて遙かにかすむ山を打ち眺めつ  
つ御歌うたはせ給ふ。

南の遠野の奥にぼんやりと

かすめる山は三笠山かも

われは今三笠の山に進むなり

早や近づけり行手の山は

薄雲の衣をかぶりて泰然と

立たせる山の雄々しきろかも

目路の限り荒野の中を分けて行く

われには珍し三笠の神山

大蛇棲むと聞くなるこれの曠原も

わが行く道は影だも見せず

三笠山麓の貴の神館は

現世比女のありかなりとふ

現世の神に御逢ひて御子を生む

わが神業も近づきにけり

近見男の神は謠ひ給ふ。

たづね行く三笠の山も近見男の

心勇ましくなりにけらしな

現世の比女神岐美の出でましを

待たせ給はむ疾く進ませ

天も地も岐美がみゆきを守らすか

この曠原にそよ風もなし

圓屋比古の神は又うたひ給ふ。

□  
こんもりと天に聳ゆる三笠山の

ほのけき姿仰げば樂しも

幾千里荒野を渡り來しわれの

目にめづらしき三笠山はも

瑞御靈御供に仕へて遙の野に

聳ゆる神の山を見しはや

村肝の心勇まし三笠山

われを待つがに思ほへにつつ

いざさらば進ませ給へ近見男の

神に従ひわれも進む

顯津男の神の後前守りつつ

荒野を分けて進む樂しさ

近見男の神は先頭に立ち、  
馬上豊かに謠ひ給ふ。

㊦  
限りもしらぬ荒野原

瑞の御靈に従ひて

萱草わけつ来て見れば

遙かの空にかすみたる

山は正しく三笠山

現世比女の永久に

鎮まりいまして神生みの

神業に仕へまつらむと

長の年月待ち給ふ

いよいよここに天の秋

到りて顯津男の神は

現世比女に御逢はむと

出いでます今日けふの佳よき日ひこそ

主スの大神おほかみも嘉よみすらむ

われ等らも尊たふとき神かみ生うみの

神み業わざの供ともに仕つかへつつ

いや先さきに立たち草くさを分わけ

道みち芝しばひらきて進すすむなり

み空そらにかかる月つきかけも

天津あまつ日ひかけも柔やはらかく

われ等ら一行いっかう守まもりまし

道みちの隈くま手ても恙つつがなく

一ひと足あし一ひと足あし近ちかづくは

三み笠かさの山やまの清すがどころ

ああたのもしやたのもしや

貴うづの神み業わざの畏かしこけれ

貴うづの御み供ともぞ畏かしこまれ  
□

圓まる屋や比ひ古この神かみはまた謠うたひ給たまふ。

行ゆく手ては遠とほしいや廣ひろし

限かぎりも知しらぬ大おほ空ぞらに

霞かすみの衣きぬを被かぶりつつ

遠とほき神かみ代よの昔むかしより

貴うづの姿すがたをそのままに

高たかく聳そびゆる三み笠かさ山やま

山やまの姿すがたをまるまると

わがみ見るさへもおとなしく

比ひ女めの神かみ言ことの御み舍あらかと

思おもへば實げにも尊たふとまれ



ああかむながらかむながら惟神々々

生言いくことたま靈の幸さちひて

一日ひとひも早はやく片時かたときも

疾とく速すみやかに聖場せいぢやうに

進すすませ給たまへと願ねぎ奉まつる

顯津男あきつをの神かみは馬ば上じやうより豊ゆたかに謠うたひ給たまふ。

仰あふぎ見みる南みなみの空そらに雲くもの衣きぬ

着きつつつわれ待まつ三笠山みかさやまかも

比女神ひめがみの貴うづの姿すがたを三笠山みかさやま

月讀つきよみの露つゆに濡ぬれもこそすれ

けながくも吾われを待まちます比女神ひめがみの

心こころはかればいつくしみの湧わく

一夜さの契に御子を生まおきて

うつらふわれは苦しかりける

現世の比女神にまたなげかひを

與へて別るる思へばうれたき

ここに神々は十二の轡を揃へ、其日の夕暮、三笠山の聖場玉手の宮に漸く着か

せ給ひける。遠く眺めし霞の三笠山は、案に相違し百花千花全山に咲きみちて、

その麗しさ言はむかたなく、天國のさまを目のあたりにあらはしぬ。現世比女の

神の鎮りいますてふ玉手の宮は、蜿蜒として延び廣がり、常磐の老松枝を交へて

此の清宮をこんもりと圍み、金沙銀砂は月日の光を浴びて、目もまばゆきばかり

輝き渡り、鳳凰巢ぐひ、迦陵頻伽は常世の春を謳ひつつ、天國淨土の光景を現し

つつあり。

近見男の神は眞つ先に駒を進ませ神苑深く入り給ひて、馬上より朗らかに謠ひ

給ふ。

☞ 顯津男の神の出でまし今なるぞ

いむかへ奉れ館の神々

われは今御供に仕へ奉りつつ

いや先き立ちて現れしはや

この御歌に、館を守る三笠比女の神は、蒼惶として宮の階段を下り、駒の前に近づき乍ら、

☞ 近見男の神よ畏し瑞御靈

早くもここに誘ひませ

現世の比女神これの清宮に

瑞の御靈を待たせ給へる

かく謠へる折しも、顯津男の神は諸神を従へ、馬上ゆたかに進み入り給ひて、

☐ われこそは月の御靈よ瑞御靈

はや出でませよ現世比女神

はるばると荒野を渡り今此處に

比女に逢はむとわが來つるかも

三笠比女 幾年を數へて待ちし瑞御靈

今日のいでまし尊とかりける

いざさらば現世比女の神の前に

つげ奉りてむ暫しを待ちませ

と三笠比女の神は、御歌うたひ終へて、  
奥深く入り給ふ。  
顯津男の神は馬背に跨

☐ 花も香もなき荒野原渡り來て

ももばなにほ  
百花匂ふ清所に來しはや

ほうわう  
鳳凰は御空に高く舞ひあそび

かりよつびんが  
迦陵頻伽は春をうたふも

ひろ  
いや廣きこれの清所の青垣は

ときは  
常磐の松にかこまれにけり

ひかげ  
きらきらと日光とどめて金銀の

まさこ  
眞砂は庭に照り耀へるも

かみ  
主の神の生言靈に生れしてふ

いきみや  
この生宮の嚴かなるも

ながたび  
長旅の疲れも今や忘れけり

はなさ  
花咲きみつる神苑に來て

うつしよひめかみ  
現世比女神の神言はわが來る

おじろ  
聞きて驚き給ふなるらむ

近見男の神は馬上より謠ひ給ふ。

百敷のこれの宮居の常磐木は

月日宿してみどりの露照る

千代八千代この神國は變るまじ

常磐の松の茂らむ限りは

圓屋比古の神は謠ひ給ふ。

瑞御靈はるばる御供仕へつつ

これの清所にわが來つるかも

薄原篠の笹原のり越えて

夢かうつつか清所に來つるも

かく謠うたひ終はり、馬うまをひらりと下おり、邊あたりの光景くわうけいを、  
れ、三笠みかさ比女ひめの神かみに導みちびかれて、ここに現あらはれ給たまひしは、  
の女神めがみ、現世うつしよひめ比女ひめの神かみにましき。  
現世うつしよひめ比女ひめの神かみは御歌みうたもて迎むかへ給たまふ。  
各々おのおの賞ほめ稱たたへ給たまふ折をりしもあ  
艷麗えんれいにして威嚴ゐげんの備そなはる貴うづ

わが待まちし比古遅ひこぢの神かみは出いでましぬ

戀こひしき神かみは現あれましにける

岐美きみ待まちてけながくなりぬ吾われはしも

なやみなやみてかくもやせける

神生かみうみの神業みわざを待まちて幾年いくとせを

夜よな夜よな涙なみだにむせびたりしよ

いざさらば比古遅ひこぢの神かみよ案内あないせむ

岐美きみの安所やすどは奥おくにありける

神々かみがみに感謝いやはひごと宣のる道みちさへも

嬉しさをあまりて忘れ居たりし

近見男の神よ許させ給へかし

嬉しさをあまりて宣りおくれける

圓屋比古神のみことは瑞御靈

安く送らせ給ひけるはや

いざさらば百神たちも奥の間の

清所に入りて休ませ給へ

かく謠ひ終へ、太元顯津男の神の御手を引きながら、  
廊下を、踏みしめ踏みしめ奥の一間に導き給ひける。  
現世比女の神は、顯津男の  
神の御手を靜かに握らせ、やや面ほてりながら、  
蜿蜒と架け渡したる長き

待ちわびし瑞の御靈を三笠山  
匂へる花のかをり床しも



岐美待ちて幾年月を経たりけるを  
今日の佳き日に迎へけるかな  
八十神を持たせ給ひし岐美ならば  
われは恨まじ今日が日まで也

顯津男の神は、あまりの感激に打たれて暫し茫然とし給ひしが、

はしけやし公の言靈きくにつけ

わが魂のどよめきやまずも

道もなき荒野ヶ原を渡り來て

今日いとこやの比女に逢ひぬる

愛戀の比女に逢はむと荒野原

駒に鞭ちわが來つるかも

二柱姫の命を生み終へて

公きみを三笠みかさの山やまの花見はなみつ  
□

かく互たがひに述懐じゆつくわい歌をうたひつつ、久美戸くみどにおこして、右みぎり左ひだりの神業みわざを行おこなひ給たまひ、  
その夜よは安やすく寝いねましぬ。近見ちかみ男をの神かみの一行いつかうは廣ひろき一ひと閒まに招せうぜられ、三笠比女みかさひめの  
神かみの厚あつき響應もてなしに旅たびの疲つかれを休やすめつつ、感謝かんしゃの御歌みうたうたひ給たまふ。

□ 天界てんかいの春はるの花はな咲さく三笠山みかさやまは

現世うつし比女よひめのみけしなるらむ

すすき原はらしの篠ささの笹原ささはらふみ分わけて

今宵こよひ樂たのしく花はなを見みるかも

百鳥ももどりの聲こゑもすがしく聞きゆなり

これの清所すがとは國くにの眞秀良場まほらば

幾年いくとせを待まち給たまひたる現世比女うつしよひめは

三笠みかさの山やまの花はなと笑ゑまさむ  
□

圓屋比古の神は謠ひ給ふ。

□ 横河を渡りし心に比ぶれば

天と地とのけぢめありける

いやはての國にすがしき花の山

ありとは夢にも思はざりける

主の神の經綸になりしこの宮は

緑も深き常磐木茂れる

金銀の眞砂の光る清所に

やどらせ給ふ月日のかげよ

かく謠ひて、その夜は安く寝ましける。ここに顯津男の神は婚ぎの神業を終へ給ひ、御子のやどらせ給ふ事をいたく喜び給ひて、百神たちと共に、これの館に幾何の日を過させ給ひ、生れませる御子を、玉手姫の命と名づけ給ひて、圓屋

比古の神をこれの宮居の神の司と定め給ひ、三笠比女の神に、生れませし御子玉  
手姫の命の養育を頼み置き、現世比女の神に名残を惜しみつつ、再び西南の國を  
さして、近見男の神その他を伴ひ出でまししが、その道すがら天之御中の神にあ  
ひ給ひて、相共に神業の爲め進ませ給ひぬ。

（昭和八・一〇・一八 舊八・二九 於水明閣 白石恵子謹録）

~~~~~

靈界物語 第七三卷 天祥地瑞 子の巻

終り